☆星海社FICTIONS

竜騎士07

怪談と踊ろう、そしてあなたは階段で踊る

星海社 FICTIONS

リ1-01

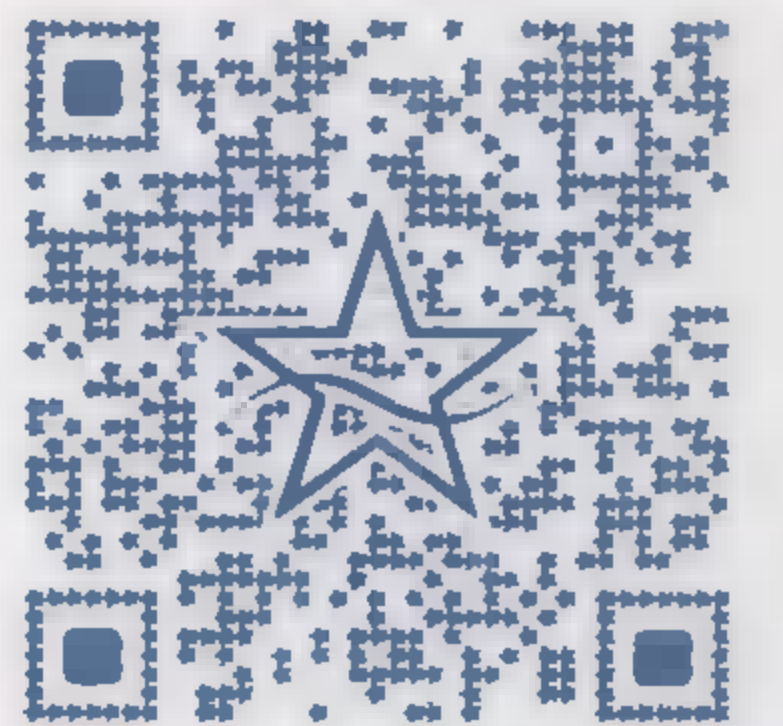
怪談と踊ろう、そしてあなたは階段で踊る

9784061388253

1920093010801

ISBN978-4-06-138825-3
C0093 ¥1080E (0)

定価:本体1080円(税別)

DIVE INTO
THE BOOKREVIEW
&INFORMATION!

「だからさ、……俺たちが作らないか? 新しい祟りをさ。」

学校の七不思議の"八個目"となる"新しい祟り"――「お骨サマの呪い」を僕たちが作った、あの夏。それは、止め処ない悪意と恐怖の幕開けだった――!

あの竜騎士07が文芸雑誌『ファウスト』に寄稿し、小説家デビューを飾った伝説の一編が満を持しての星海社FICTIONS化。傑作『ひぐらしのなく頃に』の世界観ともリンクする極上のホラーをあなたは今、体験する!

星海社

竜騎士07

Illustration／ともひ

隣室は刑事

二階には二部屋ある。
その片方は僕の部屋で、もう片方は元々、おばあちゃんの部屋だった。
だが、数年前に亡くなってから、部屋は空室となった。そして、じわじわと僕の物置部屋となっていった挙句(あげく)、今では両方とも僕の部屋のような状態になっていた。
もちろん、両親からは二部屋使うなんて贅沢(ぜいたく)だと怒られ、おばあちゃんの部屋を片付けなさいと言われてきたのだが…。片付けるのが面倒くさくて、ずるずると今日まで占領してきたのだった。
だが、春を迎え寒さをすっかり忘れた頃、とうとうそういうわけにも行かなくなった。
僕が占領中のこの部屋に、新しい主を迎えなければならなかったからだ。
その主の名は、宮島優花(みやじまゆか)。うちのお父さんの大勢いる兄弟姉妹の一人だった。
「友宏(ともひろ)～！　優花おばさんが来たわよー!!」
階下から聞こえるお母さんの声。それは、おばさんを迎えるために下へ来いと呼んでいるのか、おばさんが来たけど片付けは終わってるんだろうなと確認しているのか、わかり辛(づら)い。

本棚の裏に隠したことをすっかり忘れていたHな本を、懐かしみながら読んでる場合ではなかったのだ。
階段を上りながら、お母さんとおばさんが談笑する声が近付いてくる。
床一面に散らばったHな本だけは見付かりたくない！　そう思い、慌（あわ）ててかき集めて束（たば）ね、一番上にドリル帳を重ねて誤魔化（ごまか）した瞬間にドアが開いたのだった。
「よーぅ、友宏くん！　久し振りだね～！」
開口一番、元気すぎる声が飛び出す。優花おばさんは相変わらずだった。
「どど、どうも、優花おばさん。お久し振りです……！」
「うん、久し振りだね！　おばあちゃんのお葬式で会ったのが最後かな。あれ？　結構、背が伸びたんじゃない？　私より背が高くなったんじゃないの？」
優花おばさんは、叔母（おば）なのでおばさんと呼んでいるが、本当はお姉さんと呼んだ方がいいんじゃないかと思う程度の年齢だ。叔母ではあるけど、年齢はお父さんよりも、僕の方が近いかもしれない。
でも、何だか声が大きくてやたらと元気なので、やっぱりどこかおばさんっぽい。
「ちょっと背中付けてみようか。ほら、背筋をピンとして！」
「は、はい……！」
「よっこらしょっと。……おお？　踵（かかと）、ちゃんと床に付けてる？」

「付けてますよ…。」
おばさんの髪の毛の匂いがふっと鼻腔をくすぐる。
それはクラスの女子が香らせる髪の匂いとよく似ていて、親戚のおばさんであるにもかかわらず、なぜか心臓を高鳴らせてしまうのだった。
「はっはっはっは！　いや～、ついに友宏くんも私を追い抜いたねぇ！　小学校の頃はチビちゃんだったけど、やっぱり男の子は成長期に入ると早いね～！」
「最近、急に身長が伸びだしたんですよ。こういう発育の時期だからこそ、部活動か何かをやってほしいんですけど、…面倒臭がりやで困ってるんです。」
母とおばさんはからからと笑った。
「友宏、おばさんの荷物がまだあるから玄関から持ってきてあげて。」
「あぁ～姉さんいいんですよ！　私がやりますからやりますから！」
「いいんです、うちの子も男の子なんですから、こういう時くらい扱き使ってやってください。ほらほら、友宏！」
「あいあ～～い。」
「重いけど、一人で大丈夫かな？　おばさんと一緒に運ぶ？」
荷物を運べとお母さんに言われる分には、面倒臭いから嫌だという気がするが、優花おばさんに一人で運べる？　なんて聞かれると、一人でも平気ですと粋がりたくなるから不

思議だった。
「よしよし！　がんばれ友宏くん！　おいしいケーキをお土産(みやげ)に買って来たからね〜！　終わったら一緒に食べよう！　がんばれー！」
「が、がんばります…。」
おばさんのテンションに押され気味になりながら、僕は階段を降りていく。
後ろから母とおばさんの声が聞こえてきた。
「どうもうちの子には覇気がなくて。もうちょっと年頃の男の子みたいに、元気が出てほしいんですけど。」
「姉さん、そういう時は柔道ですよ、柔道！」
…おばさんが家を出て行くまで、連日、柔道を勧められるのだろうか。

優花おばさんは、一見すると朗(ほが)らかなやさしい叔母だが、それだけではない。
ものすごい大酒飲みで、怪力なのももちろん特筆すべきことだが、何よりもまず特筆すべきことは、刑事であることだった。
おばさんがどのような活躍をしているのか、聞いても断片的にしか教えてくれないため、刑事という仕事がどのようなものなのかは全然わからない。
でも、おばさんのようなタフネスのある人じゃないと務まらないのだろうなということ

は、何となく察しがつくのだった。
さて、そんなおばさんが我が家へ引っ越してくる理由も、やはり警察絡み(がら)だった。所属する署の異動があったらしい。
引っ越す先の寮(りょう)のリフォームだか水道工事だかの都合で、しばらく他に宿を求める必要ができたらしい。それで、署の近くに住む我が家に、そのしばらくの間を住まわせてもらえないかという話が来たわけだ。
うちは元々、おばあちゃんを含めて四人で住んでいた家だから、おばあちゃんが亡くなった後には、一人分を受け入れるスペースが充分にあった。
それで、……ここからは被害妄想なのだが。おばあちゃんの部屋から僕を追い出す、ちょうどいい口実になると思ったのかもしれない。両親は、おばさんにしばらくの宿を提供することを申し出、僕に第二プライベートルームからの撤退を申し渡したのだった。
玄関前に置かれた旅行カバンは、あのおばさんに重いと言わしめるだけあって、壮絶な重さだった。
それでも、男として音(ね)を上げるのはみっともなくて、何とか二階まで運び込む。
これだけの偉業を成し遂げたのだから、僕は拍手で迎えられてもよかったはずだった。
……だが、不思議な恥(は)ずかしい違和感。
あぁ、そうさ。あの世話好きなおばさんが、片付け途中の部屋に残ったなら、片付けの

続きを手伝おうとするのは読めた展開だったはずさ…。ドリル帳を重ねただけのH本の山は今やお母さんとおばさんの前に赤裸々に晒され、僕のプライバシーは一山百円の状態だ…。

「友宏…、お小遣いはね、もうちょっと役に立つものに使った方が…。」

「いやいや姉さん、年頃の若い子にはとても大切なことです！　友宏くん、おばさんは恥ずかしいことだとは思わないよ～!!」

「ぎゃーーーー!!　優花おばさん、やめてください～！　捲らないで～!!」

狸神社の少年たち

「わっはっはっはっはっは！」

博之と亨はげらげらとお腹を捩りながら笑った。

「そりゃ災難だよな。でもさ、俺もやらしい本がいつの間にか本棚に戻ってた時はショックだったなー！」

「親なんかマシだろ、俺なんか妹に見付かったよ。何か汚らわしいようなものを見る目になってさー！」

「いーじゃん、ツインテールの妹にお兄ちゃんって呼ばれるだけで、滅茶苦茶うらやまし

いけどなー。」
「いいか、妹は女じゃねー！　血縁の異性は基本的に敵だよ敵！　妹のいない連中の妄想だって！」
「でもお前、妹の下着盗んだことあるって言ってたじゃん!?　言ってた言ってた！」
「言ってねーってッ!!」
「「わっはっは、わっはっはっは!!」」
気心の知れた友人たちとの他愛のない猥談（わいだん）だった。
今日はたまたま笑える話をしているが、僕たちは基本的にネガティブな話題を口にする方がずっと多かった。
金がない。面白（おもしろ）いことがない。親がうるさい。進路決まった？　受験うぜー…。ゲーム貸してよ。今、人に貸してる。…最近、面白いゲームねぇな…。そんな感じ。
だから、適当に笑い合うとまた話題がなくなり、そういう雰囲気（ふんいき）に戻っていった。

僕たち三人は下校する時はまっすぐ帰宅しない。
帰宅しても、親が勉強しろとうるさいだけだったからだ。
だからいつの頃からか、下校時に、この狸（たぬき）神社に寄って、薄暗くなるまでおしゃべりをして過ごすのが日課になっていた。

狸神社というのはもちろん俗称だ。
本当は、なんたら神社という由緒正しい名前に違いない。だが、正しい名前で呼ぶ人はほとんどいなかった。
狸神社の由来となった狸は、今、僕が跨(また)っている狸の遊具だろう。よく公園なんかに置いてある、小さい子が跨って遊ぶだけの動物の置物だ。
どうしてこんなものが、仮にも神さまを祀(まつ)る神社の境内(けいだい)にあるのか不思議だったが、それを詮索(せんさく)する気はおきなかった。その程度の、いい加減な神社だったからだ。
神社と言えば、ちょっと小高い丘の上なんかにあって、石段を何段も上って、立派な鳥居をくぐって…というイメージがあるが、狸神社はそれとは大きく異なる。
なぜなら、狸神社の敷地面積は、文字通り猫の額(ひたい)ほどだからだ。
しかもそれはごみごみとした古い住宅地の中にあり、両隣の家にぴったり挟まれ、今にも押しつぶされてしまいそうだった。
両隣の家の、手入れされていない庭木の枝が互いにせり出し、みっともなく張り巡らされた電線がそれに絡む。
神社らしく鳥居もあるが、バスケのゴールよりも低く安っぽい。一応、社(やしろ)と賽銭箱(さいせんばこ)のようなものもあるが、まさに神社の最低条件だけを満たしたような、安っぽいものだった。
そんないい加減な神社だから、誰も参拝など訪れない。

だからそこはちょっとした住宅街の死角で、僕らのようなはぐれ者にはちょうどいい溜まり場だったのだ。

いつものように、ぱったりと話題が尽き、僕らは退屈そうに電線だらけの空を見上げる。

こういう流れになると、大抵、会話の雰囲気が悪くなる。

こないだの模試はどうだった？　とか、志望校が合格圏から落ちたとか何とか、そういう話になる。…それは誰も望まなかったから、この会話のない時間を何とか打ち破れないものかと、誰もが思案しているに違いなかった。

そんな中、博之がひょっこりと起き上がった。

表情は悪戯っぽく、何か面白いことを思いついたかのようであった。

「友宏さ、通りに誰もいないか確認してくんね？」

「…うん？　いいけど？」

人がいないことを確認しろなんて、やましいことをすると予告しているようなものだ。

だが、退屈に飽いた僕らにはその程度のスリルは必要だった。

通りを見る。誰もいない。

「誰もいないよ…。」

「おい博之、賽銭ドロはやばいだろ…！」

何が始まるのかはその一言でわかった。
「博之…、お賽銭はまずくないか？　バチ当たったらやべーだろ。」
「当たるバチがあったら俺たち、とっくに当たってるぞ。友宏だって鳥居に小便かけたことあったろ？　亨だって社に落書きしてたじゃねぇかよ。」
「いや、それでも賽銭はまずいだろー！」
「あ、…これナンバーロックだぞ。」
賽銭箱の裏には、中身を取り出す引き出しのようなものがあり、そこに南京錠(ナンキンじょう)のようなものが掛けられていた。
だがそれは、いわゆる鍵穴のついたそれではなく、三桁(けた)の数字を合わせて開けるナンバー錠だった。
「三桁ってことは……、何通りだ？」
「0～9なら、十の三乗だから、千通りだろ。」
「千通りって、案外少なくない？」
表向きはみんな、バチが当たったら嫌だよな、と言い合う。
だが実際は、みんな新しい遊びを見つけたことに喜々(きき)としていた。
博之がナンバーを〝0〟三つに揃え、引っ張る。…もちろん開くわけがない。今度は一の位を一つずらし、001にして再び引っ張る…。

その門から、この賽銭箱の錠前を外すナンバーを探す行為は、僕らの新しい遊びとなった。

賽銭泥棒だと、何だかバチが当たりそうだし雰囲気もみみっちいので、スパイが軍事機密の入った金庫を開けようとしている…というような雰囲気のストーリーを作った。こういうのは雰囲気が大事だからだ。

また、千通りという組み合わせ数も、退屈な僕らにはちょうどいいくらいだった。

一万通りもあったら嫌になってしまうが、千くらいなら、地道に頑張れば、いつか開きそうに感じる。

見付かれば怒られるだろうが、交番に連れて行かれるようなレベルじゃない。その辺のリスクのないスリルが、何をやっても中途半端な僕らの世代にはぴったりな刺激だったのだ。

中にたくさんのお金があったらいいなぁと囁き合ったが、揺すった手応えからはお世辞にもそれを期待できそうにはない。

第一、狸神社にたむろしている僕たちは、誰かがお賽銭を投じるところなど一度も見たことがなかったのだから。

でもそんなことはどうでもよかった。元々、中身に興味などないのだ。開錠するその行為だけが目的だった。

だから賽銭ドロにはならないんだ、と自分に言い訳をする僕は、多分、仲間内で一番肝っ玉が小さいんだろうなぁと思った…。

バチは本人申告制

夕食を食べた後は居間でテレビを見ず、すぐに二階の自分の部屋に引き籠もるのが習慣だった。

本当はテレビが大好きだが、テレビを見ていると必ず親に、勉強は？　と聞かれる。それが嫌で、いつの間にかテレビを見る習慣はなくなっていた。

もちろん、部屋に引き籠もっても漫画を読んでいるだけだ。

一応、机の上には勉強をしているっぽく、参考書やノートが広げてあるが、それは親が階段を上ってくる音が聞こえた時に、すぐに着席して勉強しているフリをするためだけのものだった。

でも、今日に限ってはそんなに早く逃げ出さなくても良かったかもしれない。

しばらくとは言え、新しい家族として迎えられた優花おばさんの歓迎会のようなムードだったからだ。

ビールがほとんどダメなお母さんと違い、おばさんはさすが宮島家の血筋。いくら飲ん

でも酔わない酒豪だった。
だからお父さんは、一緒に飲む相手ができたのがこの上なく嬉しかったらしく、いつまでも上機嫌にビールを飲みあうのだった。
階下から聞こえてくるお父さんやお母さん、おばさんの笑い声。
ああいう豪快な性格だから、おばさんには周りにいる人も元気にする力がある。
おばさんがいてくれる間は、この家も、受験前の子どもと親のギスギスした空気が抜けてくれるように思えた。それを思うと、おばさんが引っ越してきたのは、悪いことではなかったのかもしれない。
やがて、階段を上ってくる足音が聞こえた。
階段を上る音にはクセがある。だから、お父さんでもお母さんでもないそれは、おばさんのものに違いなかった。
そしてノックと共におばさんの声が聞こえた。
「友宏くん～？　何やってるのー？」
お母さんがおばさんを使って、僕が勉強をちゃんとやっているかどうか偵察しているのかもしれない。僕は慌てて机に戻って言った。
「あ、勉強です……。一応、受験生なんで。」
「そうなんだ？　偉いじゃない～！　じゃあ入ってもいいわよね。」

おばさんはそう言うと、割と遠慮なく入ってきた。
勉強中だとわかったら、入ってこないものだと思っていたのだが…。まぁ、その辺りのちょっとガサツなところもおばさんらしい。
「そっかそっか、友宏くんも今年は受験なんだね〜。ご飯食べてすぐ勉強に戻るなんて偉い偉い。」
勉強するために部屋に戻っているのではなく、親に怒られたくなくて戻っているだけだ。
…こういう勘違いをされると、何だか後ろめたくて申し訳ない気持ちになる。
おばさんには正直に、別に勉強なんかしてないですよと打ち明けそうになったが、……ガサツなだけに、そのままをお母さんに伝えてしまう危険性もある気がした。
後ろめたいが、勤勉なことを尊敬されておくことにする。
「これが模試なのー!? ……私、もう一回学生に戻れって言われたらとても卒業できる気がしないねぇ…!」
「でも優花おばさん、警察じゃないですか。公務員って頭が良くないとなれないんじゃないですか?」
「あっはっは、そんなこと全然! 法学部出てるような頭がいいのに限って、全然働かないね。そんなら高卒でもいいから情熱があるやつの方がマシだって!」
おばさんの学歴は知らないけど、あんまり良くないんだろうなと思った。

でも、おばさんのような人の価値は学歴なんかとはまったく無関係なところにあると思う。そうだと思えば、優花おばさんの学歴なんてどうでもいいことだと思った。

「学歴なんかに囚われないでさ、友宏くんも立派な大人を目指してね。ま〜もちろん勉強をまったく疎かにしていいというわけじゃないよ。でも、勉強以外にも学ばなければならないことはたくさんあるからねぇ。」

「例えば何ですか…?」

「遊ぶことだね! 友達との付き合いは大切にした方がいい。家に閉じ籠もってゲームばっかりなんて最低だからねぇ? 友宏くんには、いつも一緒にいる仲良しな友達はいる?」

博之と亨と僕の三人は間違いなく親友だった。

小学校の頃からずっとの縁で、偏差値も似たようなもんだから、高校でもきっと一緒になるだろう。

面白いことから馬鹿なことまで、いつも一緒だった。何でも打ち明けられる関係だ。

それをおばさんに話すと、とても嬉しそうに笑った。

「そうか、それならば友宏くんは充分に素敵な勉強をしているよ。友達を大事にして、いっぱい遊ぶんだよ。未成年の内なら笑い事になるんだからさ、今の内に少しは怒られるようなこともしといた方がいい。じゃないと、していい事と悪い事の区別がつかない大人になっちゃうからねぇ。」

「怒られるようなことって、やっぱりマズイんじゃないですか…？」
「まぁ、マズイって言えばマズイと思うよ。でもね、子ども時代にいっぱいケンカをして育った子は、大人になってケンカをする時、加減を間違えないんだよね。子ども時代に優等生で過ごし、大人になって初めてケンカをすると、大抵、加減がわからなくて大変なことになってしまう。笑い事で済む内に、色々悪いことをしておくのも勉強だよ、うん。」
「それはケンカをいっぱいしろってことですか…？　今時そんなことしたら、内申書が大変なことになっちゃいますよ。」
「う〜〜ん、そうなんだよねぇ。窮屈な時代になったもんだよ。あっはっはっは。」
おばさんの子ども時代のことは少しだけお父さんに聞いたことがある。
近所で悪さばかりしている悪戯っ子で、交番のお巡りさんに叱られて親が引き取りに来るようなことが何度もあったらしい。
でも、今の元気なおばさんを見ていると、そういうのは決して無意味なことじゃなかったんだろうなと感じる。
机に向って勉強するだけが、学ぶべきことじゃないってことなんだろう。……それは勉強嫌いな自分にはとても心地よい言葉だ。
「おばさんは子どもの頃、どんな悪いことをしてたんですか？」
「う〜〜〜ん、もう時効だしなぁ！　白状してもいいか。友宏くんは真似しちゃダメだよ！

駄菓子屋でのかっぱらいとか、人様の山に入って筍を抜いて来たりとか。」
明らかに犯罪行為っぽいのだが…。おばさんが言うと子どもの頃の武勇伝程度にしか聞こえないから不思議だった。
今の時代にそういうので捕まったら…大変だろうな。
交番でお説教を食らってお家に帰してくれたのどかな時代が、ちょっぴり羨ましかった。
「人の家の飼い犬に柿の実をぶつけて遊んだこともあったっけ！　あと賽銭箱の中に手を突っ込んだりもしたねぇ。」
賽銭箱という言葉に一瞬、どきりとした。
「さ、賽銭箱って、手を突っ込めるものなんですか…？」
「普通は無理だけどね。昔住んでた町の神社のやつは、格子の枠が外せたんだよね。だから簡単に中身を抜き出せてねぇ！　あれで買ったアイスキャンデーがうまかったこと！　当時はね、アイスキャンデーは不衛生だって噂があって、親が買ってくれなかったんだよね～。だから初めて食べたもんだから本当においしくておいしくて。悪いことをしたと思ってるけど、子ども時代の懐かしい思い出だねぇ。」
賽銭ドロをすると、バチが当たるかもしれないなんていう、女々しい自分に比べると、おばさんの場合は本当に豪快だった。こういう人にはバチって、当たらないに違いない。

「でも、お賽銭って神さまへのお供えですよね…。バチとか祟りとか怖くなかったんですか？」
おばさんはきょとんとしてから、からからと笑い出した。今の今までバチなんて考えたこともなかったという風だった。
「バチが当たるなんて一度も考えたことはなかったなぁ。でも、今やると神さまに代わってお巡りさんがバチを下すからね。友宏くんは賽銭ドロなんかやっちゃだめだよ。あっはっはっは。」
「バチってのは、当たるものじゃなくて、受けるものだってことがわかりました。おばさんみたいなタイプの人は、多分一生、何のバチにも祟りにも遭わないと思います。」
「ふぅん？　どういう意味？」
難しい言い方をしたつもりはなかったのだが、おばさんには知的に聞こえたらしかった。
「あ、いえ、そんな難しい話じゃないんです。おばさんみたいに、あっけらかんとした人は賽銭ドロをしてもバチなんか当たらない。いや、気付かないんじゃないかって思うんです。逆に、悪いことをしたと気に病む人はどんなささいな不幸があっても、それがバチだと感じてしまうんじゃないかなって。」
「……ほほぅ。なかなか友宏くんも賢いことを言うようになったんだねぇ。それは社会全般に通じる話だね。くよくよしている人は、雨が降り出しても、世界中に否定されたよう

な気になる。心が強い人は、何があってもへっちゃら！　だから雨が降っても全然、元気なわけ。」
「そういうことですよね。バチは下されるんじゃなくて、…やましいと思う心が、バチだと感じるんだ。」
結局、受け取り方の問題だということだ。
バチも祟りもこの世には存在しない。心がやましさや後ろめたさを持った時、自らが無意識の内にバチや祟りを欲してしまうのだ。そして、何気ない日常のささやかなことを、そうだと曲解して受け取ってしまう…。
「友宏くんも、そういう心の話に関心が持てる年頃になったんだねぇ。放送コードに引っ掛かるような下品ワードを連呼しながら駆け回っていたのがついこの間だと思ったのに。あはは！」
おばさんは、僕の好きな笑顔でからからと大笑いした。僕もつられて大笑いをする。
…僕もおばさんも宮島の血を引いているけど、……どうも僕にはおばさんのような心の強さはないようだった。
なぜなら僕は、賽銭ドロをしてもバチが当たるわけがないという確証を欲しがっていたからだ。それはつまり、バチを恐れているということ、心がやましさと弱さを持っているということだ。

中に数百億円の金塊が眠っているような金庫を破ろうとしているならともかく、多分、数百円もない程度の賽銭箱を破ろうとしてこんなザマじゃなぁ…。
多分、僕は悪人としては大物になれないだろうなと思った。

祟りで遊ぼう

今や僕たちはこの遊びに夢中だった。
学校が終わると駆けるように下校して狸神社へ向かった。
「……こちらスネーク。武装兵が二名来る。……それから装甲車両が一台！　こっちの方が速いぞ！」
「フォックス了解！　作業中断、隠れろ、急げ！」
武装兵というのは、買い物帰りのオバサンたちを示す隠語だった。
せっかくの遊びなのだ。いつの間にか僕たちは大真面目にこの遊びを楽しんでいた。
「行ったぞ。作業再開！」
「左右、問題ない。出ろ！」
社の裏側に隠れていた錠前担当が辺りをうかがいながらコソコソ出て来る。
隠れる必要は本来ない。賽銭箱の前から離れて車座になるだけでいいのだ。

だがそれでは今ひとつスリルがない。というわけで、いつの頃からかこの錠前破りは、姿を見られてもいけないという新ルールが追加され、よりそれらしいごっこ遊びとなっていた。
見張る役や護衛役、開錠役は交代制とした。開錠役が一番スリルがあってみんなやりたがったためだ。
馬鹿馬鹿しい遊びだと思っていたのだが、なりきってみるとこれが意外に面白い。見付かったら怒られるというリスクは、刺激に飢えた僕らには心地よいものだったのである。
この調子で毎日毎日挑めば、多分、いつの日にか錠前は破られるだろう。だが、破ればこの遊びは終わってしまう。
だから、破ろうとする行為を楽しみながらも、実は誰もが、破れてほしいとは思っていなかったに違いない。
それでも日々、着々とナンバーは進み、楽しい時間を自ら縮めている。不思議な皮肉だった。
だから、その日は訪れるべくして訪れた。
「……あ。」
いつもと違う手応え。ナンバー錠があっさりと抜ける。

開けるために今日まで頑張ってきたのに、開けた最初の第一声は、まるで遊んでいた玩具を誤って壊してしまったような、そんな声だった。
今度こそ本当の意味で見張りがいるはずなのに、僕ら三人は駆け寄り集まる。
「開いちゃった…。」
「マジかよ、マジかよ…！」
「本当に開くもんなんだな…。ナンバーはいくつだったんだよ？」
「393。サンキューさん、…アリガトサン、かな？」
「あはははは！　賽銭箱の錠前にしちゃ不謹慎なナンバーだなぁ。」
「覚えやすいナンバーでいいよ。ってことは、俺たちはいつでもこれを開けられるようになったってわけだ…。」
「ってことはさ、この賽銭箱に入るお金は、今後ずっと俺たちの小遣いってことじゃねーの？」
「三等分だろ、決めたよな！」
「いいからさ、開けてみようよ！　中身いくらくらい入ってる⁉」
開けること自体が目的、などと偉そうなことを言っておいても、いざ開けることに成功すれば話は変わる。
あれだけ中身に期待していなかったのに、まるで僕らは、中に高価な宝物でも隠されて

いるかのような期待をしていた。
　せいぜいあっても五百円くらい…、というささやかな願望は、今や、気前のいい老人が壱万円札を入れているかもしれないくらいにまで膨らんでいた。
　もったいぶりながら、……いよいよ引き出しを開ける。
　ゴクリと誰かの喉が鳴った。
「お金が出てくればいいけどさ。……猫の死骸とか出てきたら呪われそうだよな…？」
「そんなのどうやって賽銭箱に詰めるんだよ。」
　笑って誤魔化し合うが、開けたら何かの「呪い」が飛び出すのではないかという後ろめたさは僕だけでなく、全員が持っているようだった。
「…………………。」
「……開けろよ…。」
「よっし……！」
　引き出しを引くと、想像していたよりずっと抵抗なく、すっ、と引けた。
　そこには。……土埃と硬貨が数枚入っていた。
「……………。百二十五円。」
「狸神社みたいないい加減なとこにも百円玉入れる信心深い人っているんだな…。」
　誰からともなく苦笑いが漏れた。

当然の結果が目の当たりになっただけなのに、なぜだか漂う失望感。
あれだけ中身に期待していなかったのに、開ける瞬間は誰もが中に素晴らしい宝物や、恐ろしい祟りを想像していた。それで、中から当初の予想を裏切らない程度のものが出てきて、がっかりしてしまうのだから。…やっぱり僕たちは安っぽいお子様なんだなぁと思い知った。
「どうする？　四十円ずつ分ける？」
「ゲーム一回もできないよな。駄菓子買って終わりじゃね…？」
「…何か馬鹿馬鹿しいよな。せめて千円くらい入ってないと山分けする気にもならないや。」
百円ちょっとをカッパラっただけで賽銭ドロ扱いでは割が合わない。
結局、僕らは中身には手をつけず、そのまま引き出しを戻して施錠するのだった。
「あははは、結局、下らなかったなー！」
「そんなの最初からわかってたことじゃん。まー、ひょっとして壱万円札とか入ってないかなとか夢は見たけどさー！」
「見た見た見た!!　竹やぶに億が入ったカバンがある時代だもんよ。賽銭箱に百万円くらい入っててもおかしくないよ！」
「「あははははは！」」
お気に入りだった遊びが終わってしまい、ついに偉業を成し遂げた達成感もあったが、

明日からどんな遊びをしようかという寂しさもあった。
だから誰からともなく、今度は何をして遊ぼうという提案が出る。
この錠前破りはとてもスリリングだった。楽しかっただけに、次の遊びにも、それと同じかそれ以上の楽しさを期待せずにはいられなかった。
だが、面白い遊びは簡単には思いつかなかった。
「何か面白いアイデアはないかねー。」
「そんな楽しいアイデアがあったらとっくに思いついてるって。」
「…あはははは、そりゃそうだよなー。」
結局、何も思いつかず、名残を惜しむように、再び錠前破りの話題に戻った。
あれは面白かった。あれは危なかった。エトセトラエトセトラ…。
みんな意見が一致するのは、開けようとする過程が一番面白かったということだった。
「いや、俺さ。最初の晩はドキドキし過ぎてさ。夢見が悪かったんだよ。祟りとかあるんじゃないかなってさ！」
「狸神社程度の祟りなんてたかが知れてるってー！」
とは言いつつも、それはみんな同感で、ちょっぴりの薄気味悪さは味わったようだった。
「祟りとか呪いとかってのも面白かったし、中にいくら入ってるか想像するのも楽しかったよな。」

開錠作業中、もしも中に一億円入っていたらどうしよう。山分けしても三千万円以上。一体、何に使う!?　なんて話で大盛り上がりしたっけ。

結局、開ける行為へのやましさのスリル。そして、中に入っているかもしれない宝を想像するロマンの二つが自分たちをあれほどに熱中させていたわけだ。

「ってことは、スリルとロマンの両方があればいいわけだなぁ。」

「何それ、みんなで協力して穴でも掘って、銀行の地下金庫でも襲う？」

「あっはははは、いいねいいね〜。」

そんな他愛もないおしゃべりの最中に。突然、博之がポンと手を打った。

「あ、………そうだ。あのさ！　祟りなんかたかが知れてるって言ったよな。友宏だっけ？」

「うん？　そんなこと言ったっけ？」

「言ったよ。狸神社の祟りなんてたかが知れてるって言ったじゃん。」

「何だよ、面白い話？」

「俺たちの知ってる祟りってさ、何があるよ？」

僕と亨は顔を見合わせる。

「…祟りって言ったらあれだよ。学校の七不思議とか。」

「あるある。夜中に鳴り出すピアノとか、理科室の踊(おど)るガイコツ標本とか！」

「あと、初代校長の胸像が動いて喋るってのもあったよな。だいぶアホっぽいね。」
「ぶっちゃけ、それって怖いと思うか？」
学校の七不思議は、本来は怪談だから怖いものだろうとは思う。
だが、どこの学校にも安っぽく存在し、どこの内容もそれほど変化はなく単調だ。言ってみれば、どこの学校の図書室にも必ずある文部省推薦図書みたいな感じ。
だから七不思議なんて学校のお約束みたいなもんで、誰も怖いなんて思ってなかった。
「だからさ、……俺たちが作らないか？　新しい祟りをさ。」
新しい祟りを俺たちで作り出す？
作るというのは、物作りのことだと思ってきた。プラモデルを作るとか、粘土細工を作るとか。手に触れられるものを生み出すことが「作る」という行為だと思ってきた。
だから、目に見えず触れることもできず、人間以上の存在が生み出しているとしか思えない「祟り」を〝作る〟ことができるなんて、生まれてこの方、考えたこともなかった。
だから、それはある種のカルチャーショックだった。
「……新しい祟り、……作る……。」
「何それ、七不思議の八個目を作るわけ？」
「そんなとこだな！　古ぼけた七不思議じゃない。新しい定番となる、新祟りなんだよ！」

「…へーーーーー…！　何だか面白そうだな…！」

心の奥底で、祟りやバチをわずかでも恐れていた三人にとって、怖がるべき祟りの生み出す側に回ろうという遊びは、とても斬新に感じられた。

だが、ただ作っても面白くない。

祟りを作っても、スリルはあるかもしれないが、…ロマンがない。ロマンというのは得るものだ。

博之の、新しい祟りを生み出そうという案を基に色々アイデアを出し合い、僕や亨がそれにさらに「ロマン」の要素を付け加えた時、それは誰もが予想しなかった奇抜なアイデアとなった。三人寄れば何とかの知恵とはよく言ったものだ。

「…すごくね？」

「もしうまく行ったらさ、これかなり稼げそうだよね。」

「あははは、そううまくは行かないんじゃないのー？」

「それを期待するのがロマンってもんじゃないかよ〜!!」

三人が考えたこの新しい遊びは、錠前破りよりもっともっと面白くなるかもしれない予感がした。

祟りの栽培

新しく生まれる現代の祟り！

生徒たちはみんな信じ、自分は呪われないようにと祈るしかない。

みんなが信じて恐れるのに、生み出した僕たち三人だけは真相を知っている。その優越感はきっと格別に違いなかった。

僕たちは昼休みの校舎裏で、どのような祟りにするか、どのように広めるかなどを作戦会議するのだった。

さて、一番悩んだのは祟りのネーミングだ。

かっこいい名前がいいねと意気込んだものの、そんなもの思いつくわけもない。

なので、よりかっこいい名前が思いつくまでの仮の名ということで「お骨(ほね)サマの呪い」という、聞くからにチープな名前が決まった。

もちろんチープなだけあって、その決め方も実にチープだった。

三人で周りを見渡し、何となく目に入ったのが「骨」という文字だったからだ。それだけの理由で「骨」がイメージに選ばれ、何の捻(ひね)りもなく、御と様がつき、お骨サマという子ども騙(だま)しな名称が決まったのである。

それもそのはず。ここは××県鹿骨市。学校は第二鹿骨中学校。
ここに住まう自分たちは普段意識しないが、ちょっと気付けば、看板に電信柱にそして
あちこちに「骨」という文字がいくらでも溢れていたのだ。
それに気付いた時、ようやく「骨」という文字がイメージさせる不気味っぽい感じに気付いたのだった。
さて「お骨サマの呪い」はどんな呪いなんだろう。
「そりゃ、お骨サマってくらいだからな。骨折とかそういう呪いじゃないのか?」
「…んーーー、だからさ、そういうありがちな怪我じゃなくてさ。もっと呪いっぽいヤツなんだよ、お骨サマの呪いなんだよ。こう、ばわわーー!! って、骨にいっぱい囲まれちゃうんだよ。ばわわー!!」
「何だよ、ばわわーって! あはははは!」
「お骨サマの呪い」を被ると、骨にばわわー! と囲まれるらしい。骨まみれなんだそうだ。ピンと来ないが、転んで骨折しますとか言われるよりは、何だか得体の知れない感じが呪いっぽくていいかもしれない。
「じゃあさ、呪いって言うけど、どうなると呪われるわけなの?」
「呪われるようなことをするんだろうな。」
「そういうことしなけりゃ誰も呪われないじゃん。」

「もっとこうさ、誰もが呪われた！　って感じるような、学校中に広がるような呪いがいいなぁ。」
「ん〜〜〜〜、その辺は適当でいいんじゃないの？　お骨サマは怖い神さまだから、学校に住み着いてて、誰彼(だれかれ)の見境(みさかい)なく呪うんだよ。だから怖いんだよ！」
「うはー、そりゃ怖いな！　というかえらい傍(はた)迷惑だな！」
「「あはははははは！」」
結局、「お骨サマ」という祟り神が学校に住み着いていて、素行の悪い人間を呪うと。そういう設定になった。
仲間に一人くらい、この手の設定に詳しいヤツがいればよかったのだが。残念ながらいなくて、こんなチープな設定となったのだった。
そして、呪われたら呪いを解く方法もなければならない。
これについてだけは一番最初に決めてあった。
狸神社にお参りして、お賽銭を入れることなのだ。
あまりケチな額だとかえって呪いが強くなってしまうので、潔(いさぎよ)い金額をお賽銭とすること。そう付け加えた。
これこそが肝だった。
僕たちはあの賽銭箱を自由に開けられるのだから、もしこの「お骨サマの呪い」が広が

り、真に受けてくれる人が本当にお賽銭を入れてくれたなら、それは僕たちの小遣いになるわけなのだ。
「広まれば広まるほどに儲かる。しかもある程度広まれば口コミで勝手に広まるからな。」
「しかもさ、学校の七不思議みたいに定着すれば、それってずーっと残るわけでしょ？」
「つまり俺たち、一生儲かるってことじゃんかよー!!」
これはもはやビジネスと言ってもいい革新的なアイデアだった。
何しろ、カネを出せと恐喝するわけじゃない。呪われたと思い込んだ人が勝手にお賽銭を入れるだけ。それを頂戴しようというのだ。
だから、もしこの怪談が日本中に広がったなら………、僕たち三人はもう一生、遊んで暮らせるだけのお金が手に入るに違いない！
まぁもちろん、想像して楽しむ内が華だ。
ほとんどの人は信じてくれないだろうし、仮に信じた人がいても、本当にお賽銭を入れてくれるかは疑問だ。そしてその額もせいぜい十円がいいところだろう。もし合計で千円もせしめられたら、それは大成功の部類に入るに違いない。
でも、そこがロマンだった。ひょっとしたら一攫千金。そんな夢が僕らをますますこの遊びに熱中させていくのだ。

「お骨サマの呪い」の設定が大体まとまり、いよいよクラスに流布する時が来た。
僕たち三人は大の仲良しだったが、他に友達がいないわけじゃない。教室へ行けば、一緒に遊ばないまでも、それぞれにたくさんの友人がいた。
彼らに、吹き込んで口コミで広げる。まずはクラスから。そして学年、学校へ…。
…だが、聞いたこともない「お骨サマの呪い」の話など、そう簡単には信じてくれないだろう…。
「そりゃ信じないだろうよ。」
「やっぱり呪いがあるってことを実際に見せないとダメだよな。演出が必要だよ。」
「演出って?」
「ん〜、例えばさ。朝、学校に行ったら、黒板いっぱいに骨骨骨骨…って書いてあったら怖くねぇ?」
「うっわ、そりゃ嫌だな、あはは!!」
「何か教壇の上に、怪しげな骨が積み上げてあったりとかね!」
「あー、朝来て机の中に骨とか入ってたら泣くかもなー!」
つまり、「お骨サマの呪い」に信憑性を持たせるには、「呪い」のデモンストレーションが必要というわけだ。
それは、何だかとても大仕掛けな悪戯をする時のような高揚感があった。

バレたら賽銭ドロの時よりシャレにならないというスリルがあり、わくわくさせられる。
「朝一で登校して、誰か来る前に黒板に骨骨って書けばいいんじゃね？」
「朝練の連中って結構、早いよ？　あ、でも教室にはいないか。死角じゃん⁉」
「俺たち、いつも三人だからさ、何かあっても、三人一緒にいましたって言えばアリバイにもなるしさ。大丈夫大丈夫！」
明日、普段よりも二時間も早く登校して、教室に怪しげな仕掛けを施す。
こんな馬鹿げた悪戯のために、惰眠(だみん)を貪(むさぼ)りたいもっとも貴重な時間をわざわざ捨てて臨もうというのだ。でも、だからこそ最高にスリリングだった。
このスリル感は、かつての錠前破りの時とは比べ物にならない。
僕たちは、賽銭ドロの時に互いを呼び合った、特殊部隊チックなコードネームで互いを呼び合い、この思い切りふざけた大きな悪戯を、思い切り大真面目にやろうと意気込むのだった。

呪いのデビュー

警察というのはよほどハードな仕事らしい。…あるいは刑事という仕事がハードなのだろうか。基本的に優花おばさんの帰宅はいつも深夜だった。

それをお父さんが迎えて、晩酌に付き合うというのが我が家の夜の流れだった。
僕は相変わらず、食事が終わるとすぐに部屋に引き籠もる。
そして、階下でお父さんとおばさんの楽しそうな笑い声を聞きながら就寝するという感じだった。
だがその日は、帰宅してくるとすぐに階段を上ってきた。
帰ってきたらまずシャワーを浴びるはずのおばさんが、何かを急いでいるのは明白だった。
すぐに僕は、何をおばさんが急いでいるのかその理由に気付き、心臓をドクンと一回、高鳴らせた。
「友宏くん？　優花おばさんだけど。入ってもいいー？」
「う、うん。どうぞ。」
「ごめんね勉強中に！　友宏くんは確か第二鹿骨中学校の生徒だったよね？」
「…うん。…そうだけど…？」
「今日、学校の教室に不審者が入ったらしいという通報が来たんだけど、何か知ってる!?」
…僕たちのあの悪戯が、警察に通報されるとは夢にも思わなかった。
悪ふざけし過ぎた…？　一抹の不安も感じたが、何も証拠などないのだ。その証拠に、お前が犯人だとは言ってない。

それに、こういうスリルが味わいたくって始めた遊びじゃなかったっけ…？
それを思い出すと、僕は少し落ち着きを取り戻すのだった。

優花おばさんの話を詳しく聞くと、それほど大事というわけではなさそうだった。
朝一で、六つの教室の黒板に、「骨」という文字が大量に殴り書きされていたという。（もちろんこれは全て僕たちの犯行だ。）
学校側は生徒の悪戯だと思ったが、複数の教室に跨る規模の大きいもので、また、この悪戯をするためにわざわざ犯人の子が早朝に登校するという手間をかけるだろうかという疑問から、ひょっとすると変質者が早朝の学校に入り込んだのではないかと疑い、教育委員会を通じて、念のため通報されたのだという。
だから別に、事件発生で警察が捜査開始…というわけではないらしい。
おばさんはその通報を署内でちょっと聞きつけたに違いない。
自分のした犯行が、自分が犯人だとバレずに話題になるのが、こんなにも奇妙で滑稽なことなのかと、僕は禁断の蜜の味を知る。
……だが、自分が絶対にバレないという保証はなかった。
学校には絶対に気取られないだろうが、僕が今朝だけ「友達の都合」で早起きして出掛けたことは親も知っている。

思わぬ身近なところで、犯人であることがバレかねないことに気付き、事態が決して楽観できないことを、僕はようやく認識する…。
「私は寝てて気付かなかったんだけど、…友宏くん、今朝はだいぶ早くに登校したんだって?」
……いきなり核心に来た。構えていても、心臓が一回飛び跳ねた。
まさかまさか、……いきなり、バレてしまう……!?
僕は今さらのように、自分の間抜けさを呪う。そりゃそうだ、あれだけの規模の大きい悪戯をすれば、警察の耳にも入る可能性は充分あるじゃないか。
そしたらそれがおばさんの耳にも入って、自分のところに跳ね返ってくることは予想できないことじゃなかったはず。
だが、……黒板に落書きなんて悪戯レベルだ。仮にバレてもごめんなさいで済むレベルじゃないか。別に逮捕(たいほ)されるわけじゃない…。
そう心の中で整理を付けると、このおばさんの詰問も、僕たちの遊びの延長にあるようなものだと感じるようになる。
くそ…、僕ってやつはどうしてこうも肝っ玉が小さいんだろうな……。この程度の悪戯でこんなにビビってるようじゃ…ロクな男になれないぞ…。
何も恐れる事なんかないんだ。むしろこの緊張感を楽しめるくらいじゃなきゃダメなん

だ……。
　不安をゆっくりと吐き出し、肺から追い出していく。心が少しの落ち着きを取り戻すのを感じた。
「うん、サッカー部の朝練をしてる友達とちょっと約束があってさ。借り物のやりとりみたいな……うん。……僕が黒板に落書きなんかするわけ……、」
　…もっと簡潔に言った方がそれらしかったかもしれない…。自分から無実を言い出すなんて白々しい……？
　一秒二秒の間が、ものすごく長く感じられる。
　そのわずかな時間の緊張にも耐えかね、下手くそな嘘をさらに下手くそな嘘で取り繕おうとした時、おばさんが満面の笑みを浮かべた。予想しなかった反応なので、むしろ驚く。
「あっはっはっは！　ごめんごめん、違うのよ友宏くん。私は友宏くんが犯人かもしれないって言ってるんじゃなくて、もし友宏くんが朝早くに学校に行ったなら、その問題の不審者とすれ違ってたりしないかなぁって思って聞いただけなの。優花おばさんは友宏くんのことを疑ってなんかいないよ〜〜!!　疑われてると思った？　思った？　ああ〜ん、ごめんね〜!!」
　……おばさんは本当に表裏のない人だから、多分本当のことに違いない。
　やっぱり僕は肝っ玉が小さいなぁと思った。悪事には向いていないに違いない。

それを思うと、自分の器の小ささが何だかみっともなくて、この程度の悪戯をやり遂げられなくてどうする、なんていう憤りをちょっぴり感じていた。
「だ、だっておばさん警察だもん…。疑われてるんじゃないかって、…普通思うよ。」
「あ～ん、ごめんごめん！　気を悪くしないでねぇ！」
おばさんは僕に絡みつきながら、笑って誤魔化すようにそう言った。
僕の顔が優花おばさんの大きな胸に押し当てられてどきどきする。優花おばさんは、もう少し自分が、うら若き女性であることを思い出した方がいい…。
「うぅん、本当にごめんね～！　それで友宏くん、どう？　学校で見かけたことのない、不審な人を見たりしなかった？」
「いえ。全然。」
「……うーーん。そっかー。」
「学校なんて、そうそう知らない人が入れるところじゃないと思いますし…。学校の誰かの悪戯じゃないんですか…？」
「まぁ、そう考えるのが自然よねぇ。………とすると、やっぱり犯人は内部か…。」
表情がきゅっと引き締まる。
さっきまでふざけて絡んできたおばさんとはまったく違う厳しい表情だった。……これが、優花おばさんの本当の顔、いや、…宮島刑事の本当の素顔に違いなかった。

おばさんは独り言をぶつぶつ言いながら腕組みをし、部屋をぐるぐる歩き回りだす。
そしておもむろに言った。
「なら、多分犯人は、…私より友宏くんの方がずっと年齢が近いってことになるねぇ。」
「そ、……そうなりますね。」
「骨骨骨って、………何のことかわかる？」
「え？　な、何のことですか…。」
「いえ、だからさっきも言ったでしょ。六つの教室の黒板に『骨』という字がいくつも殴り書きされていた。思春期の子どもは学校に対してフラストレーションをぶつけることもあるからね。校内でガラスを割ったり落書きをしたりすること自体は珍しくない。でも、バカとかアホとか、カタカナの悪口の方がずっと画数が少なくて簡単に書けるはず。にもかかわらず犯人は『骨』なんていう画数の多い書き難い字をわざわざ好んで書いている。『骨』に何か意味があって書いてるんだと思うの。……友宏くん、大人の私にはわからないんだけど、君にはわからない？　何か子どもだけに通じるスラングとか、流行りとか…アニメや漫画…そういう辺りに答えがありそうな気がするんだけど。」
「………えっと、…………さぁ…………。」
「だよねぇ。…何を意味してるんだろう。でも、骨骨骨って、何だか薄気味悪いし。何か悪いことの暗示じゃないといいんだけどねぇ。」

「…意味なんかないんじゃないですか？　単なる愉快犯の悪戯で、特別な意味なんかないんじゃないかと思いますよ。」
「そんなことはないねぇ。意味はあるんだよ。絶対。」
割と即答だった。…おばさんは現場を実際には見てないのに、どうしてこうも鋭く言えるのか不思議で、同時にちょっと薄気味悪かった。
「……ど、…どうしてですか。」
「被害のあった教室を校内地図に並べてみると、いくつかの被害教室がとても離れていることが分かるの。つまり、複数の犯人が手分けをして行なった可能性は低くない。校内に散り、人目がないのを確認して手近な教室にそれぞれ落書きをした。見てないからわからないけど、多分、各教室の落書きは筆跡が違ってたんじゃないかと思うわね。」
「まぁ確かに……、骨なんて字は結構書くのが大変ですからね。一人の犯人だったら、六つも教室を回る時間なんてないかもしれませんね…。でも、そのことからどうして『骨』に意味があるなんてわかるんです？」
「複数犯が『骨』という決められた文字を書いているということは、彼らに『骨』を書かなければならない共通の目的があったということ。つまり、単なる落書きではなく、『骨』を書かなければならないという取り決めがあったということなの。ということはつまり、彼らにとって『骨』という字には意味がある。『骨』という字を何の目的があってアピール

したのかはわからないんだけど。………暴走族とか窃盗団とか、そういうもののアピールかなぁ？　暴走族とかに、自分たちの名称を町中にマーキングしていく連中がいるでしょ。あれみたいなものかしらねぇ？　骨骨団(ほねほねだん)とか。少年課に聞いてみるかなぁ…。」

「……………。」

………おばさんはなかなかどうして、大したものだった。

他愛ないと言うにはちょっと規模が大きいが、それでも悪戯の域を出ないものを、受けた通報だけで現場を見もせずにここまで分析するのだから大したものだ…。

これが刑事というものなのか。素直におばさんを尊敬した。…もちろん、尊敬の裏には気味の悪いまでの鋭さに対する恐れもあるのだが。

でも同時に滑稽にも思った。

何しろ目の前に犯人がいて、その犯人の前で自分の推理を披露(ひろう)しているのだ。こんなに滑稽でスリリングなことはない。…探偵ものの犯人役にでもなった気分だった。

もし万が一バレたら大変だとはもちろん思った。

だが、ここまでなのだ。優花おばさんたちプロの刑事たちが捜査に乗り出してくることなどあり得ない。警察は事件を捜査するところだ。学校で起こった悪戯程度に構うほど暇(ひま)なところではない。

だから、おばさんが僕の部屋で推理を自慢したところで何の意味もない。

そう。冷静に考えれば、僕がおばさんの推理力を恐れなければならないことは何もなかったのだ。
そう思えば思うほど、僕は落ち着きとこの状況を楽しむゆとりを取り戻すのだった。
だから……、これは悪戯なんだ。犯罪じゃない。おばさんをからかってるだけ…。
「…あ、………そうだ優花おばさん。…あ、でも、……関係ないかな……。」
「ん？　何、友宏くん？　何か気になることがあったら教えて？」
「いや、…全然関係なかったらすみません。…誰から聞いた話かも覚えてないんで…多分、デマだと思うんですけど…。『お骨サマの呪い』って知ってます…？」
「え、何？　お骨サマの呪い、って…何⁇」
自分たちで決めておいて何だが…実に間抜けなネーミング。
おばさんもその間抜けな響きに胡散臭そうな顔をしたが、それでも決して、内容に関心がないというような顔はしなかった………。

今度は骨爆弾！

今回の、複数の教室の黒板に骨の字が落書きされた事件は、おばさんの耳に入るだけあって、想像以上のインパクトを与えたようだった。

だが、校内の噂はせいぜい、変質者が妙なことをして回っているというようなレベルで、「骨」という文字への関心はまだまだ薄かった。
もちろん、僕たちは今回の作戦がどれだけの成果を挙げたかを充分に検討し合い、間を空けずに「怪現象」を畳み掛けた方がいいとの結論に至った。
黒板への落書きはもうやった。同じ事を二度三度やってもインパクトはない。今度は別の形の演出が必要だ。
お骨サマの呪いはどんなものだったっけ？
骨がばわわーっとたくさん。…そういうことになっていた。
校内に骨をバラ撒くとか？　でも骨って何の骨？
「さすがに人骨はマズイし、そもそも人骨なんて手に入らないだろ。」
「というか、人でなくても骨なんてそうそう手に入らないよ。フライドチキンの骨でもまめに集めるしかないね。」
「…フライドチキンを買えるような小遣いに恵まれてたら、俺たちこんなことしてないでどっかのゲーセンで遊んでるよ。」
「「違いねーー、あっはっは！」」
骨と書いた紙でもあちこちにバラ撒くとか？　黒板いっぱいに書き殴られているのに比べるとインパクトが弱いな…。

僕たちはそんなことを話しながら商店街を当てもなくブラついていた。
狸神社でたむろしていたら、お賽銭を入れに来た人が、仕掛け人が僕たちだと気付いてしまうに違いない。…そういう訳で、僕らは狸神社をしばらく去らなければならなかった。
骨なら何でもいい。フライドチキンの店のゴミ箱でも漁ろうか…。でもそれはみっともないなぁ…。
そう悩んだ時、この問題はあっさり解決した。
精肉屋の裏のゴミ箱の中に、ビニール袋いっぱいの骨が捨ててあったからだ。牛だか鶏だかわからないが、とにかくタダでいくらでも手に入れられそうだった。
しかもそれどころかご丁寧に、「ご自由にお持ち下さい」とまで書かれていた。……犬を飼っている人なんかがエサ用に持って行くのかも知れない。
亭の家が近かったので、スーパーのビニール袋を持ってきてもらい、取りあえず適当な量を掬い取った。
「……うわ、…気持ち悪ぃ…。」
「いや、でもさ、これが学校に転がってたら結構怖いね!」
「何の骨か得体が知れないもんなぁ! 朝来て下駄箱に入ってたら女子は泣くかもしれないよ。」
結局、この骨を手分けして学校に持ち込み、思い思いの効果的な箇所に仕掛けるという

作戦になった。
それは図らずも、僕たちが錠前破り以来気に入っている、特殊部隊ごっことても相性が良かった。つまり、この骨は時限爆弾で、敵の基地内に秘密に仕掛けて回るという設定である。
もちろんバレるわけにはいかない。
前回の黒板作戦の時は早朝の奇襲だったから、ちょっとハラハラしたが誰にも目撃されることはなかった。
だが今度は日中の作戦になる。校内には敵兵がうようよいて、不審な行為がないか監視している。また前回の作戦後、将校（先生）は一層監視を厳しくしている…。
もう、それだけでシチュエーションは充分だった。
この段階になってくると、最初は触るのも嫌だった骨も、まるで玩具のようなものだった。銀玉鉄砲の銀玉みたいなものだ。
校内にこっそりと持ち込むのだから、あまり大きな骨は向かない。ローストチキンのような大きな骨よりは、から揚げくらいの骨が望ましかった。
そして汚れた骨はそのままでは汚いので、きっとポケットに入れても制服を汚してしまう。そのため、公園の蛇口で簡単に水洗いをし、ちり紙に巻いて乾かすことにした。
この作業ももはや遊び、いや、作戦の一部となっていた。僕たちは人目がないのを充分

確認しながら、公園の水場に集まり、骨爆弾の準備を入念に行なうのだった。
そして翌日。各自がポケットに三〜四本のちり紙に巻かれた骨を忍ばせて登校した。
ポケットの膨らみが、中身を知る自分たちだけには異様に目立つように見えて、早くもスリル満点だった。
「…もっと小さい骨の方が安全だったかな。」
「いや、ダメだぞフォックス。大きい爆弾じゃないと威力がない！　俺さ、もっとでかい骨があったら、足にガムテープで巻いて固定して持って来てみようと思うんだよ。」
「うわ、何だよそれ、カッコイイじゃねーのー!!」
「今日中に各自、全ての爆弾の設置を終了させるんだぞ！　仕掛け損なうな、決して見付かるな！」
「爆弾が発見されれば、それだけ警戒が厳しくなるぞ。各自用心しろ！」
「かといって、誰も気付かない場所に仕掛けても意味がないんだよな…。難しいね。」
「難しいな。バレずにもっとも効果的な箇所に設置する…。各自の腕の見せ所だぜ！」

こうして、僕たちによる「お骨サマの呪い」は次々に実施されていった。
生徒の中に犯人がいると誰もが噂したが、誰の仕業（しわざ）かは特定できず、またその不気味な目的も理解できず、奇怪なイメージのみをはびこらせていった。

朝、登校してきて下駄箱を開けたら「骨」が何本も入っていたり。
教室の机の中に「骨」が何本も入っていたり。
挙句にはカバンの中にいつの間にか何本も詰め込まれていたり。
男子ならカッカとして誰が入れたのか騒ぎ立て、女子なら泣き出すこともあった。
誰もが、自分のところに「骨」が来ることを嫌がっていて、今や「骨」は、ババ抜きのジョーカーのような扱いとなっていた。
骨が誰かの机にあったことがわかると、誰からともなく「お骨サマの呪い」だと叫び、まるで汚いものから逃れるようにみんなが退くのだ。それはイジメのキーワードのようにも見え、生徒たちはますます「骨」を毛嫌いしていくのだった。
やがて、ババ抜きのジョーカーと同じように、自分のところへ来たら、こっそり他の人のところへ回す連中も現れた。…自分が「骨」を持っていることが知れるとイジメられるから、誰かに気付かれる前に他の人の席に放ってしまおうというわけだ。
最初の内こそは、その程度のものだったが、次第に僕らが期待したような不吉さが宿るようになり、「骨」が自分のところにやってくると、何か不幸が舞い込むような雰囲気になっていった。
受験をそろそろ気にし出す生徒たちは、縁起を担ぐようになっており、不幸の象徴とされる「骨」が舞い込むことを特に忌み嫌ったらしい。

いつの間にか、「骨」が一本机の中に放り込まれると、偏差値が〇・一下がるなんていう設定が生まれていた。誰が作った噂かはわからない。

他にも、彼女が出来なくなるとか、三日以内に怪我をするとか、色々な呪いが自然に生まれては勝手に付加されていった。

そう、「お骨サマの呪い」は、僕らが生み出したものより、徐々に成長を始めていたのである。

この頃、僕はようやく気付く。そもそも中学校、いや中学三年という学年は、もっとも呪いが定着しやすく、育ちやすい環境だったのだ。

僕らは勉強なんて興味がなかったからまだ気にもしていなかったが、……いや、あと数ヶ月もすると嫌でも気が付くのか。元々、僕らの学年には初めて臨む、受験という人生の大きな節目に対して澱んだプレッシャーのようなものがあった。

誰もが、日本という巨大な階級社会で区分けされる恐怖をひしひしと感じており、その一番最初の選別で、いわゆる「負け組」になりたくないと誰もが潜在的に思い、恐れていた。

ある者はその恐怖から解放されるために勉強に勤しみ、ある者はその恐怖から逃れるため勉強から逃避した。

まだ春先だから、みんなの表情も明るく、笑顔を浮かべていることもできるが。……そ

の胸中は恐怖でいっぱいだったはずなのだ。
そういう目に見えない澱みを、みんなは「骨」という目に見える不吉の象徴に、その姿を求めたのかもしれない。
自分を追い立てる目に見えない脅威を、目に見える「骨」に置き換え、「骨」から逃れることで、自分は脅威から逃れていると信じたかったのかもしれない。
それは、まさに原始の宗教とも呼べるもの。迷信や妄想、思い込み、縁起担ぎ、自分だけのルール。呼び方は数あれど、……どれもまったく変わらない。
そういう意味では、中学校という思春期と初めての人生の関門を同時に迎える環境は、人生のどの段階と比べてもずば抜けて、呪いが妄信されやすいナーバスな土壌があるに違いなかった…。
もっとも、そう冷静に分析できるのも、僕がこの「呪い」の外側にいるからなのだが。
彼らにとって、学校中に充満するこの不吉な現象も、僕らから見れば、手の平で踊らせているようなもの。…なるほど、これは思った以上に滑稽で面白いことだった。
さて、徐々にうまく行ってくると、当初予定の「ロマン」の方が楽しみになってくる。
ロマンというのはつまり、……お賽銭の方だ。
〝呪われたら、狸神社にお賽銭を入れなくてはならない〟
この一文は、初め誰も気に留めなかった。

だが、呪いがだんだん充満し、受験前の徐々に押しつぶされていくような圧迫感を象徴するようになると、…それを逃れるひとつの方法として注目されるようになる。
学業成就のお守りにこだわったりするように、元々受験生は縁起を担ぎたがる。だから、呪いを逃れる正しい方法として神社にお賽銭を入れるという手段は、とても正当性があるように思えただろう。
この頃、……十円玉を賽銭箱に放る初めての生徒が現れた。
だが、それは僕らが期待するほどの人数ではない。一週間の間に二人いるかどうかという程度だ。
しかし、……追い風が吹く。それは僕らが予想もしない意外なイベントだった。
鹿骨市長選挙である。
選挙の時に立てられる木製の掲示板が町内のあちこちに立てられていたので、あぁまた選挙が始まってうるさくなるんだな、とは思っていた。…だが、それが「お骨サマの呪い」に繋がるとはまったく予想しなかった。
「お骨サマの呪い」を受けると、骨がいっぱい、ばわわーっと。……それが本当に起こったからだ。
町中に選挙のポスターがべたべた貼られた。それらはこんな感じだった。
「鹿骨市の明るい未来」

「笑顔と長寿の町、鹿骨市」
「鹿骨市民による鹿骨市政！」
…唖然とするくらいに、町中いっぱいに、「骨」という文字が溢れかえっていた。
しかも滑稽な偶然がさらに重なる。そちらの方が性質が悪い。
どう性質が悪いか？　あのうるさい選挙カーの広報に耳を傾ければわかるはずだ。
「骨川タカシ、骨川タカシでございます。鹿骨市の明るい未来のため！　骨川タカシ、骨川タカシ！」
「鹿骨生まれの鹿骨育ち！　鹿骨の骨川です、ありがとうございます！　鹿骨の骨川ジュウゾウをよろしくお願いいたします！」
与野党が、同じ苗字の候補者を立てて、互いの票を潰しあうことが稀にある。…なんと、骨川という珍しい苗字の候補者が二人も立候補したのだ。
町中の選挙ポスターには「骨」という文字が躍りまくった。
どちらかの候補が、鹿骨市の骨は骨川の骨なんていうキャッチフレーズを作ったらしく、とにかくどっちを向いても「骨」だらけの選挙戦となっていったのである。
学校の生徒たちは、登校時にも下校時にも「骨」にまみれ、学校で授業を受けている時にも、表を走る選挙カーが「骨」を連呼した。
それはまさに「お骨サマの呪い」。骨にばわわーーっと囲まれる、呪いの具現。

聞くところでは、女子のコミュニティでは「お骨サマの呪い」が深刻な広がりを見せているらしく、「骨」という字に神経質になる子も続出しているらしい。
男子の中には強がり、「お骨サマの呪い」なんて下らないと公言するヤツも初めの内はいた。
だが、そういう生徒は決まって、まるで天罰であるかのように「骨」の集中攻撃を受け、「お骨サマ」を馬鹿にする発言を撤回させていく。
もはや、笑う他なかった。
僕らの生み出した呪いは完全に学校に馴染み、今や僕らの手を離れた、一匹の独立した生き物であるかのようだった。
この頃には、お賽銭を入れれば呪いが解けるという話はかなりまかり通るようになっており、いくらお賽銭を入れれば呪いが解けるのかという話が、あちこちのクラスで真面目に議論されていた。
僕らはニヤニヤ笑いながら、だけれども表向きは深刻そうに振る舞いながら。一円でも多く入れた方がよい、あまり安いとかえって「お骨サマ」に失礼だと、自分たちが得をするように誘導していく…。
「こちらスネーク…。大丈夫だ、誰も来てない！」

「こちらフォックス、後方も問題なし！　行け！」
「アリガトサン…だよな。…393……。OK、開いた…！」
賽銭箱の鍵を開け、引き出しを開ける。
開ける時の手応えがもう初めから違った。ジャリリという心地よい金属音。
「ぅお……。入ってるぜ……!!」
「いいから早く集めろよ！　他所の場所で数えるぞ！」
「お、おう！」
僕らはひと気のないボロアパートの裏にある駐輪場に座り込むと、さっきの賽銭箱の中身をコンクリートの上にぶちまけた。
色とりどりの硬貨は、さながら小さい頃に読んだ「宝島」の財宝を想起させる。
「えっと、……いくらあるんだよこれ…。そこそこにありそうだよな！」
「おおお…、五百円玉だらけじゃん…、すげぇ…。」
「マジかよ、…みんな金持ちだなぁ…。」
この頃、僕らはまだ知らなかったが、最低五百円は入れないといけないというルールがすでに生まれていたらしかった。
五百円は中学生にとって、お賽銭に入れるにはちょっと大きな額だ。フライドチキンの骨が上履きの中に放り込まれていた程度で入れる額じゃない。

そう、これは「呪い」に対するだけのお賽銭ではない。…多分、学業成就を祈る意味も含まれているのではないかと思う。

受験という目に見えない壁に日々圧迫感を覚える彼らには、祈る身近な対象が欲しかったに違いない。そういった万感の思いを込めて、五百円なのだ。

そうして考えると、僕らのこれは悪戯ではあったわけだけど、日々プレッシャーに悩む生徒たちに祈る対象を作った、善い行ないだったようにも思える。

彼らは五百円を投じることで、受験に対する重圧から少しでも逃れられる。僕らが「お骨サマの呪い」を作らなかったら、たとえ五百円玉を一枚握り締めたところで、何の安心感も抱けなかったはずなのだ。

……という高尚なことを考えはしたが、うまく言葉にできなかったので、それを博之や亨に伝えることはやめた。

僕らにはそんな小難しいことよりも、今は目の前の硬貨が合計いくらになって、いくらが自分の取り分になるのかの方が大切な問題だった。

集計の結果、合計金額はなんと五千円を超えた。

三で割ると僕の取り分はいくらだろう…？　少なくとも千円は超える。僕の小遣いは月に千円だ。だからそれは僕の月収を超える大金だった。

ちょっとした暇潰しの悪戯が、思わぬ収入に！　僕らは色めき立った。

何しろ、僕らはこの作戦を立案した時、いくら儲かったらいいねと楽しそうに話し合ったが、内心誰もが、どうせ儲かっても何十円かくらいだと思っていた。
それが、蓋を開けてみればこれだけのお金に！
しかも、この収入は今後も見込める可能性が高い。
「お骨サマの呪い」は受験などのプレッシャーと関係があるに違いないのだから、恐らく、受験のシーズンが近付けば近付くほどに「呪い」は強く意識される。
最終的にいくら稼げるのか、まだまだ未知数なのだ…！
「…すげえな……。俺さ、正直ここまでうまく行くとは思わなかったよ…。」
「俺もだよ…、すげぇよヤベぇよ…！」
「どうする？　今後も『お骨サマの呪い』続けるか…？」
「…充分、軌道に乗ったんじゃねぇのかな。」
「だよな。もう俺たちがわざわざ何かしなくても、呪いは勝手に行き交ってるもんな。」
「まぁ、あとはほどほどでいいんじゃねぇの？　朝早くに起きてまで何かしなくてもいいと思うぜ。」
「だよなー、あれは眠かったもんなー！　あはははははは！」
「取りあえず、分けるか！」
「まずは自販機で乾杯しようぜ!!」

「「おうおう！」」
近くの酒屋の自動販売機に行き、僕らは呪いの大成功を喜び合い、ノンアルコールの勝利の美酒を傾けるのだった。
それは本当に格別な味で、あぁ僕らはこの一杯に酔うために悪戯を積み重ねてきたのだなぁと、そう思った。

根付いた呪い

「何だか流行ってるんだってねー！　例の『お骨サマの呪い』って！」
今日は優花おばさんは非番らしく、家族と一緒に食事をしていた。
そして、僕にお茶碗を渡しながら唐突に言った言葉がそれだった。
お母さんが、何ですか呪いって？　と口を挟む。
「先日の、黒板落書き事件を皮切りにすっかり学校中に広まっちゃったらしいんですよ。何だか、学校全体で『骨』を友達の机やカバンに放り込むのが流行っちゃってるらしいんです。」
「『骨』って、何の骨かしら。何だか嫌な悪戯ですねぇ…。」
「本当の人間の骨のわけないよ。多分、肉屋か何かのゴミから漁った、鶏とかの骨じゃな

いかな。」
「多分ねぇ！　鑑識が調べたわけじゃないけど、多分そうだと思うよ。友宏くんも『骨』とかやられた？」
「うん。たまにやられます。机の中とか、下駄箱の中とか。」
「子どもってのはどうしてそういう変な遊びが好きなのかしらね。友宏はそんな下らない遊びにかまけちゃ駄目よ？」
　かまけるどころか仕掛人なのだが。思わずニヤリと笑いそうになるのをぐっと堪えた。
ただ、「お骨サマの呪い」についておばさんの耳に続報が入っていることだけは気になった。
「優花おばさん、詳しいですね。また警察に通報とか入ったんですか？」
「うぅん、そういうわけじゃないよー。署の人がその後どうですかって学校に電話して聞いたみたい。そうしたら、今じゃ落書きどころか、校内で大流行してますよって。」
「確かに大流行してますね。まぁ、一過性かもしれないですけど。」
「でも気持ちはわかるね！　子どもの頃ってどういう訳か、あまり綺麗じゃないものに関心が集まるんだよねぇ。今は食事中だから言えないけど、私たちも子どもの頃、色々綺麗じゃないもので悪い悪戯をしたからなぁ！」
　それを聞き、どういう悪戯かを知る父さんは大笑いした。

「…じゃあ、結局、例の落書き事件は変質者の犯行ではなく、誰かの悪戯程度で決着が付きそうですか。」
「うーーーーん、どうだろうねぇ。まぁ、そういうことになるんじゃないかなぁ。」
おばさんは曖昧な返事をしながらフライをかじった。
それは何かを隠しているというような誤魔化し方ではなく、すでに事件性が失われているので興味がなくなった、という風に見えた。
それを見て、ひょっとすると僕らの洒落(しゃれ)にならない悪戯を警察がこっそり捜査しているかもしれないという疑いが晴れる。
何しろ、もはや「お骨サマの呪い」は学校にすっかり現象として定着してしまっているのだ。
僕が何をしなくとも、勝手に「骨」は飛び交い、勝手に呪いを充満させている。あの黒板の落書き事件さえ忘れられてしまえば、何も恐れることはないのだから。
「まぁ、子どもの悪戯ですよね。よくあることです。おばさんが学校にいた時も、そういう呪いとか祟りとかの話ってありませんでしたか？」
「うん、いっぱいあったねー！　学校の怪談とかは時代を越えて受け継がれるちょっとした文化じゃないかと思うよ。」
「じゃあ、『お骨サマの呪い』も、一過性の流行りでなく、…ずっと学校に残って受け継が

れる…？」
「かもしれないねぇ！　あっはっは！」
もし一過性でなく、この呪いがずっと続くとしたら、僕らはずっと小遣いを得続けることができる。そうなれば、壱万円くらい、いやもっともっと得られるかもしれない。しかも僕らはこれ以上何をしなくても勝手に収入を得られるのだ。
いっそのこと、他の学校にも呪いが広まってくれればいいのになぁ。あっはっはっは。
「友宏くんさ、男の子の世界ではあまり呪いって怖くない？」
「はい？」
「うん、女の子の世界ではね、結構、呪いとか祟りとか迷信ってまかり通っちゃうんだよね。姉さんもそういうのありませんでしたか？」
「あー…、忘れちゃったけど色々ありましたね。呪いとかは覚えてないけど、おまじないとかはたくさんありました。恋の関係が多かったかな、こうしてこうした時、もしもこうだったら二人は相思相愛になれるとか、そんなのがたくさんありましたね。」
お母さんとおばさんは、懐かしき時代のことを思い出しながら、いろいろとおまじないの話をしていた。
それを聞いてると、時代を問わず思春期の世代には、元々こういう要素が流行りやすい

素地があるんだなと思わされる。学校の怪談が世代を越えて語り継がれているのも納得だった。
「あははは、女子は本当におまじないとか好きなんですね。」
「う～ん、でも知ってる？　友宏くん。おまじないってね、漢字で書くと『お呪い』になるんだよ。」
ちょっと驚く。それは知らなかった…。
だとするならば、女の子の恋占いも含めて、ずっと昔から学校という世界には「呪い」というものが蔓延してきたということなのだ。
僕らは意識して新しい「呪い」を生み出したけれども。きっとわざわざ生み出さなくても、日々新しい呪いが生まれ、育ち、浸透していくのだろう。
「あははは、何だか呪いって馬鹿馬鹿しいですね。子どもだけの世界だからまかり通る、変な噂というか。そんなものがまかり通ってるという時点で、頭が幼いことの証明みたいでみっともないです。」
「あっはっはっは！　でもね友宏くん。呪いってあんまり馬鹿にしない方がいいんだよ？八百万の神というように、日本という国にはあらゆるところに神さまが宿ってる。だから呪いを馬鹿にすることは、その内の神さまの一つを馬鹿にするのと同じことなんだよ。」
「そういうものですかねぇ？　だって、学校の誰かが悪戯でやったことが切っ掛けで始ま

った程度の悪戯染みた呪いですよ？　『お骨サマ』なんて馬鹿馬鹿しい、実在するわけないじゃないですか。」
　実在などするわけないじゃないか、「お骨サマ」なんて。第一、生み出したのは僕らで、そのネーミングも投げやりなことこの上ないやり方で決めた。そんないい加減な存在をどうして神さま扱いできるのか。
　そう笑い飛ばそうとしたが、おばさんは珍しく真面目な表情だった。
「神さまってね、日々生まれているものなんだよ。知ってた？」
「え？　神さまって生まれるものなんですか？」
「神さまはモノに宿る存在だもの。モノが生まれれば全てに神さまが宿る。…例えばほら、昔の映画のエピソードになかったっけ？　アフリカの原住民が崇めているご神体がコーラの空き瓶だったって話。飛行機で上空を飛んだ不心得な誰かが空き瓶を放り投げたんだろうねー。で、空から輝く見たこともない何かが降ってきたと言って原住民たちは驚き、神の使いに違いないと思い崇めたってわけ。」
「あははは、何だかおかしい話ですね。捨てた方はゴミのつもりなのに。」
「そう、そこがポイントだよ。神さまってのはね、信じる人たちが込めるものなの。コーラの空き瓶がそう。捨てた方は単なるゴミのつもりでも、崇める人たちが神さまが宿ると信じれば、それは神聖な存在になって本当に神さまが宿るというわけ。」

「じゃあ、『お骨サマの呪い』も、信じる人たちがいれば神さまが宿る…？」

おばさんはもう一個フライを取りながら、ウンと頷いた。

「宿るね。お骨サマという架空の存在を生み出したのは、恐らく生徒のほんの悪戯心からだったんじゃないかと思う。でも、呪いを信じる人たちがすでに現れているなら、お骨サマという存在にはすでに神さまが宿ってる。……つまり『お骨サマ』という祟り神が、すでに存在している——って言ってもいいだろうね。」

「…………………………。」

僕らにとっての「お骨サマ」は、まさにコーラの空き瓶だ。

でも、…それを真に受けた人たちが本気で信じれば、その空き瓶には神が宿る。つまり、……「お骨サマ」という祟り神が本当に現れるということ。

…あはははははは…？

馬鹿馬鹿しい。こんなチープなネーミングセンスの神さまが本当に？　神さまになって？　存在する⁇　あははははは…。

第一、僕らは「お骨サマ」という名称と、呪いにかかると、骨がばわわーっとたくさんいっぱいという、それだけのイメージしか広めてない。

神さまとして存在するなら、一体どういう外見をしているって言うんだ？　外見などあるわけがない。僕らはそんなもの決めていないのだから。

だが、すでに僕らが何もしなくても「お骨サマの呪い」が自分勝手に動き回っているように、僕らが何もしなくても「お骨サマ」の外見は自分勝手に決まろうとしていたのだった。

昼休みの時間。クラスの男子が何人か、誰かの席に集まっていた。

その席の生徒は、今日は病欠していた。…どうやらその隙に、その生徒の席に落書きをしているようだった。

彼らが落書きを終えて立ち去った後、みんながそれを覗き込み、きゃあきゃあと騒いでいたので僕もそれを見てみた。

机の上には鉛筆でいっぱいに落書きがされていた。

「骨」という字が机一杯に書き殴られ、これが悪戯とわからぬ者が見たなら狂気を感じるに違いない。そういう内容だった。

それよりも僕が驚いたのは、この骨という文字の海の真ん中に立つ、変なテルテル坊主のような絵だった。

だがそれには、誰もが知る晴天を祈るおまじないのテルテル坊主とは明らかに違う特徴があった。……顔が髑髏だったからだ。

テルテル坊主がそうであるように手はなく、代わりにマントのような服から骸骨の足の

ようなものが覗いていた。
この変な落書きのテルテル坊主が「お骨サマ」を示すものであることは明白だった。
こんな変な外見、みっともないったらありゃしない……。そもそも僕ら三人は「お骨サマ」の外見など一度も設定したことはない。だからこんなふざけたテルテル坊主は、さっき落書きをした連中が勝手に作り出したイメージでしかないはずなのだ。
…だが、この髑髏のテルテル坊主は、誰にでも簡単に描ける絵だったこともあってか、生みの親である僕らの意向などまったく問わずに定着していった。
かつて僕らが持ち込んだ骨は、ゴミ箱に捨てると誰かが拾い、結局また悪戯に使うという繰り返しなので、見つけ次第、先生が没収するようになっていた。
悪戯好きな何者かが、僕らが肉屋から漁った骨とは違う骨を持ち込んでいるようだったが、それでも徐々に数が減り、「骨」そのもので呪いをやり取りすることが困難になっていた。
その結果、「骨」に代わって飛び交うようになったのが、この髑髏テルテル坊主の絵だったのである。
ノートの切れ端に、この不吉なテルテル坊主を描き、誰かの机の中やカバンの中に放り込む。ノートと鉛筆など誰でも持っているのだから、「骨」よりもこの呪いは遥かに容易に浸透していった。

そして気付けば、……この馬鹿馬鹿しい髑髏のテルテル坊主は、「お骨サマ」の姿として誰もが認める象徴となろうとしていた。

このテルテル坊主は手がないものなので「お骨サマ」には手がなく、呪いをかけられると両手がもぎ取られてしまう、などという新設定も登場していた。

僕らは、今や自分たちの手を離れて勝手に成長を続ける「お骨サマ」を、何だか面白いことになってきたなと笑い合った。

……博之と亨は笑っていたけど、…僕だけはなぜか、漠然とした不安を持っていた。でも言うと、意気地なしと言われそうなので口にはできなかった。

優花おばさんの言ったとおりになってきたからだ。

呪いを生み出した僕らにとっては悪戯にしか過ぎないものでも、それを信じる人たちにとっては大真面目な呪いなのだ。

おばさんの言う喩えの、アフリカの上空を飛んだパイロットが投げ捨てたコーラの空き瓶が、原住民に拾われ神聖化するというのはまさに的を射ていた。

…だとすると、………このままどこまでも進むと、「お骨サマの呪い」はどこまで成長するのだろう…?

僕らが生み出したのは多分、名前だけだった。

それが今や姿を持ち、様々な設定やエピソードを身にまとって血肉としている。

そして、「お骨サマ」という存在が完全に確立したら……、次にはどうなるのだろう。
まさか本当に呪いの力を得て、……僕らがかってそう設定したように、学校に祟り神として君臨し、見境なく生徒たちを呪うようになるのだろうか？
そして、最後には本当に、その呪いの力で生徒たちに害を与えるようになるのだろうか……？
馬鹿馬鹿しい…。いくらなんでもそこまで行く訳がない。
そう思いたいが、当初の予想を遥かに超えて成長を続ける「お骨サマ」に、僕は不安感のようなものを感じ出しているのだった…。

拝啓、お骨サマ

「こちらスネーク。装甲車両が一台、それをやり過ごせば敵影なし！」
「こちらフォックス、こっちは問題ない。…車、抜けた！」
「……おおおおぉ、…すげえよ、またいっぱい入ってるよ！」
先日、僕らが中身を抜き出してから一週間ちょっとしか経っていない。にもかかわらず、前回と同じくらいの額が入っていた。
「す…っげぇ……。いや、本当にすごいよな…！」

「俺たちさ、『お骨サマ』の神官じゃね？　悪魔神官！」
「何これ。………封筒？」
硬貨に交じって折り畳んだ封筒のようなものも入っていた。
安っぽい茶封筒で何も書いてはいない。だが中には何かが入っている厚みがあった。
まさか、お札が何枚も入っているのでは⁉　と口にしながらも、どうせ落書きの書いてある下らない紙が入っているのだろうと、皆、内心は思っていた。
だから、絶句する。中からは、本当に壱万円札が出てきたからだ。
それも一枚や二枚ではない。……なんと五万円も入っていたのである。
短くない沈黙の後、一番最初に口を開いたのは博之だった。
「お……おいおいおいおい、……何だよ、マジかよ……。」
その口から出た言葉は、多額の小遣いが転がり込んだことを喜ぶものではなかった。
「あ、…あははは。マジかよマジかよ！　くっだらねぇ！　『お骨サマの呪い』なんて普通じるかよ⁉　五万も入れるかよ普通ー！」
五百円玉が一枚なら洒落で付き合っているのだろうという気もした。
だが、…五百円玉で例えたら、百枚分に当たる金額が一度に入っていると、…それは入れた人物が、洒落という規模を百倍逸脱していることを示す。
学校の怪談程度で五万円なんて高額を入れるか？　本気かよ気持ち悪い…。三人が三人、

そう思っているに違いなかった。
でも、………今の僕には何となく理解できていた。
僕らにとって悪戯の域を出なくても。……このお金を入れた人間は、五万円を賽銭箱に納めるに値する「呪い」だと信じたのだ。
その大きなギャップに僕は、今や完全に「お骨サマの呪い」は僕らの手を離れ、大きく肥大していることをこれまで以上に強く思い知るのだった。
そこまで考えが至ったのは、…多分、僕だけだったと思う。
博之と亨は、しばらくすると次第に落ち着き、お年玉でもなかなか得られない高額の小遣いに狂喜し、五万円をどういう配分で山分けするかに話題を移していた。
…こういう事に頭を悩ませるのは、やはり僕だけが肝っ玉が小さい証拠なのだろう。
優花おばさんみたいな人なら、……きっと博之や亨のように、ラッキー！　と大喜びしているに違いない。…優花おばさんの豪快さに少し憧れている僕には、素直に喜べない自分が少し情けなく感じるのだった。
これ以上、封筒には何も入っていないはずなのだが、何となく封筒を逆さにして振ってみた。………すると、ストンと。折りたたんだ小さな紙片が落ちてきた。
何だろう…？
拾い上げるとごわごわした手触りがした。澱粉ノリを紙に塗ると、波打ってごわごわに

なる。その手触りによく似ていた。
多分、あの髑髏テルテル坊主の落書きでもしてあるのだろう。見る前から想像がつく。
僕はその絵を話のタネにしようと、博之と亨に紙片を示し、みんなの前で広げた。
……だが、僕の予想は大きく裏切られた。
僕ら三人の誰もが、そこに書かれている内容を予想できなかったからだ。
「……うぉ…………………。」
誰ともなく呻(うめ)く。
この紙片だけが入っていたなら、ここまで気持ち悪い思いはしなかったかもしれない。
……だが、同じ封筒に五万円入っていたことを考えると、……そこに書かれている内容は決して笑い飛ばせるものではなかった。

『田無美代子(たなしみよこ)を呪ってください』

紙片にはそう書かれていた。
書かれていた、というのは正しい表現ではない。文字は全て、新聞紙の文字か何かの切り貼りだったからだ。何だか脅迫状か何かを思わせて、一層に気持ち悪かった。
つまりこの五万円は……それに対する代価のつもりに違いない。

しばらくの間、誰もが絶句し、呼吸することすら忘れていた。
…やがてその沈黙に耐えられなくなった博之が紙片を奪って凝視すると、次は亨が奪って穴が開くほどに見る。そして再び僕の手元に戻り、僕も改めてまじまじとその文面を見た。
……ふざけてやったという様子はない。…明らかに、田無美代子という人物を呪ってほしいという明白な「悪意」が感じられた。
優花おばさんの話が脳裏に蘇る。
『お骨サマという架空の存在を生み出したのは、恐らく生徒のほんの悪戯心からだったんじゃないかと思う。でも、呪いを信じる人たちがすでに現れているなら、お骨サマという存在にはすでに神さまが宿ってる。……つまり『お骨サマ』という祟り神が、すでに存在している——って言ってもいいだろうね。』
…僕は今さらのように、この悪戯が、僕らがそうだと信じているように、…他人にとっても悪戯で済んでいるのか疑問に思うようになっていた。
この五万円というお金は、「お骨サマ」という神さまに捧げられたものなのだ。それを僕らが横領することは、…僕らが「お骨サマの呪い」に遭うということを意味するのではないだろうか……？
いや、そんなことよりも。

藁人形に釘を打つ呪いの儀式をもしも見られたら、見た相手を殺さなくてはならないなんていうのがあるじゃないか。
……この五万円を入れた誰かが、この紙片を僕らが見たことを知ったなら、……。
五枚の壱万円札を見る。……その常軌を逸した金額の持つ意味を、僕は今さらのように知る…。
「……ねぇ、……まずくない…？」
「…………大丈夫だよ。…誰にも見られてねーんだから大丈夫に決まってんじゃねぇかよ。」
一番強がっている博之にもきっと、少し不安な気持ちがあるに違いない。…だから僕の弱気な発言にこうも不機嫌に返すのだ。
博之は空騒ぎをしながら小銭の集計をし、合計金額が綺麗に三で割り切れたと言うと、全員に分け前を分配した。
それぞれの前に取り分の小銭が差し出されるが、…僕も亨も、それを受け取っていいものか初めて躊躇した。
その臆病そうな仕草が一層気に入らなかったのだろう。博之は不愉快そうな顔をしながら、自分の取り分をいやに乱暴に自分のポケットに捻りこんだ。
それを見て亨も、はっと我に返ったような表情をしてから、自分の分け前の小銭を掻き

集めて同じように乱暴にポケットに捻りこんだ。
…僕だけが、このお金に手をつけていいものか、この期に及んでも迷っていた。
「何だよ、友宏。お前、怖(こえ)えのかよ。」
「……いや、…別に。怖くなんかないよ。」
「この程度の小銭でビビってどうすんだよ、オイ！」
「もらえよ、俺たち仲間だろ!? 仲間の公平な分け前じゃねえかよ！」
こういう時に仲間という言葉が出て来るとは思わなかった。
どちらかというと、自分だけがバツを受けたくないので、赤信号をみんなで渡ろうと呼びかけているようにしか見えなかった。
そこまで怯(おび)えながら、どうしてこの程度の小銭をポケットに納めなければならないのか、ほんの少しだけ疑問だった。…だがその疑問をうまく口で言い表すには、僕はまだ幼すぎるようだった。
「ったく、友宏は肝っ玉小せぇなー！」
「ち、小さくなんかないよ！ んだよ馬鹿にすんなよ！」
気にしてることを言われ、反射的にカチンと来た僕は、やけっぱちに小銭を掻き集めるとポケットに納めた。
それを見届けると、博之も亨も、まるで僕が仲間としての通過儀礼を遂げたような、安(あん)

堵感に似た笑顔を浮かべるのだった。
…僕が変に逆上せず、そのまま取り分を拒否し続けたら、僕らの友情はどうなっていたのだろう。……それを考えると、何だかとても笑えない気持ちになるのだった。
やがて、今度は僕が沈黙に耐え切れなくなり、何か話題を切り出そうとあれこれ思案した。
「…そ、それよりさ、田無って誰だろう？」
「美代子ってんだから、女だろ。学校の女子か？　うちのクラスにはいねぇよな。」
「あーー…、えっと、学校の女だよ確か。一年の時、同じクラスに田無って女がいた気がする。一度も話したことないから、どんなヤツかちっとも覚えてないけどさ。」
「なら、他のクラスか。……じゃあこの手紙を入れたのも同じクラスのヤツかね。」
「じゃないの？　他のクラスのことだし、嫌われてる女なのかよく知らないからな。」
「多分、同じクラスの女じゃないのかね。男なら呪いなんかに五万円も賽銭するくらいなら、拳で仕返しするだろ！」
わはははははは。三人で笑い、ようやく陰鬱な雰囲気が少し晴れた。
だがそこで、また優花おばさんの言葉が脳裏に蘇る。
そうだ…、おばさんは言ってた。女子の世界では呪いのようなものが流行りやすいと言っていたような気がする。

確かに亨の言うとおり、相手が憎くて呪うために五万円も入れるなんて男のセンスじゃない。

そもそも男は嫌いな相手だったら、自分で直接仕返しすることを考える。呪いなんて他人任せなものに訴えるヤツはなかなかいない。……ましてや五万円も払って神頼みなんて絶対にしない。

「どうするよ？」

「どうするって、…何をだよ？」

「いやさ。せっかく五万円も入れてくれたんだしさ。少しは還元してやらねぇと悪いんじゃねぇの？」

「あっはっは！　それって何だよ、田無って女に集中攻撃をかけるってことかよ？」

「……知らない女子にそこまでやるのは悪い気がするけどな…。」

「友宏だって分け前を取ったじゃねぇかよ。俺たちは仲間だぜ？　プロの傭兵(ようへい)だぜ？　雇い主からの入金があれば、どんな作戦でもこなす！」

「よっしゃ、新しい作戦の始まりだぜー!!」

博之と亨の間では、もう新しい遊びのシチュエーションが始まっているようだった。

…僕らが田無という女子を呪いで攻撃すれば、「お骨サマの呪い」には、願掛けをすれば相手を呪えるという新しい設定が加わるのだろうか。

今でさえ、僕らが何もしなくとも、お骨サマは進化と成長を続けていて、僕らの手の平には納まらない存在になっている。

それを、……本当に祟り神のような存在に後押ししてしまって良いのだろうか……。

盛り上がる二人に水を差すと、また肝っ玉が小さいと言われるに違いない。

だから僕は内心とは裏腹に、取りあえず表向きは彼らに同調するのだった。

二人はきっと、明日から他のクラスにいる田無という子に集中的な悪戯を仕掛けるだろう。

…だが、仕掛けられる子とそれを見ている周りの生徒にとって、それは恐らく単なる悪戯では済まない。

僕らは、コーラの空き瓶をバラ撒こうとしている……。

僕は、この悪戯が、取り返しのつかない何かの入口になるとは、まだ気付いていなかった…。

田無美代子を呪う

田無美代子のいるクラスはすぐにわかった。

B組の女子で、細身で背の高い、ちょっと性格のきつそうな雰囲気の子だった。

話したことはないので性格はわからないが、…何となく、仲の悪い人が多そうな気がした。
彼女に対する攻撃は結局、みんなで隙を窺い、各々の方法で自由に仕掛けるということで決定した。
最初は、黒板落書き事件の時のように三人掛かりで大仕掛けな悪戯をしようということになっていたのだが、田無攻撃に加担したくない僕がそう提案したのだった。
…僕だけは何もしないことで、恨みも面識もない女の子への攻撃が少なくとも三分の一は軽減される。それが何かへの贖罪になるのかはわからないけれど、……とにかく「お骨サマの呪い」をこれ以上、大きくすることに加担するのはもう御免だった。
博之と亨は、どんな悪戯をしてやろうかと、作戦会議と称して色々な悪巧みを楽しんでいるようだった。僕も上辺だけは話に加わり、彼らと笑い合う。
……そして、いよいよ田無美代子に対して「お骨サマの呪い」が実行された。
隣のクラスのことなので、彼女に対しどのような攻撃がなされたのかはよくわからない。
下校中に、二人がこれこれこういう悪戯を今日は仕掛けたと得意気に言うのを聞いて、彼女の受難を推し測るのみだった。
その内容は、机の中に怪しげな落書きを放り込んだとか、下駄箱に「骨」を仕込んだとか、これまでの悪戯からそう逸脱しているものではないようだったので、僕はちょっと安

心する。
……だが、田無という子がそれを悪戯程度に思ってくれているかが、少しだけ気掛かりだった。
幸い、博之と亨は五万円分に値するだけみっちりと攻撃しようという意思はなく、ほんの二〜三日ほど悪戯の対象にするだけで、それ以上しつこくするつもりはないようだった。
僕はそれを知り、あの呪いの手紙以降ずっと胸の中に残る、しこりのような不安感が少し拭(ぬぐ)えるのを感じていた。
……だが、僕が楽観するような事態にはならなかった。
一週間くらいしたある日、田無に対して「お骨サマの呪い」が未だ続いているという噂が、自分たちのクラスにも及んできたからである。
しかも、悪戯というよりはイジメの集中攻撃のような様相になっているらしく、相当、田無が追い詰められているらしいのだ。
さすがにこれはやり過ぎだと思い、博之と亨に言った。
「博之さ、田無攻撃だけど、さすがにもう一週間以上やってない…？」
「お、俺はもう何もやってないよ…。亨だろ？　俺はもう田無なんか知らないよ。」
「えーー!?　何だよ俺だって何もやってないよ。やったのは先週の土曜日までで、それ以

降は俺、田無には何もしてないよ！」
「じゃあ何だよ…。博之も亨も、もう田無には何もしてないってのか…？」
「あぁ、少なくとも俺はやってないよ。」
「俺もやってないよ！」
「…だから最近やってるのは、多分B組の連中じゃねぇかと思うんだよな。」
「だよな。俺たちが仕掛けてる間にも、骨とか集めてはまた田無の机の中に入れなおしてるヤツとかいたみたいだし。」
博之と亨の話も総合すると、彼らの集中攻撃が切っ掛けとなり、彼ら以外の人間も面白がって参加し始めたらしかった。
それはまるで「お骨サマの呪い」に便乗した匿名の集団によるイジメのようなものに見えて、少し気持ち悪い…。
悪戯とイジメは全然違うつもりだ。でも、僕らの悪戯が切っ掛けで田無がイジメを受けているとすれば、僕らの責任は免れないだろう。
伝え聞く話では、机いっぱいに呪いの言葉を落書きされたり、カバンいっぱいに骨を詰め込まれたり、自宅にも骨が送り付けられたりと、ずいぶんとエスカレートしているらしい。
「……いや、さすがに最近のは俺らでも気の毒だと思うよ。B組の連中、結構容赦ないよ

な。」

「ちょっと聞いた話だと、もともと田無って女は、B組で結構嫌われてるらしいんだよ。だから、俺らが仕掛ける以前から、そういうムードが多少あったんだろうぜ。」

「つまり、僕らの悪戯が、そういうムードに油を注いでしまったわけだ。」

「特にB組の女子のグループに嫌われてるらしい。大抵の悪戯は男がやってるんだけど、田無に関しては女もやってるみたいなんだよな。いや、むしろ女がやってるみたいだな。」

「…女子のことはよくわからないんだけど、女子のグループ内では仲が悪いのもいたらしいよ。女って結構えげつない時あるからなぁ。」

呪いなんていう神頼み自体、男のセンスではない。

田無を嫌う女子のグループの誰かがあの手紙を入れ、博之と亨の仕掛けた「呪い」に便乗し、その後も引き継いでいるということなのか。

「田無ってヤツがどういうヤツかは知らないけどさ。何だか気の毒だよな…。」

学校中で流行る「お骨サマの呪い」を田無美代子に下す。…そこまでは悪戯の領域のはずだ。でも、それを切っ掛けにこんなしつこいイジメに発展するとわかっていたら、やるべきではなかった…。

「知らねぇし俺のせいじゃねぇだろ！　最初の三日は俺のせいだとしても、それ以降は他のヤツの責任だぜ!?　俺は関係ねぇよ！」

「だからさ、みんなえげつないってことなんだよな。誰かの悪戯に便乗してちょいとふざけたいだけなんだよ。誰もがリスクなく、ちょっとした退屈しのぎで誰かに悪意をぶつけたがってる。俺たちはその最初のいくつかをやりはしたが、それに便乗した連中だって悪いんだよな。俺たちだけが悪いわけじゃねえよ！」

なぜか、博之も亨も必死に言い訳をしているようにしか見えない。

そのみっともなさを見て、僕は結局、…呪いなんてものは存在しないことを知る。

呪いに見えるものは、何れも「呪い」を隠れ蓑にした人の悪意でしかない。

呪われたくないから、呪う側に回りたいというのは、苛められるくらいなら苛める側に回りたいという、中学生の渡世術そのままだ。

思えばそうなのだ。「お骨サマ」を生み出したのも僕らという人だし、それに姿を与え、呪いや設定を生み出していったのも全て人だ。それは単なる人の醜さの象徴でしかない。

……いや、それでももし「呪い」が実在するのだとしたら。

それはきっと、僕たちの学年に潜む受験や進路への不安から何かに怒りを吐き出したいと駆らせる衝動のことに違いない…。

その衝動は、内申書に危険が及ぶようなリスクを嫌うだけで、誰かの尻馬に乗って何のリスクもなく悪意が吐き出せる状況が生まれたなら、誰の心にも悪意を芽生えさせるの

だ。
その悪意を芽生えさせるのが、「お骨サマの呪い」という覆面的な存在。
「お骨サマの呪い」という悪戯に便乗する限り、その悪戯が誰によって行なわれたかは問われない。あちこちで日常的に誰かが行なっている〝現象〟なので、個々の犯人捜しなど時間の無駄だからだ。
そして、誰かが「お骨サマの呪い」で集中攻撃を受けているのを見つけると、自分もそこにちょっぴりだけ加担する。自分以外にもみんなが加担しているのだから、赤信号をみんなで渡る安心感がある。
クラスみんなが苛めているいじめられっ子に、今さら自分が消しゴムを一つ投げつけたところでどんな罪悪感が？
自分よりもっともっと酷いことをしている人が大勢いる。自分なんて可愛いもんだ。
そうして、自分の良心に傷一つ付けずに、日々の鬱積を覆面を被りながら晴らす…。
そんな都合のいいイジメを提案したのが「お骨サマの呪い」なのだ。
「お骨サマ」なんて神さまは最初からいない。
あったのは「お骨サマ」という覆面だけだった。その覆面を被り、身近な誰かに悪戯をすることで一時的な快楽を得て、将来への不安感をわずかの間だけ誤魔化し忘れているだけ。

「結局さ、…呪いとか何とか言ったって、単なるイジメと同じなんだよ。」
「あははは、そうかもな。」
「さすがにB組の、特に女子はやり過ぎだなって思うぜ。俺らだってあそこまでえげつなくはやらないもんな。」
「……『お骨サマの呪い』っていうイジメの口実を生み出した責任って、ないのかな。」
確かにこんなことになるなんて予見は出来なかった。でも、予見出来なかったから責任はないって論法にはならないと思う…。
田無はもともと友達らしい友達はいないらしく、味方もなく、今やクラス全体に苛められているような雰囲気の中で過ごしているらしい。
右を向けば左の子が机に骨を放り込み、左を向けば右の子がカバンに骨を放り込む。何かある度にヒステリックに叫んでは、物陰でクラス中がひそひそ笑う…。そんな陰湿(いんしつ)な状態になっていると聞く。
悪戯というのは、やられた方も笑って許せる範囲のものだと思う。……その見地から言えば、田無に行なわれているのは完全に悪戯の域を逸脱している。
「おいおい何だよ。友宏は最近、ビビり過ぎだぜ？　お前、今頃になってそりゃねぇじゃねーかよ。」
「いやその、…ビビってるわけじゃないよ。ただそのさ。…もう僕たちが最初考えてたよ

うな悪戯のレベルを超えつつあるんじゃないかなって思って。」
「まぁ確かに、もう悪戯の領域じゃないよ。立派な学校の新しい怪談だよ！　あはは！」
だが、僕の憂いは仲間たちには伝わっていないようだった。
彼らは言葉上は同情していたが、心底、田無が気の毒だと思ってはいないようだった。
…きっと、自分たちの生み出した「呪い」にB組のみんなが便乗してくれているのが、何だか面白く感じるのだろう。
「お骨サマの呪い」が今やこれだけの影響力を持つようになり、それに対して面白さより懸念を感じる僕は、やはり自分でも気にしているように肝っ玉が小さいからなのだろうか……？
「いや、そういうのじゃなくて……。何て言うのかな。……ほら、たまに下水でワニとかが見付かったりして騒ぎにならない？　最初は金持ちがこっそり輸入した子ワニなんだけどさ、育てるのに飽きて下水に流しちゃって。…それで大きく育って人を襲うような騒ぎになって……。」
「襲わねーだろ。だって『お骨サマ』なんてそんなものは実在しないんだしさ！」
「まさか友宏、本当にテルテル坊主のオバケが学校に住み着いてるなんて信じてるんじゃねぇだろ？　あんなのが本気でボイラー室に住んでると思うのかー!?」
どうも最新の噂では、「お骨サマ」は地下のボイラー室に隠された棺(ひつぎ)の中で眠っている設

定になっているらしかった。
「俺さ、去年の運動会の時、後片付けの手伝いでボイラー室に入ったことあるけどさ。文化祭の時の看板とかがたくさん積んである以外には、なーんにもない部屋だったぜ。棺なんかもちろんなかった。それが俺たちが作った怪談だけで、ポッと棺が現れちゃったりするわけか？　そんなわけねーだろ？　な⁉」
「ねーに決まってるんだよ。だって俺たちが作ったネタなんだからよ。友宏はこないだの五万円以来、ビビり過ぎだって！　慣れない大金だったんでブルっちまったんだろ？　肝っ玉小せーなぁ！」
「そんなに金が怖いなら分け前をなしにしてもいいんだぜー？　俺たちは取り分が増えて嬉しいしよ～！」
本当はお金にもう興味はないのだが、取り分を拒否すると仲間外れにされるかもしれないと思い、それは嫌だと一応首を振った。
彼らは口々に勇ましいことを言ったが、…こうして一歩離れて見てみると、内心は自分たちの予想を超えて大きくなり始めた「お骨サマ」に不安を抱いていることがよくわかる。……だからこそ彼らは、不安を払いたくて僕の言い分に対して食って掛かるのだ。
呪いがまかり通りやすい受験前のナーバスな学年。…それは僕らにも当てはまっている

のだから。
その時、亨が、そう言えばこんな話を聞いたぜ、と切り出した。
「実はさ、……面白え噂があるんだよ。例の田無の呪いなんだけどさ。…ほとんどはクラスの誰かの悪戯なんだろうけど、…………中にいくつか、本当の『お骨サマの呪い』が混じってるんじゃないかって噂があるんだよ。」
「わっはっはっはっは！　そいつぁいいやー！」
博之が大笑いをしたが、そこまで笑うほどの楽しい話題ではない。…何某かの感情を打ち払いたくて無理に強く笑ったように見えた。
「本当の『お骨サマの呪い』って……？」
「…うん。いやさ、田無のカバンに骨が突っ込まれるのは最近はよくあることらしいんだけどさ。……田無の後ろに席のある誰かが言ったらしいんだけど。…朝、登校してきてからさ、田無のカバンに誰も近付かなかったはずなのに…。」
その頃、田無美代子はカバンに悪戯されることがすでに何度もあったので、カバンに悪戯されないようだいぶ神経質になっていたという。
だから、登校してきて、カバンの中の教科書などを机の中に納め、空っぽになったカバンを机の脇に下げたあと、誰にも悪戯されないよう、ずっと席を離れずにいた。

そのため、田無の席以外の場所、例えばロッカーや下駄箱などに悪戯がし放題だったのだが……、少なくとも、田無が席に悪戯されたくなくて、席を休み時間も立たないようになってからは、席の周りへの悪戯は止んだはずだった。
ところが、二時間目の休み時間。何か放り込まれていないだろうかと気になった田無がカバンを逆さにしてみると、………たくさんの汚らしい骨がガラガラとあふれ出してきたのだ…！
田無は狂乱しながら、こんな悪戯をしたのは誰だとクラス中に対して吠え立てた。
彼女はクラスに敵が多かったから、クラスの誰もが、彼女を嫌う何者かの仕業だろうと思い、ある者は同情し、ある者はニヤニヤ笑いながら彼女が騒ぐのを遠巻きに見ていた。
そんな中、……彼女の後方に席を持つある一人が気付いたというのである。
田無が登校してきてから、彼女のカバンに触った者は一人としていなかったことに気付いたというのだ………。
「バッカバカしい！　じゃあ何だよ、人間の仕業じゃないって言うのかよ？」
「いや、……だってさ。田無が登校してきて、教科書を机に入れるだろ？　この時、田無はカバンの中を見てるはずだから、そんなたくさんの骨が入ってたら気付かないわけがない。……だから少なくとも、朝の登校してきた時点ではまだカバンには骨は入ってなかっ

たんだよ。……で、田無は悪戯されたくないから、カバンを机の脇に下げて、その後、休み時間も席を離れずにずっと座ってる……。」
そして、二時間目が終わった休み時間に、田無は何か悪戯をされていないかと不安が込み上げ、………カバンの中身を見て、異変に気付く。カバンを引っくり返すと…何十本もの骨がガラガラバラバラ……‼
田無本人は、自分でも気付かない間に放り込まれたんだと思っていたようだが。……ずっと見ていた、その人物だけは知っていたというのだ…。
「ありえねぇよ！　誰かの仕業に決まってるじゃねぇか！」
「いや、そいつが言うには絶対誰もカバンには近付いちゃいないって言うんだよ！」
「噂だろ？　第一、その見てたヤツって誰だよ。あん？　見てたってヤツも所詮噂話で、誰が見てたって個人名はないんだろ、どうせ？」
「…………確かに、…見てたヤツの名前とかは俺も知らないけどさ。…でもこの話、他のクラスでもちょっと有名で…。」
朝から誰も触れていないはずのカバン。そして、登校してきた時点で中に異状がないことは確認している。
……にもかかわらず、二時間目が終わるまでの間に、何者かが何十本もの骨をカバンの中に詰め込んだのだ。田無の机の脇にかけてあるカバンの中に、悪戯を警戒して神経質に

ば、それがなんて名前の人物でも構わない、という方が正解だ。苛めても構わないという大義名分があればあるほど、攻撃者の良心は傷つかない。
例えば、Aという人物がイジメを受けていると知っても、Aを知らない人たちは積極的にそのイジメに加わろうとは思わないはずだ。でも、Aに苛めてもいいという「大義名分」があったなら、たとえAを知らない人たちでも積極的にイジメに加わる可能性がある。……例えば、Aが卑劣な悪党で誰からも批判されている、とかだ。
あるいは、最後にはそんな大義名分も不要になるのかもしれない。……広場でみんなが知らない人物に楽しそうに石を投げつけていたら、自分もやっていいのかと思い、気軽に石を取るだろう。事情など知らなくていい。みんながやっているのだから、きっとそうするに足る理由があるのだと勝手に判断し、追従するだけでいいのだ。
例えが良くない。もっと身近な例を挙げてみよう。
車の来ない横断歩道で律儀に信号待ちをしていて、後から来た人が何も気にせず、すっと信号無視をして渡って行ったら、それでも信号待ちを続けるだろうか？
…いや、その信号を無視した人の後を追従して自分も渡るのではないだろうか。律儀にルールを守っていた自分が馬鹿らしくなって。そして、自分は二番目に信号無視をしたのだから、一番目の人より悪くないと開き直って。
田無へのイジメはまさにこれなのだ。

B組の中にある田無を嫌う空気。…でも、イジメはいけないことだと理性でわかっているから、みんなルールを守って苛めない。…そこへ「お骨サマの呪い」と称して、僕らが真っ先に赤信号を渡ってみせたのだ。

そしてみんな堰を切って赤信号を渡りだす。自分が最初に渡ったのではないのだから、自分が一番悪いわけではないという、良心への免罪符を持って。

この、罪悪感を持たずに特定個人に攻撃が集中するシステムを「お骨サマの呪い」と言っていいなら、…確かにこれは呪いと言ってもよかった。

Aは「お骨サマ」に呪われているから、「お骨サマの呪い」を彷彿させる悪戯なら仕掛けて構わない。そういうルールがあれば、Aを知らぬ人物でも、こっそりAが見ていない間に骨を放り込む…。みんながAに「呪い」を下しているのだから、自分が今さら加担したところで、自分だけが悪くはない…。罪悪感を薄め、誰しもを「呪い」の執行者に変えていく可能性…。………確かにこれは、もはや「呪い」と呼ぶべき忌まわしきルールだった。

だが、ふと思い出す。

それはあの五万円入り封筒に入っていた紙に書かれた、「田無美代子を呪ってください」という一文だ。

つまり、……田無美代子を攻撃したいという明確な意思を持つ何者かが、「お骨サマの呪

い」にうまく便乗して、……いや、利用したと言うべきかもしれない。
その人物は、真っ先に赤信号を渡ると自分が一番責任を問われることを知っていて、最初に赤信号を渡る役を「お骨サマ」である僕らにやらせたのだ。
だとすると、……その人物は、「お骨サマの呪い」という現象の背後に、賽銭箱の中身に干渉(かんしょう)できる人物たちがいることを悟り、彼らにお賽銭という形で報酬(ほうしゅう)を払うことで、イジメの切っ掛けを作ることができると考えたのではないか。
そしてその思惑は見事にうまくいった…。
……只者ではない。呪いを生み出した当事者である三人の内、僕しかまだ理解していない「お骨サマの呪い」のシステムを、この人物は傍観者の立場から完全に看破し、理解してみせたのだから。しかも、それはあの五万円のお賽銭より前の段階でなのだから、本当に恐れ入るほかなかった。
しかも、お賽銭というやり方も狡猾(こうかつ)だ。相手は僕らに面と向って田無を苛めろと依頼したわけじゃない。狸神社にお参りして、〝神さまに呪いをお願いしただけなのだ〟。
賽銭箱を開けられる人がいるなんて知らなかったととぼけられたらそれでおしまいだ。
結局のところ、僕らはその何者かに綺麗に利用され、「自発的に」イジメを行なったことになる……。
それは少し薄気味悪い想像だった。なぜなら僕らは、この「お骨サマの呪い」の悪戯で、

誰にも自分たちのことが悟られていないことのみを安全の保証としてきたからだ。
だがそんな保証はもはやない。明らかに僕らの存在は看破され、しかも巧みにその何者かの目的に組み込まれて利用されているのだ……。
でも、………田無には気の毒だが、別に殺人事件が起こったりというわけではない。イジメは本当に気の毒だとは思うが、学校でよくある日常的なことのはずだ。だから僕らが警察に逮捕されて、怪しげな事件の濡れ衣を着せられるような、そんな事態にはならないはず……。
……保身に走り、田無の不遇を見捨てたい自分がとても嫌に感じる。
そう、これはきっと後悔だ。五万円分と称して田無を攻撃しようとみんなが言い出した時、それを強く反対できなかったことへの…。

優花おばさんは、今回の事件を、田無を特に目標としない目標不特定の偶発的なイジメの集中と見ているようだが、田無の一件は多分違う。
…当然だ。おばさんはあの「田無美代子を呪え」という紙片の存在を知らないのだから。
だが、それを僕は打ち明けることが出来ない。
その存在を教えれば、それは僕らが賽銭箱を漁っていることを打ち明けることにもつながるわけだ。……つまり、僕は何者かが田無を攻撃したいという明白な意思をもって、こ

なっている田無に気付かれないようにしながら。
無理だ。絶対にできるわけがない。人間業じゃない。
…この話だけを聞くと、背筋がぞっとする話のように思える。
もちろん、…常識的に考えて、本当に「お骨サマの呪い」なんて存在するわけがない。
呪いに見せかけた誰かの悪戯に決まっている。
だからこの話だって、おそらく……次の二つのどちらかに違いない。
一つ目は、このカバンに誰も近付かなかったと言った人物が絶対ではないということ。
つまりこの人物が、朝からずっとカバンを監視カメラのように見守っていたという保証がない。余所見をしたり、トイレに行ったりする隙は本当になかったのか？　監視カメラならそのフィルムが証拠になるが、個人の話ではそれを証明できない。
そして二つ目。…こっちの方がありえそうだ。
この人物は、そもそも田無のカバンをずっと見守ってなどいないということ。
つまり田無に頻発する「お骨サマの呪い」を面白がり、人間の仕業だとは思えないエピソードを生み出して面白半分に広めた、というケースだ。
恐らく、田無が風邪でもひいて三日も学校を休んだら、「お骨サマの呪い」で全身に怪しげな斑点が浮き出す奇病にうなされていて、病院のベッドで「お骨サマ、お骨サマ…、」と呟き続けているらしい、なんて話が勝手に生み出されるに違いない。

これは、当初から僕らがやってきたことでもあるし、悪戯好きな連中が日常的にやっていることでもある。悪戯を直接仕掛けるのに比べれば、見てきたような嘘を広める方がお手軽でリスクのない悪戯だ。おそらくこれに違いなかった。

…だが、そうとは決め付けられない部分もある。この、後ろから見ていたという人物が信用できるにせよできないにせよだ。

なぜなら、カバンと自分の席に悪戯をされたくなくて、自分の席を休み時間も離れようとしない田無についてだけは、信じることができるからだ。

田無は一週間以上にもわたり、集中的な攻撃を受けていた。だから神経質になって自分の席を片時も離れようとしなかったのは容易に想像が付く。

だから、後ろの席の何者かがカバンの無事を証明しなくても、席を離れない田無の存在自体がカバンの無事を保証できるのだ。

……むしろ、田無自身が一番最初に気付いているのではないだろうか。

絶対に隙がなかったはずなのに。カバンに骨など詰められるはずがないのに。……でも出てきた。いっぱい。バラバラ！

人間ならぬ者の存在を察知し、……人間の仕業であってほしくて、やったのは誰だと叫んだのでは……。……ははは、そんな馬鹿な。

だから、誰も近付かなかったカバンにたくさんの骨が詰め込まれていた件については、

単純に笑い飛ばすことができない何かを含んでいると言えた。
もっとも、この話も、田無が神経質に自分の席に居続けて周囲を常に警戒していたという前提に基づく。実はこの日に限って田無が休み時間に席を外したなんていう話なら、何の意味もない…。
……結局のところ、所詮は噂話なのでこれ以上、何を論じても意味がなかった。
この日はこれで話が終わったが、……その内、クラスでも同じ類(たぐい)の話が話題になるようになった。人間の仕業とは思えない悪戯があるらしいと。しかも、このカバンの話とは別のケースでだ。それも複数である。
悪戯、あるいは呪いの内容はそれぞれに異なった。……ロッカーであるとか、下駄箱であるとか。だが以下の点でだけ共通していた。
曰(いわ)く、人間にできるはずがない。
曰く、本当に「お骨サマの呪い」なのでは…?
この頃には、そういう話を頭ごなしに否定したがる博之も、さすがに認めざるを得ない状況になっていた。
「…うん。それでさ、その骨の山が田無の家の、自分の部屋にバラ撒かれていたって言うんだよ。」
そして最近の話の中で極めつけはこれだった。…田無の自宅の、それも田無の部屋に骨

が何十本も置かれていたというのだ。
「いや、不可能じゃないかもしれないだろ。俺んちなんかだとさ、友達が来て、あがって待ってるよなんてこと、たまにあるぜ？　友達のふりしてあがらせてもらったのかも知れないじゃんかよ。」
「いや、田無は親が共働きらしくて、鍵っ子らしいんだよ。だから、田無の家には鍵が掛かっている。…にもかかわらず、何者かが部屋に入り込んで骨をバラ撒いたって言うんだよ…。」
「いや…そんなことはありえねぇだろ。というか、空き巣の真似事をしてまで、田無に攻撃するような性質の悪いやつはさすがにいないんじゃねぇか？　第一それって不法侵入とかの犯罪じゃねぇのかよ。」
「…僕はそれより、その話自体が作り話じゃないかって思うけどね。」
「そ、そうだよ、友宏の言うとおりだよ。その話自体が誰かの作り話じゃねぇのか！」
「…いや、…田無がそういうことがあったって先生に言ったのは本当らしい。先生がホームルームでクラス全員に言ったから。だからB組の連中は全員知ってるよ。」
「それが本当だとして…、もうそれって明らかに犯罪だろ！　だって鍵が掛かっている他人の家に、たとえ泥棒じゃなくても勝手に入ったら立派な犯罪だろ…！」
「だよな。だから田無、警察に通報したって言ってたな…。」

「うん。そういう相談を受けてるみたい。」
　優花おばさんは即答した。
「じゃあ噂になっているように……本当に？　本当に田無の家に骨が置かれてたの!?」
「んーーーーーー、あんまり詳しいことは言えないんだけど………。うん、とにかく、ちょっと悪戯にしては性質が悪すぎる連中がいるみたいだねぇ。」
　おばさん的にははぐらかしたつもりだろうが、それは明白なイエスだった。
「友宏くんは田無美代子さんを知ってるの？」
「う、うぅん…。違うクラスだから、面識はないよ…。」
「彼女が集団的なイジメにあっているという話は聞いてる？」
「イジメというか、………『お骨サマ』に呪われているらしいって噂は聞いたことがあるね。」
　イジメという言葉を無意識に避けてしまう…。田無の今の状況を生み出した責任を思うと、胸が少し痛んだ。
「お、また出たね、『お骨サマの呪い』！　じゃあつまりこれは、田無美代子という個人に対しての攻撃ではなくて、『呪い』に便乗したある種のスケープゴートということなのかな？」

「スケープゴートって？」
「つまり、田無美代子でなくてもいい、誰でも良かったってこと。誰かを攻撃して遊びたい悪意ある攻撃者たちは生贄を求めていた。そこへ集中攻撃されているらしい田無美代子という個人が現れる。それで便乗して攻撃することでストレスを発散している、卑怯な連中がいるってことかもしれないね！」
おばさんはそう言いながら憤り、イジメなんてのは健全なストレス発散ができないから起こるのだと、若者はすべからくスポーツをすべきだと持論を並べ始めるのだった。
しかし、……相変わらず、おばさんの鋭さには舌を巻くしかなかった。
当事者である僕がようやく至った考えに、学校の外から話を聞いているだけのはずのおばさんが、ほんのわずかの時間で至ってしまうのだから。
「イジメには二つパターンがあると思ってるんだよね。」
おばさんの持論によると、以下の二つのイジメがあるらしい。
ある特定の個人を決め打ちにするイジメ方と、目標は取りあえず誰でもいいというイジメ方の二種だ。
ほとんどのイジメは結局のところ、ストレス発散が目的で、対象は実は誰でもいいのが普通だ。
…誰でもいいという言い方は正確には正しくない。身近に苛めやすい誰かがいてくれれ

の「呪い」を利用していることを打ち明けられない…。
……それすらも、五万円の何者かの読みのとおりのような気がして、とても不気味だった。僕らはあの日からすでに、…何者かの手の平で踊らされているに違いないのだ。
その何者かの存在は考えようによっては、いるかいないかもわからない祟り神「お骨サマ」なんかよりはるかに恐ろしい。なぜなら、確実に存在し、多分、同じ学校に在籍しているのだから。
「うん。だから友宏くんも、田無さんのことで何か噂を聞いたら、おばさんにも聞かせてね。」
「…ということは、……警察でも捜査を始めたということ？」
「田無さんの自宅に何者かが入り込んだという件についてはね。でも、特に何か不審な形跡があったという話は聞いてないわよ。ただ、田無さんの近辺であまり良くないことが起こっているという話なので、関連がないか調べようってことにはなってるみたいだけど。」
「……田無イジメで、クラスの誰かがこっそり田無の家に入り込んで悪質な悪戯をした…？」
「一番最初の黒板落書き事件、覚えてる？」

「う、……うん。」
突然、話の矛先が変わった。心に身構える時間がなかった分、ぎくりとする。
「あの事件を生徒が起こそうとすると、あの落書きをするためだけにわざわざ早朝に起き出して登校するという面倒なことをしなくちゃならない。……そういう手間を惜しまない犯人なら、田無さんの家までわざわざやって来て、例えば雨どいをよじ上って、二階の施錠されていない窓から入り込んで、部屋に骨を撒き散らした……というのも考えられない話ではないよねぇ。」
「度が過ぎた悪戯ってことかな……。」
「そう考えたいところだねぇ。でもちょっと逸脱し過ぎてると思うの。学校という、必ず登校しなくてはならない義務的な環境で行なう犯行なら、ついでにやったという風にも見えなくもない。でも、わざわざ田無さんの自宅まで行くという手間隙を考えると、かなり明白な田無さんへの悪意が感じられるのよね。」
……かつて、黒板の落書きを実際に見てないにもかかわらず、かなり踏み込んだ推理を聞かせてくれたおばさんらしい、鋭い推理だった。
おばさんは、あの田無を呪えという紙片の存在を知らないはずなのに、田無に対する悪意ある存在に気付きつつある…。
「田無さんは交友関係とかで何か問題とかあった？」

「だ、だからクラス違うからよく知らないです。」
「田無さんの相談を受けた署員の話によると、結構性格的にはキツイ子らしいのよね。ちょっと偏見的だけど、敵が多そうな雰囲気がしたとも言ってたの。彼女と対立している同性のグループとか、その辺りに鍵がありそうねぇ。田無さん、最近誰かと喧嘩をしたとか、何かトラブルを抱えているとか聞いてる？」
「だ、だからクラスが違うからよく知らないってばぁ…。」
そうは言いながらも。…おばさんの話を頭の中に全て書き留めていた。
田無と敵対する何者かが「お骨サマの呪い」を利用して、田無に仕返し？することを画策した。そしてその人物は、「お骨サマの呪い」が僕らの作った賽銭目当てのでっち上げの怪談であることを看破し、……間接的に働きかけて、田無に「お骨サマの呪い」が降りかかり、イジメのスケープゴートになるように仕向けた…。
ならば、その人物が最近の度を越えた悪戯を行なっているのだろうか。
…いや、おかしい。そこまでの実行力があるならば、そもそも「お骨サマの呪い」なんてものに間接的に働きかけたりなんかしない。五万円も払わずに、自力で「呪い」を具現し、田無をスケープゴートにできたはずだ。
だからつまり、五万円もの大金を払うということは、その人物自体には何もできなくて、僕らに〝依頼〟する他、攻撃する方法がなかったという証拠と見ることもできる…。

そうすると、…例えば、誰も触ってないはずのカバンに骨が詰め込まれていた事件とか、入れるはずのない田無の自宅に忍び込んで田無の部屋に骨を撒き散らした事件は、誰が起こしたのかということになる。

………神頼みで人を呪うのに五万円も払うような酔狂だ。…同じようにお金を誰かに支払い、田無に「お骨サマの呪い」を下してくれと依頼した…？

だがそんなことが現実にあり得るだろうか。

お金をもらってイジメに加担するなんて、もし先生にバレたら相当にヤバいことじゃないだろうか。この時期にそんなことになれば、内申書に響かないわけがない。（それを言い出すと、僕らも決してセーフティーな立場ではないのだが…。）

逆の考え方をしてみればいい。

クラスの女子とかにそんな話を持ちかけられ、〝何万か報酬を払うから、クラスの別の女子の家に忍び込んで骨をバラ撒いてきてくれ〟なんて言われて引き受けるヤツがいるだろうか？

………いるわけがない！

不法侵入なんて犯罪だ。間違ってバレたら内申書どころじゃない、即逮捕で人生は台無しだ。

いくら積まれたって断るし、むしろ多額のお金をチラつかされた方が、かえって胡散臭

くて嫌になる。……男のセンスから考えて、いくらお金を積まれても、引き受けるヤツなどいないのだ。
じゃあ、どういうヤツならば、鍵の掛かった田無の家に忍び込んで骨をバラ撒けるのか、という問題に戻る。
そしてそいつは、誰にも悪戯をする隙などなかったはずの田無のカバンに、誰の目に触れることもなく「呪い」を下すことに成功しているのだ。
……有り得ない。そんなことができる、もしくは引き受けるヤツなどいるわけがない！
じゃあ、誰にもできないなら、どうしてこういう事件が田無の周りに次々に起こるんだ、という話に戻る。
すると、………学校の誰でもない、だけど学校にいる誰かの仕業という、何が何だかわからない答えに行き着くのである。
学校の誰でもない何者かなど、学校内にいるわけもない。……だがその存在は、有り得ない「呪い」を次々に田無に下しているのだ。
……そんなのは人間の仕業じゃない。
そう。文字通り、「お骨サマの呪い」以外に有り得ないのだ……？
「田無に仮に敵対するグループがいたとして。単にイジメが目的なだけで、空き巣の真似事までするかは疑わしいと思います。」

「確かにねぇ。悪戯にしてはちょっと度が過ぎるもんねぇ。」
「じゃあ、誰が犯人なんでしょう。」
「……さぁねぇ。」
呪いなんて信じるのは未熟な中学生だから。…大人の優花おばさんなら、きっと冷静に「お骨サマの呪い」なんて笑い飛ばしてくれるに違いない。そう期待しての問い掛けのはずだった。
「案外、本当に『お骨サマの呪い』なのかしら。」
「え⁉」
僕が素っ頓狂な声を上げると、おばさんはケラケラと笑うのだった。

その晩、僕は不安で寝付けなかった。
もう「お骨サマの呪い」は完全に僕らの手を離れている。
一人歩きしているばかりか、巧みに利用する者まで現れているのだ。しかも、僕らはその片棒を担いでしまっていて無関係ではない。
……でも、だからといって、……僕たちが何か犯罪行為に加担したわけではない。
今回の田無の自宅への侵入だって、多分、警察がちゃんと捜査をすれば犯人などすぐわかるだろうし、その時間に僕らは空き巣などできなかったとはっきり証明できるだろ

う。…アリバイは？　なんて聞かれると一瞬困るが、田無の家に行っていないのは本当なので問題ない。…というかそもそも、僕ら三人は田無の自宅の場所など知らないのだから。

……ひょっとすると、イジメに悩む田無の自作自演ではないかとも疑った。

学校の先生に相談しても埒があかないので、自宅に骨をバラ撒いて不法侵入を自作し、警察にイジメへの介入を促そうとした…。

だが、これは多分意味のないことだ。

警察がちゃんと指紋とかを調べれば、田無の自作自演などすぐに見破られてしまうに違いない。たとえ不審者の指紋が一切出なくて、犯人は手袋をしていたに違いない！　と言い張ったとしてもだ。絶対に何らかの痕跡は残る。それを検出できないほど警察は無能じゃない。

田無という子は少なくとも頭が悪そうには見えなかった。自作自演がバレないなんて本気で信じるような子には見えなかった。

警察を呼べば、親だって学校だって巻き込む。穏便なことにはならない。

いや、それすらも覚悟で、やがては警察にバレることも織り込み済みで警察を呼んだのだろうか？　そうすることで、学校側にイジメの実態を訴えたかったとか……。

時計の針がもう深夜を指すのに、まだ一向に眠くならない。

僕はその晩、いつ眠ったのかもわからないくらいに長い間、田無を中心に渦巻く「お骨サマの呪い」のことで頭をいっぱいにして過ごすのだった。

……僕は冷静に考えているつもりで実際は、「お骨サマの呪い」の存在を否定したがっているだけなのかもしれない。

本当に呪いが存在して、人間には不可能な悪戯を成し遂げたということを信じたくなくて、誰かの悪戯、もしくは田無の自作と決め付けたがっているのではないだろうか。

そうさ、あの呪いの手紙だって、学校の誰かが書いた。そいつは紛れもなく人間だ。読んだ僕らも人間で、対象となった田無も人間。その後、それに便乗して悪戯を繰り返す連中もみんな人間。……「お骨サマ」が割り込む余地はない。

……いや、……その人間たちの悪戯の中に、本当の「お骨サマの呪い」が混じっているのでは…という話ではなかったっけ…？

田無の家への不法侵入は、行き過ぎた誰かの悪戯か、イジメに悩む田無の自演か、……それとも、……本当に…？

心の中に立ち込める不安感を、僕はいつまでも振り払えずにいるのだった…。

月曜日の朝、体育館での定例の全校集会。

普段は校長先生の話が終わればそれで終わるのだが、今日は終わらず、生活指導の先生

が登壇した。
ある生徒が、「お骨サマ」に呪われたと称する、執拗なイジメを受けていると報告し、このようなことに加担する生徒は直ちにやめるようにと言った。
体育館中がざわざわとする。田無を巡る呪いの話は、すでに学校中で知れ渡っているようだった。いや、呪いというよりも、呪いを口実にした執拗なイジメが有名になっていたというのが正しい。
「……まだ続いてるのかよ。…しつこ過ぎるよな。」
「何か警察も捜査を始めてるって話だぜ。」
「うんうん！ 俺さ、校門のところで警察の人に事情聞かれたよ！」
「でも、本当に人の仕業なの…？ 噂じゃ、明らかに人には不可能なこともあったって言うじゃない。」
この頃には、「お骨サマの呪い」がもう悪戯では済まなくなりつつあるのを、博之も亨も感じ始めているようだった。
ちょっと賽銭で小遣い稼ぎをしようという悪戯は、今や田無という女の子を執拗に苛めるイジメの代名詞となり、…………しかも、本当の「呪い」ではないかと囁かれるようなおかしなことにまでなりつつある。
次第に僕らは、意識して「お骨サマ」の話を避けるようになっていった。

それでも、クラスは呪いの話で持ちきりで、僕らが「お骨サマ」の名を一度も聞かずに過ごせる日は一日たりともなかった……。
僕らは今やどうすることも出来ず、そしてこの先どうなるのかを予測することも出来ず、ただただ日々を怠惰に過ごすしかない。
田無へのイジメが収まってくれれば、少しはやりきれない気持ちも治まるのだが。……田無へのイジメは一向に止もうとはしない。
苛められる田無もますます過敏になってヒステリックになり、近くに居れば誰であっても疑ってかかったので、同情も得られず、それもイジメを長期化させる理由のひとつのようだった。
すでに、僕らが呪いの手紙を受け取ってから一ヶ月が経とうとしている。
田無へのイジメは落ち着くどころか、ますます性質が悪くなっているらしい。聞くところによると、髑髏のお面を被って、田無を叩いて逃げるというような、もはや悪戯というよりは暴力的なことも起こっているらしい。
学校側はその都度、誰がやったのかと騒ぎ立てるが、犯人捜しなんて無駄なことだった。
誰もが犯人なのだ。誰もが少なからずこのイジメに加担していてスネに傷を持つ。
仮に特定の件について特定の犯人を捕まえたとしても、それで田無のイジメが収まることにはならないだろう。……捕まったヤツはドジだった。それだけのことだ。

本当に田無を苛めている犯人は、…人ではなく環境なのだから。
学校側がイジメはいけないと言えば言うほど、田無イジメには反社会的なカタルシスが宿っていく。
自分たちを学歴社会の被害者のように思う中学三年という学年は、誰もが社会に対する批判的な考えを抱きやすくなっている。……それは思春期や反抗期という、微妙な時期と一致しているせいかもしれない。…こんなナーバスな時期に、将来の進路を選ばせるという無神経な教育制度に不満を感じるのも、きっと思春期や反抗期のせいなのだろう…。
犯人は人ではなく環境だと自分で言ったが。……その環境とは「呪い」とも読み解ける。「お骨サマ」に〝呪われた〟この環境こそが本当の犯人なのだ。つまり、犯人は「お骨サマ」だということ。実体が存在しないのだから、捕まえられないし消すこともできない。
いない存在が、犯人だなんて、そんな馬鹿な現象があるのだろうか。そして、どうすればここまで育ってしまった呪いを打ち消せるのか。…………いくら悩めども、何も思い付きはしなかった…。
それでも僕らは恵まれているのだ。心を悩ませる余裕がある。
今こうしている間にも、田無はきっと何かの攻撃を受けているのだから……。

僕たちはやがて訪れる日を予想することもできず、ただ待つことしかしなかったのである…。

事故か事件かそれとも果たして

その日は早朝からずっと雨が降っていた。
こういうシトシトとした雨は長い。きっと下校時まで晴れないだろう。
昼休みになっても空には重い鉛色(なまりいろ)の雲が覆い、朝からまるで弱まらない雨をずっと降らせていた。
もっとも、雨が降っているから教室も静かかというとそうでもない。
雨だから表に行く生徒がいない分、教室は晴れの日よりも大勢がいたから、むしろ賑(にぎ)やかなくらいだった。
もうすぐ昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴る…。そんな時間だった。
急に一部の生徒が騒ぎ出し、廊下に駆け出して行ったのである。
…何事だろう？　野次馬の生徒が後に続く。
「どうしたんだろ？」
「……行ってみようぜ…！」

僕らも廊下に出てみる。すると他のクラスの生徒たちもみんな廊下に出てきていて、窓の前に集まっていた。

何が見えるのだろう？　人垣を掻き分け、僕らも窓から外を覗き込む…。

廊下の窓は学校の裏側に面していた。学校の裏側には焼却炉や体育倉庫、そして取り壊しを待つ二階建てのプレハブ校舎があった。

ずいぶん昔に学校で工事の都合があって、一部のクラスが教室を使えなくなったため、しばらくの仮の学び舎（まなびや）として建てられたらしい。

工事が終わった後も、しばらくは運動会や文化祭の作り物が置かれる倉庫になっていたが、次の夏休みに撤去されることが決まっている、生徒なき校舎だった。

今では立入禁止になっていて、外階段も上ってはいけないとロープが張られている。

そのプレハブ校舎の前に、雨に濡れるのも構わず、四～五人の先生が集まっていた。……見るからに普通のムードではない。何か大変なことがあったのだ。

「一体何なんだ？　よく見えねえよ…。」

「木が邪魔だな！」

先生たちはプレハブ校舎の裏にある、外階段のところに集まっているようだった。だが外階段のところは木立が邪魔で、よく見えなかった。

体育教師がこちら側に怒鳴っている。…教室に戻りなさいと言っているようだ。

何が起こったのか、さっぱりわからない。どうも、プレハブ校舎の裏の、二階へ上がる外階段の辺りで何かあったらしいのだが……。
やがて、廊下に学年主任の先生の大声が響き渡った。
「窓を閉めて全員、教室に戻れええええッ!!!」
「「センセーセンセー!! 何があったんですかー!?」」
「ほら! いいから教室に戻る!! ほらッ、とっとと戻れええええ!!!」
結局、僕らは何が何やらわからない内に、廊下から追い出され教室に戻るしかなかった。
「…何があったんだよ? 事故? 怪我?」
「プレハブ校舎の外階段のあたりで何かあったみたいだな。」
「そんなの見りゃわかるよ! くそ、木が邪魔だぜ…。」
やがて教室が再びざわめき出す。……今度は何だ? 校庭側に面する窓に生徒たちが集まる。
雨なので音が聞こえなかったのだろう。いつの間にか救急車がやってきていて、校門の前に停まった。
それを他の学年の先生と教頭が迎え、担架を運ぶ救急隊員たちと一緒に学校の裏側へと回っていった。
「怪我? 大怪我なのか?」

「プレハブ校舎の外階段で、雨で滑って転げ落ちて、骨折でもしたって噂が出てるな…。」
信憑性の薄い話ではあったが、状況から考えてもっともらしい推測だった。
その時、教室の扉がススッと開いたので、先生が来たものと思い、クラス中が一瞬静まりかえった。……だが、それは他のクラスに出掛けていた生徒が戻ってきただけだったので、すぐにざわめきが戻った。
その生徒が、友人たちに何やらボソボソと話をするとどよめきが起こった。そのどよめきはすぐに教室全体に広がっていく…。
「……何、どうしたの？」
「どうも事故ったのはB組の女らしいよ…！　あいつらしい！　…あいつ！」
僕らの中で、B組の女子で知っている名といえばひとつしかない。
昼休みが終わり、いつ先生がやってきてもおかしくない時間なのだ。生徒は全員着席している。だから、事故を起こした生徒の席はぽっかり空いているはずなのだ。だからその生徒の名前はすぐに知れ渡る。
「嘘、……マジかよ…!!」
「マジも大マジだよ！　B組じゃ大騒ぎになってるぜ!!」
事故を起こした生徒は、田無美代子だった。
田無が「お骨サマの呪い」と称する執拗な姿なきイジメに遭っていたことは、もちろん

うちのクラスの誰もが知っていた。
だから、この田無の事故も、ひょっとして「お骨サマの呪い」なのか……、と誰もが囁いていた。
やがて午後最初の授業の先生がやって来る。
普段やって来る時間よりずっと遅い。緊急の職員会議があったに違いない。
「センセー、事故か何かあったんですかー？」
誰かが質問する。先生は慎重に言葉を選ぶようにしながら言った。
「昼休みに事故があったようです。」
「誰が⁉」「事故って何ですか⁉」「死んだの⁉」
矢継ぎ早に質問が相次ぐ。
「三年生の女子だそうです。プレハブ校舎の階段から落ちて大怪我をしたと聞いています。いいですか皆さん！　プレハブ校舎は立入禁止になっています！　外階段も上ってはいけませんと札とロープが張ってあるはずです。ルールは必ず守りましょう！」
田無が、立入禁止のプレハブ校舎の外階段を上り、転落したのは間違いないようだった。
クラス内のざわめきが再び大きくなる。それを静かにしようと先生も大声を上げるので、さらにうるさくなるのだった…。
午後最初の授業が終わると、休み時間の間に他のクラスとの情報のやり取りが盛んに行

なわれていた。
そして、田無がどういう経緯で事故を起こしたのかがおぼろげながら見えてくる。
田無は給食を終えた後、雨が降っているにもかかわらず表へ出て、裏のプレハブ校舎に向かった。
そして、外階段から二階の踊り場へ上り、そこから落ちて、あるいは転げ落ちて大怪我をしたというのだ。
ここで二説にわかれる。二階の踊り場から直接落ちたという説と、階段から転げ落ちたという説だ。どちらにせよ、救急車まで来ていた様子だと、軽い怪我では済んでいないらしかった。
「………どういうことだろ…？」
「だから……事故だろ？　雨で滑りやすくなってたってことじゃねぇの…？」
「いや、そうじゃなくて。……田無って自分の席に悪戯されたくないから、自分の席を極力離れたくないヤツだったんでしょ？　それがどうしてわざわざこの雨の中、プレハブ校舎なんかに？」
「…そう言えば……確かにおかしいよな…。」
プレハブ校舎には全て鍵が掛かっているから、生徒は中には入れない。だから、雨宿りをすることなどできない。

それは外階段も同じで、階段の裏側であっても滴り落ちる雨水から逃れることはできない。ましてや、階段を上ったら文字通り雨ざらしなのだ。

誰も近寄らぬ雨の日のプレハブ校舎に一人、外階段を上る……。

シチュエーションとしては明らかに不自然だった。……田無が雨が好きで、雨が降る昼休みには必ずここに来て雨に打たれるのを楽しんでいた…という話があるならともかく、そんな話は誰も聞いたことがない。明らかに不自然だった。

一番簡単に思いつくのは、………誰かに呼び出されてそこに行った、ということだろう。

だが、こんな雨の日に、わざわざ雨に濡れるプレハブ校舎などに呼びつけるだろうか？　おかしいおかしい。…シチュエーションが不自然すぎる……。

その時、教室がまたざわめいた。校庭側の窓だ。

見れば校門のところに回転灯を点けないパトカーが来ていて、雨がっぱの警官が三人ほど校庭を駆けて行くところだった……。

「え、……何、どういうこと⁉　事故じゃなくて…事件ってこと？」

「いや、まだそうと決まったわけじゃないよ。警察が検分に来ただけだよ。事故か事件かの判別をつけるためにね。」

「そうか？　だって去年、一年が階段から転げ落ちて複雑骨折した時、警察なんてこなか

ったぞ?」

「………………………。」

優花おばさんからある程度の話を聞いていた僕には、少し察しがついていた。

田無は自分がイジメを執拗に受けている件を警察に相談していた。……また、それより以前に遡(さかのぼ)り、あの黒板落書き事件の時にも学校から警察に通報は行っている。

つまり警察は、田無の転落事故が、「お骨サマの呪い」に名を借りた事件の可能性を拭えないと判断したのだろう。

……単なる学校の七不思議の八つ目程度だった「お骨サマの呪い」は、とうとう警察沙汰にまで成長し、……その呪いで生徒の一人に救急車が呼ばれるほどの大怪我をさせたのである…。

博之や亨を見る。………普段、おしゃべりが大好きなはずの二人が、みんなの喧騒(けんそう)から距離を置くように口を閉ざしていた。…それを見て、きっとこの二人も僕と同じ胸中に違いないと確信する。

今度は、コーラの空き瓶の喩(たと)え話より、僕がした喩(たと)え話の方が合っている。

面白半分で育てた子ワニを放したら、…いつの間にかどんどん成長し、ついに人を襲うようにまでなってしまった……。

僕らは今さらのように、「お骨サマ」という祟り神を放ってしまった責任を感じ始めてい

る。
田無は無事なのか…？　そもそも田無に何があったのか…？　いや、…田無一人の犠牲で済むのか…？
「お骨サマ」を生み出して以来、…僕がしてきた不吉な予想は常に当たり続けてきた。……なら、今感じている不吉な予想も、必ず当たる。絶対に当たる。
いつの間にか教室は静まり、先生が教科書を朗読する声と静かな雨の音しか聞こえなくなっていた…。

宮島優花刑事

職員室はガランとしていた。
優花は、すみませ〜んと大きい声を上げながら引き戸をガンガンとノックする。
すると校長室に繋がる扉が開き、校長が顔を覗かせた。
「ハイ。どちら様でしょうか。」
「すみません、私、鹿骨署の宮島と申します。」
警察手帳を見せると、校長はすぐに状況を理解し、校舎裏のプレハブ校舎へ案内してくれた。

プレハブ校舎の前には教師たち数人と警官が五人ほどいた。
教頭が気付き、優花に挨拶する。
「どうもお疲れ様です。鹿骨署の宮島と申します。この度はどうも大変でしたね。」
「いや……ははは、……面目ないです。」
教頭は自分にどういう責任が及ぶかを考えると、居ても立ってもいられないようだった。
優花が警官たちに頭を下げると、警官たちも頷き、優花を外階段の上へ誘った。
「外階段二階の踊り場から転落したと思われます。」
「事故だと思う？」
「少し難しいですね…。……少女はここからそちら側へ転落しました。」
警官は、階段を上った突き当たりの柵を指し示す。
「私ゃ階段から転げ落ちたかと思ってたよー。違うんだ？　柵側なんだ？」
「はい。で、下に落ちて…。」
柵側から下を見下ろす。そこは園芸部か何かの小菜園になっているようだった。
「へー。下は畑かぁ。地面は柔らかめだね。じゃあ何、案外、不幸中の幸いで軽傷？」
「いえ、それが………。」
優花たちは階段を降り、田無美代子が転落した菜園にやってきた。
耕してあるから土が柔らかい。しかもこの雨でぬかるんでいて、地面が靴を呑み込む。

まるで池か沼のほとりで遊んでいるような錯覚を感じさせた。
…そこには、田無が転落した時にできた穴が残され、少し歪な形がどういう姿で横たわっていたかを想像させた。
その歪な穴には雨水が溜まり、水溜まりを作っていた。雨粒が幾重もの波紋を水溜まりに作り、何か不安な気持ちを掻き立てるような図形を描き続けるのだった。
「…何だい、これは？」
その水溜まりの脇に、小さな園芸用のシャベルが転がっていた。
「このシャベルが、どういうわけか先端部分を突き出す形で埋まっていまして。……転落時にその先端でココをやったようで……。」
警官が自分の首の後ろを、トントンと叩く。
「そっかぁ……。延髄はまずいなぁ…。で、その子は無事なの？」
「いえ、意識不明です。救急隊員の所見では、このまま意識が戻らないと、だいぶ長引く危険性もあると……。」
「それは気の毒だなぁ……。このシャベルは学校のもの？」
聞く必要もなかった。握り手の部分に園芸部とマジックで書かれていたからだ。
「……シャベルが埋まっていたこと自体は不幸な偶然の可能性が高いですが、少女の転落理由が偶然とは言い切れません。」

「そうだねぇ。今日は朝からこんな雨だもんねぇ。…わざわざこの雨の中にこんなひと気のないところに来るもんだろうかねぇ…？」
「…考えにくいです。孤独を愛した、とか…。」
「くっくっく、今時、そんな純文学少女なんているのかねぇ。」
純文学少女という言葉の対極に位置するだろう優花は、くすくすと笑う。
「何かさ、ここ。秘密の呼び出しとかにぴったりっぽい雰囲気ない？　ほら、よく不良の呼び出しとかで体育館裏に来いとか、そういうのあるでしょ。この学校ではそれがここに当たるってことはないかねぇ？　ほら、ちょうどこの階段の場所は木立がよく茂って、ぴったりと校舎の一階から三階までの窓を見えなくしている。どうですか教頭先生。例えばこの場所でよく煙草の吸殻が見付かったとか、生徒が溜まり場にしていたとか、そういう話はありませんか？」
「い、いえ。……そういう話は聞いておりません。」
「失礼ですが教頭先生、こちらの学校に来られて何年です？」
「あ、いえ……去年来たばかりでして、まだ校内のことがよくわからず…。」
「だと思った。他の先生に聞きましょう。」
優花は踵を返すと他の教師たちに話しかけて回った。
教頭が新米だと何を基準に見抜けたのかわからず、警官が驚いて聞く。

「よ、よく教頭が新米だってわかりましたね？」
「か〜んたんにわかるよ。教頭ってのはね、学校に一番詳しいんだよ普通。自信満々で当たり前なの。それが弱気ってことは大抵、転任したてのほやほやってことだねぇ！」
警官は優花の眼力にちょっと感嘆していた。だが当の優花は構わず、長くいる教師を見つけて同じ質問をぶつけていた。
「すみません、先生。ここが生徒の溜まり場になっていたとかそういう話は？」
「…いえ、ありません。どちらかというと不良連中は、体育館の裏などを溜まり場にしているようです。」
「この場所が生徒にとって特別な意味を持つということは？」
「と言いますと？」
「ん〜〜、例えば、生徒間に流行るジンクスとかです。この場所で異性に告白すると両想いになれるとか、この場所には幽霊が出るとか出ないとか。生徒の間だけで通用する伝説みたいなものですねぇ。」
「……深夜、誰もいないプレハブ校舎に灯りが点いて、幽霊が歩き回るというような七不思議があったと思います。」
「実態は？」
「さぁ、多分、デマでしょう。あるいは中に入った教師が持つ懐中電灯の灯りを見て、生

徒の誰かがそう吹聴したのかも。プレハブにはもう電気が来てないんです。」
「なるほどね。おあつらえ向きのオバケ校舎ってわけだ。ガラスや施錠が破られて、中に侵入されたことは？」
「なかったとは言えませんが、少なくともこの二〜三年の間にはないはずです。」
「少女がこの雨の中、昼休みにわざわざここへ来る理由が思いつきます？」
「いえ、……さっぱり。」
「だよなぁ。……だろうなぁ……。」
優花はぶつぶつと呟きながら再び階段を上り、田無が転落した踊り場に立った。
「……学校の階段にしちゃ危ないよねぇ。この柵、簡単に越えられちゃうじゃないの？　悪意のあるヤツが突き落とそうとしたら、できないことじゃないねぇ。」
「ですよね。…学校側も危ないことは知っていて、ここに上らないよう、ロープでぐるぐる巻きにして立入禁止の札を張っていたそうです。ただし、事故当時は何者かの手によってロープは解かれていました。昨日の見回りの時点では異状なかったそうなので、恐らく事故当時に解かれたものと推定します。」
「雨の中、片手に傘を持ってたらロープは解けないよね？　ロープを解くためには両手を使う。……ずいぶん濡れるねぇ？　今日は朝からずっとこんな雨なんだから、ロープを解いた本人は相当濡れたはず。田無の事故後、雨に濡れた子がいなかったか捜してみようか。

…まぁ絶対に濡れた保証もないけどね。犯人が複数だったら必ず濡れるとは限らないしねぇ。」
「わかりました。聞き込んでみます。」
「あと、この雨の中、それだけの手間を掛けてでも田無は二階踊り場へ上がりたかったってことだね。田無が上りたかったのか、田無を呼んだヤツが上りたかったのかはわからないけれど。」
「……初めから突き落とすつもりで呼んだのでしょうか。」
「う〜〜ん、この外階段ってのはいい感じに死角なんだよねぇ。木立が茂ってて、校舎のどの窓からもここを見ることができない。そこがポイントだよ。」
「校内の死角と知っていて、初めから突き落とすつもりでここへ呼び出した…？」
「さらに興味深いのは、学校の窓は全て木の関係で見えないけれど、屋上は見えている点なんだよねぇ。」
「ということは、屋上でバレーボールとかやってた生徒からはここが見えたかも…！　ひょっとして目撃者がいる可能性も？」
「馬鹿だね君。だから今日なんだよ。このザーザー降りの中、屋上に出る生徒がいると思う？　いないに決まってるじゃないの。だから今日なんだよ。」
「ということは…宮島刑事。……これは事件で、犯人は、雨の日にここが死角になること

を知って、少女をここに誘き出したと？」
「うん。私ゃそう見るねぇ。いくら柵がチャチだからって、落ちるかい普通。」
「…偶然、綺麗な感じで滑って、柵の下をするりと抜けたとか。」
「少女の落下地点の穴、この縁から多分、二mちょっと以上はあるんじゃないの？　滑ってするりと落っこちたならそこまでは行かないと思うねぇ。それにそういう落ち方をしたら、縁で擦って目立つ外傷を残すはずでしょ？　そういうのがあるとは聞いてないねぇ。あとで病院に行って先生に聞いてみよう。……被害者が意識不明ってのはついてないなぁ！」
「どうしましょう…。」
警官が情けない声をあげると、優花がその背中をバシーンと叩いた。そしてニヤっと笑って言う。
「どうにかするのが警察だよ君。情けないことを言うな〜！　確か、少女は別件で署に相談が来ていたはずだね。学校でイジメに遭っているというような話があったはず。そのラインで家族にも話を聞いてみよう。それから校内の彼女の状況についても聞き込みがいるね。昼休みに雨に濡れた生徒がいないかの聞き込みをよろしく！　……学校という特別な環境だから制服警官がうろうろってわけにもいかないか。注意しながらやろう。私の見たところじゃこの事件は多分、校内の人間関係によるものだね。動機も犯人も全てこの敷地

の中に納まっていると思ってる。よし、手分けして始めよう！」
優花がパーンと手を打つと、警官たちが皆、頷くのだった……。
集中治療室の入口脇に患者の名前の入った札が掲出されていた。
「…………田無美代子。…………あ、すみません～！　どうも、警察の者です。鹿骨署の宮島と申します。」
田無は面会謝絶で会えなかった。もっとも意識は戻っていないそうなので、会っても何も聞けることはないのだが……。
廊下の向こうのソファーでさめざめと泣く中年女性が、田無美代子の母親だと教えられた。
優花が母親に挨拶をすると、警察が出て来るような事態になったことを嘆き、一度は警察に相談しながらなぜ今日の悲劇が防げなかったのかと、一層深く嘆くのだった。
優花は母親を少しずつなだめ、落ち着きを取り戻させる……。
「…刑事さん…。やっぱり美代子は誰かに突き落とされたんですか？　誰なんです！　誰がこんな酷いことを……!!」
「まだ事件と決まったわけではありませんよ…。」
「あんな雨の中、ひと気のない立入禁止のプレハブ校舎なんかに一人で行くわけがないじ

ゃないですかッ!!」
「そうですね、まったくその通りです。事件の可能性も否定できません。どうしてこのようなことになったのか、必ず警察が解明しますので、どうかお母さん。美代子さんのためだと思って、どうかご協力をよろしくお願いいたします。」
「…美代子は……学校でイジメに遭っていたんです…。それは警察にもご相談しているはずですよね!? 酷い…、人の自宅に忍び込んで美代子の部屋に汚い骨をバラ撒くなんて…!!
他にも学校でもたくさんあるというじゃないですか…!!」
「お母さん。美代子さんが、誰に苛められているとか、何か交友関係でトラブルがあったとか、そういう話を聞いたことはありませんでしたか?」
「……クラスに仲の良くない人たちがいるというような話をしていたと思います…。でも美代子は苛められるような非のあることはしない子だったんですよ!! 他の子よりちょっと口数が足らないだけで、小学校の時からなぜかイジメが絶えなくて…!」
やはり学校の交友関係が鍵になる…。
そして、以前の自宅に入られて骨をバラ撒かれたという事件の時の調書からも、田無美代子が「骨」をキーワードにしたイジメを受けていたことは明白だった。
……同じ中学校に通う、甥の友宏くんから何度も聞かされている「お骨サマの呪い」の話…。

「お骨サマの呪い」と称する、ちょっとした悪戯めいたものが学校で流行っているのは知っていた。
でも私はそれを、目標を特定しないタイプのストレス発散型だと断じていた。
ストレス発散型のイジメは、例えば授業中に、後ろから消しゴムの欠片を投げるような他愛もない悪戯はするが、相手を呼び出して突き落とすような、リスクのあることは絶対に嫌う。匿名性があり、自分に何のリスクも及ばないからこそ、気軽にスケープゴートを、ちょっかいを出す感覚で苛められるのだ。
今回の田無美代子の転落事故が、もし事件だとするなら、…それは「お骨サマの呪い」というゲーム感覚のイジメとは少し違う気がする。
「…………………うーーーーーん。」
優花の頭の中をいくつもの断片が駆け巡り、なかなか形作ろうとはしてくれなかった……。
雨はまだ止みそうにない。このまま今日は暗くなるのだろう。
「警察の宮島さんはいらっしゃいますか〜〜〜?」
「あ、はーい!」
だいぶ待たされた後、ようやく診察した医師が会ってくれた。
「では、転落した時の傷以外に不審な外傷はなかったというのですね?」

「そうですね。転落した時の打撲や捻挫、あとシャベルによる損傷の他には異常な所見は認められませんでした。」
「少女は運ばれてきた時、泥まみれだったと思うのですが、何か先生、気になることはありませんでしたか？」
「いいえ、特には。争ったような形跡等、そういう着衣の乱れはありませんでしたし。着ていた服にも特に不審な傷などはなかったと思います。」
「少女は今、病院の寝巻きですよね？　脱がせた服は院内ですか？」
「だと思います。あとで確認してみてください。」
田無の着ていた服は、すでに鑑識が回収していた。
「どう？　何か不審な点は出ましたー？」
係員は無言で首を振った。
「雨の中ですからね。びしょ濡れの泥まみれ。取っ組み合いをした形跡は認められないと言えば認められないのですが…。」
「つまり、何も手掛かりなしってことだね。」
「申し訳ないです…。」
「靴の裏はどう？　付着した泥とかから何かわからないかなぁ！」
「やってます。何かわかったら知らせます。」

そうそう都合よく手掛かりが見付かるなんて甘えたつもりはなかったので、優花は期待しないで待ってるよと言い、その場を後にした。

「……なーーんにも手掛かりはなしか。もしこのまま田無がずっと意識が戻らなかったら、嫌ぁなヤマになりそうだなぁ……。」

優花はカップコーヒーの自販機の前で、砂糖を入れるか少し迷った後、ブラックを選び、一向に止もうとしない雨を見ながらコーヒーを啜った。

手掛かりがないのはそれだけではない。優花が睨んだ、昼休みに雨で濡れた生徒もまったく見付からなかった。

学校では、生徒たちの間でも犯人捜しが流行っているらしく、雨の屋外で事件があったのだから、犯人はきっとズブ濡れに違いないという推論にはとっくに達していた。

その上で、生徒間で昼休みにズブ濡れになった生徒はいなかったか捜されていたが、そういう人物は生徒たちの間でもまったく摑めてはいなかった。

……そりゃそうだよな。これが事件なら、明らかに計画的だ。濡れることは朝から予想がついている。予め濡れてもいい格好で田無を突き落とし、どこかで着替えて髪も拭いて、涼しい顔をして教室に戻ったとか。

……それより、ずっと気になっていたことが一点あった。

それは田無が転落した踊り場の高さである。

二階という高さは非常に微妙だった。突き落として絶対に死ぬとは言い切れない程度の高さだ。
明白な殺意があるなら、二階の踊り場から突き落とすというのは今ひとつピンと来ない。刃物を用意してぶっすりやる方が確実だし信頼できる。
今回はたまたま偶然、落下地点にシャベルが埋まっていたため、田無は意識不明という重体に陥ったが、シャベルがなければ、軽んじれない怪我はしたかもしれないが、少なくとも命に別状はなかったはずだ。
そうだったなら、田無は誰の犯行かすぐに証言できる。犯人はおいそれと逃げ切れないはずだ。
……明確な殺意が犯人にあったわけではない…？
ちょっとした喧嘩か何かがあって、取っ組み合いをしている最中に田無は誤って転落。ぴくりとも動かない田無を見て、犯人は怖くなって逃走……。
…一番、有り得る線に思えた。
殺意なき犯行。犯人には殺す気はなかった。……結果的に田無は意識不明となり、そいつはラッキーだと思っているに違いない。…いや、最近の子はそこまで図太くないな。いつ田無の意識が戻り自分が逮捕されるかわからないと怯えているのだろうか。
だが、中学生という微妙な世代だ。

頭は子どもなのに、人生の最初にして大きな岐路に立たされている。

内申書一枚で人生の勝ち負けを決められかねない立場の彼らが、自分から自首などするわけがない。…あわよくば逃げ切ろうとだんまりを決め込むに違いなかった。

……田無の意識が戻ればいいのだが。

犯人が誰であろうと、動機が何であろうと。……後味の悪い事件になるだろうなと優花は思っていた。

…気付けば、いつの間にか手の中のコーヒーはすっかり冷めていた。

優花の電話

「友宏〜〜!!　電話よーー!!」

「あーーーい!　誰から?」

「優花おばさんから。」

意外な人からの電話にちょっと驚いた。時計を見ると、もう夜の九時を過ぎている。……何だか胸騒ぎのする電話だった。

だが、電話の向こうから聞こえるおばさんの声は、いつもと変わらぬ元気なもので、少しほっとした。

「ごめんね〜こんな時間に！　勉強中だった？」
「あ、い、いえ…。あははは。」
勉強中でしたとスラスラと嘘がつければいいのだが…。嘘の小ささと度胸の小ささが情けない。
「それよりどうしたんですか？」
「うん。ちょっとね、友宏くんに例の件でお話が聞きたくて。」
……例の件という言い方にどきりとする。…田無の事件のことに違いなかった。
「まま、まさかおばさんは…僕が犯人だって疑ってるんじゃあ…!?」
「わっはっはっは！　そうなの？　そうなら友宏くんを今から逮捕に行かないとなぁ〜！
そういう話じゃないの。田無美代子さんのこと、もうちょっと詳しく聞かせてほしいの。」
「えっと……、前にも言った通り、僕はクラスが違うから…。」
「うん、それは聞いた。でも確か、友宏くんの話によると、田無美代子は『お骨サマ』に呪われていると、もっぱらの噂だったんだよね？　違うクラスの友宏くんの耳に入るくらいに。」
「う、うん。…そうですね…。」
「同じ学年の同じ年の生徒として、友宏くんはどう思う？」
「どう思うって言うと……？」

「クラスの噂とか何でもいいから聞かせてくれないかな。おばさんのことをクラスメートだと思ってくれていいからさ。今、学校で出ている話題について何でもいいから聞かせてほしいなぁ。」
「………んんん。……『お骨サマの呪い』にかこつけて、みんなが田無を苛めていたと思います…。」
「そのイジメの内容というのは、机の中やカバンの中に鶏肉の骨を放り込まれたり、骨骨骨って落書きをされたりっていうやつだね。」
「…はい。」
「その『お骨サマの呪い』というのは、いつ頃から出てきたの？　ブームになったのはここ最近みたいだけど、その前からずっと存在だけはあったのかなぁ？」
「い、いえ、なかったと思います。本当にここ最近のことだと思います。」
「やっぱりそれは、例の黒板に骨っていう字がいっぱい落書きされたあの事件が切っ掛けなのかなぁ？」
「………ん、……多分、そうじゃないかと。」
多分、そうじゃないかどころか。そうするためにした落書きだったじゃないか…。
「……………ふぅむ……。」
受話器を肩で挟みながら、腕組みをしている様子が容易にうかがえる声だった。

おばさんはしばらくの間、次に何を聞くべきか悩み、唸っていた。
その間が何だか、……本当は僕が犯人だと疑っていて、自白するのを待っているように感じられた。……そんなはずはない……。だって僕らは、田無の事件には何の関与もしていない……。
「あの、……優花おばさんは今回のこと、どう見てるんですか…？　事故のわけないんですよね？　やっぱり、…これは事件？　誰かが『お骨サマの呪い』ということにして突き落とした…？」
「まぁ、まだそうだと決まったわけじゃないけどねー。その可能性はもちろん否定できないよ。」
「現場検証とかで手掛かりとか、そういうのはなかったんですか？」
「んーーー、降雨の屋外だしねぇ…。世間の人が思ってるほど、現場検証で劇的な何かが見付かることってそう多くはないんだよ。刑事ドラマにあるような、不審な指輪やボタンが落ちてたなんてケースはお目にかかったことがないねぇ。あっはっは！」
「じゃあ、今回の事件では、手掛かりは何も見付かってないんですか…？」
「……うーーーーん…。今のところはそうだねぇ。田無さんが何であの雨の中、あんな場所に行ったのか、それも含めてさっぱりだよ。だから田無さんの角度からの犯人捜しは絶望的だね。あとは地道なアリバイ探ししかない。」

「アリバイ探し…。」
「犯行時刻はほぼ間違いなく、お昼休みの間だったわけだもん。ということは、犯人はあの雨の中、教室から姿を消した人間だった可能性が高い。」
…確かにそうだ。あの雨の日、……誰かがあそこに田無を誘い出した以上、その誘い出した人物もあの雨の中、プレハブ校舎へ向かっているはずなのだ…。
「まーーー、もちろん、外部から不審者が入り込んだっていう可能性もないことはない。……その可能性は低いと見てるけどねぇ。」
「間違いなく、学校の生徒の犯行だっていうことですか。」
「間違いなくなんて言葉は使えないよ。外部の不審者の可能性が低いって言っただけ。少なくとも、あの雨の中、田無さんがあの場所を訪れたのには訳があるはず。それを知る者が関係している可能性が高いねぇ。」
「…なるほど…。じゃあ警察は学校の生徒全員に聞いて、あの日の昼休みにどこにいたか、所在を確認していくわけですね。」
「学校が協力的じゃないんで難しいんだけど…、それしか方法がないよ。地道に捜査していくほかないねぇ。」
「そうだ、田無の家に誰かが入り込んで悪戯をしたっていう事件があったんですよね？　その時、警察の捜査で何か手掛かりはなかったんですか？　怪しげな指紋とか足跡とか！」

「うーーーん。あの時は事件性が低いと判断されてたらしくてねぇ。家人から聞き取りをしただけで、別に指紋とかそういうのを採ったわけじゃないらしいんだよ。だから実は、あの件からは何の手掛かりも出ていない。」
「出ていない、というより……、何も調べてない、って感じですね…。」
「わっはっはっは！　友宏くんも痛いことを言うねぇ。」
………警察というのは、もっともっとすごいものだと思っていたのだが…。優花おばさんの話では、今回の事件に関する手掛かりを何も見つけていないように思う。
…いや、だからこそ僕に電話してきているのだ。
現場から何も手掛かりが見つけられないからこそ。…その学校に通い事情に通じた人間に話を聞くほかないのだ。
「まーー、おばさんの方でももうちょっと頑張ってみるよ！　お、出前が到着したみたい！じゃあね、これで切るからねぇ！」
「あ、ハイ！　がんばってください！」
「そうそうそうそう。最後にごめんね？　ちょっと正直なところを教えてくれる？　一点だけでいいんだよー。」
「何ですか？」
「おばさんね？　……全ての始まりはあの黒板落書き事件にあるんじゃないかと思うんだ

よ。実はそこに遡(さかのぼ)って捜査すべきだと思ってるの。学校に流行る『お骨サマの呪い』は、あくまでも一部の生徒が作り出した悪戯半分のおとぎ話。……それがいつの間にか勝手に膨らんじゃって暴走してるのかなぁって。そう考えるとあの落書き事件の犯人たちは、今のこの状況を楽しんでるんじゃないかなぁとも思うの。自分たちの生み出したおとぎ話がどんどん大きく膨らんでるんだからね！　ひょっとしたら自分たちが卒業した後もずーっと学校に定着することを期待しているかもしれないなぁって。」

「ど、ど、…どうなんでしょうね……。僕にはわからないです……。」

「やっぱり、こういう呪いの話は、死者が出た方がかっこいいでしょ？　……一番最初の犯人たちが、面白半分でやった可能性もあるんじゃないかなぁって。」

「そ、……そんな悪いヤツ…、学校にいるわけないですよ…。」

「そう思いたいけどねぇ。田無さんのイジメに誰もが加わり、誰も止めなかったのが現状でしょ？　性質(たち)の悪いのがいる可能性は充分あるよ。それに、聞くところによると田無さんへのイジメには、髑髏(どくろ)のお面を被(かぶ)って叩くなんていう暴力的なものもあったんでしょう？」

「……………………。」

「だからおばさん、黒板落書き事件の当日のアリバイも可能な限り調べていこうと思ってるの。………それで何だけど。」

心臓が一心拍分だけ、止まる…。話の流れ上、きっとそういう展開になると心のどこかで覚悟していてもだった…。

「……友宏くん、あの日の朝に限って早朝に登校したんだよねぇ…?」

え、……あ、…………ぇっと…………。

「どうしてあの日だけ早朝に登校したの？　……おばさんにだけは正直なところを教えてくれないかなぁ……？」

……頭の中に強気と弱気がぐるぐると渦巻く…。

僕は強気に嘘をついてもいいはずだ。……だって、僕は田無に対しては一切何もしていない。体に指一本触れるどころか、その席にすら触れていない。悪戯ひとつ、やってはいないのだ。……だから、何の非もない。だからこそ、あの日の落書きの悪戯をわざわざ告白する必要は何もない……。

でも、……こんなところで嘘をついて本当にいいんだろうか……？

話では、田無は今も意識が戻らず重体だという。…これは立派な殺人未遂だ。

とっくの昔に「お骨サマの呪い」は悪戯の域を超えている。

そしてついに、人の命を脅かすまでに至ったのだ。

僕は、あの祟り神を生み出したことに後悔を感じている。……「お骨サマの呪い」ごっこなど、早くブームが去って忘れられて欲しいと願っている。

だからこそ、小さな段階からでもおばさんに協力して、早くこの事件を終わらそうと努力しなくてはならないんじゃないだろうか…？
それに、田無の事件に関与してないからと言って、田無への執拗なイジメの切っ掛けを作ったことの責任がなくなるわけじゃない…。
この際、素直に打ち明けることによって、身の潔白を証明した方がずっといいのではないだろうか。
………でも、僕が勝手に打ち明けたら、博之や亨はどう思うだろう。
きっと僕のことを裏切り者と呼ぶだろう。
それに、僕らはきっと学校に呼び出されてひどく叱られる。…それに叱られるだけではきっと済まない。内申書にもきっちりそれは書かれ、僕らは今後の進路に深い傷を負うのだ……。
でも、それは自業自得じゃないのか……？　僕らが育てたワニだ。それが育ち、人を襲った。襲ったのはワニで、育てた自分たちに罪はないのか…？
でもそれを言ったら、田無を苛めたその他大勢の連中はどうなんだ。みんな全員に非があるんじゃないのか？　少なくとも僕は田無には一切なにもしていない。でもB組には田無へのイジメに悪戯半分で関わった人間が大勢いるはずだ。そんな連中の方がずっとずっと**悪いはずだ。**僕らだけがその責めを負うのはおかしい。

……ああ、駄目だ駄目だ、そういう言い訳こそが罪悪感を薄れさせる「お骨サマの呪い」そのものじゃないか！　そんなのを言い訳にするようじゃ駄目だ駄目だ…。そんなじゃ、僕は呪いに取り込まれているのと同じになってしまう……。
「友宏くん〜〜〜？　あの日、どうして早朝に登校したんだったっけ？」
おばさんはもう一度聞いた。……だが、僕の中ではどうするかまだ決心が付かず、…結局、曖昧に、あの日についた嘘をもう一度繰り返してしまうのだった。
「あ、あの日、話したじゃないですか…。サッカー部の友達とちょっと約束があって……。」
おばさんの返事がない。受話器を離しているのだろうか？　遠くでおばさんの、は〜〜〜い！　という返事が聞こえた。
「うん、ごめんごめん！　じゃあ友宏くんは何も関係がないんだよね？」
「は、はい！」
「そうか！　ならいいんだ。本当に変なことを聞いちゃってごめんねぇ！　こっちでもじっくり捜してみるね。それじゃ！」
チン。
それで優花おばさんの声は途切れた。
……うまくこの場を誤魔化せたという安堵感はなかった。
おばさんが本気になれば、僕の言い訳である「サッカー部の友人」を調べるだろう。……

そうすれば、そんな約束が元々ないなんてことはすぐバレる。
反省の念にすでに苛まれているというのに、僕はこの期においてまだ嘘を重ねるのか…。
僕は自分のことを、肝っ玉が小さいと言われるのが大嫌いだった。
でも、…今のこの優柔不断さを見て、どうしてそうでないと言えるのか。
………何も言葉は浮かばず、ただ深いため息が胸の奥からわくだけだった…。

もう他人事じゃない

僕らはもう狸神社には近付いていなかった。
だから今では、別の場所にある公園を溜まり場にしていた。
田無の事件以来、僕らはずっと気が晴れない。
口を開けば、俺たちは関係ないと強がってばかりだが、……そもそもの根本的な原因である「お骨サマ」を生み出したことに、全員が非のようなものを感じているのは間違いなかった。
僕はある日。……思い切ってみんなに打ち明けた。
同居している叔母が刑事であること。今回の事件を警察が捜査していて、黒板落書き事件から捜査をやり直していることを。

予想していたよりみんな驚かなかった。
誰もが、警察の捜査が黒板落書き事件に遡るだろうと予見していたということだった。
「……正直に打ち明けてもいいんじゃないかって思うんだよ。」
「おい待てよ冗談じゃねえよ！　それじゃ俺たちが全部の責任を負わされるじゃねぇかよ……！」
「そうだよそうだよ！　もともと俺たちに責任なんかないってば！　だって俺たち田無の事件とは何の関係もないだろ？」
「ないよな。俺も博之も友宏も、みんなあの日は教室にいた。俺たち以外のヤツも一緒にいたからアリバイは完璧なはずだぜ。」
「そうじゃねえよ！　ここまで大騒ぎになった『お骨サマ』を流行らせたのは俺たちですってことになってみろよ。進路指導室に呼び出されるだけじゃすまねぇぞ！　親も呼ばれるだろうし、内申書だってどうなるかわかんねぇぞ！」
内申書。……それを聞き、みんな黙り込む。
自分たちも、悪いことをした責任はすでに感じていた。謝るべき場があるなら、いつか謝るべきかもしれないとみんなが思っている。
でも、それが内申書に響けば将来の人生にまで関わりかねない。……だから、躊躇(ちゅうちょ)するのだった。

「……警察は田無を突き落としたヤツが誰か目星をつけてるのか…？」
「まったく手掛かりがないって言ってた。…だから、黒板落書きと同じ犯人の可能性があるって言って、そっちから調べるみたいなことを言ってたよ。」
「…マジかよ、笑えねぇよ……。」
「なぁ、警察に俺たちがバレるより早く、本当の犯人を捜し出すことの方が大事なんじゃないのか？」
「それが出来りゃそうしてるよ。」
「ほら、あの手紙！　あれを入れたヤツは多分、犯人本人か、その一味だと思うんだよ。」
「そうだよな、犯人の指紋とか残ってるかもしれない！　そういえばあのメモってどうした？」
「…俺は持ってねえよ？」
「俺も知らねぇ…。」
……あの後、あの呪いの手紙をどうしたか記憶がない。
しばらくの間、最後に読んだのはお前だったろ、と二人で擦り付け合いをする。…だが結局、誰が持っているのかはわからなかった。
もっとも、誰かが持っているかどうかも怪しい。あんな不気味な手紙、わざわざ取ってなんかおくものか。……誰が持っていたにせよ、きっとクシャクシャに丸めてドブへでも

投げ捨てたに決まってる。

「……唯一の犯人の手掛かりだったのにな……。」

「でも、……田無を呪ってくれと神頼みする人物がいたのだけは事実だよ。田無を呪いたいほど憎いヤツ、……いるんじゃないか？」

僕らはクラスが違うからよくわからないだけで、B組の中では有名なんじゃないだろうか。田無を嫌うグループの中に、さらに嫌い、呪いたいくらいに嫌う人物がいるのかもしれない…。

「こうして考えれば考えるほどさ。……あの五万円を入れたヤツは、最初からこうする目的だったんじゃないかと思うんだよ。…事件を起こして、俺たちに擦り付けるために。」

「…擦り付ける、というのは正しくないね。僕らが利用できることを計算して、自らの計画に組み込んだんだよ。しかも、僕らはそれを警察に打ち明けられないということまで読みきって。」

「………………。」

誰も反論はしなかった。

現時点で客観的に見て、もっとも疑わしいのが僕らなのは間違いないからだ。

警察が僕らのところへ来たら。……たとえ田無の事件の潔白を証明できたとしても、そ

れだけでは済まない。潔白を証明するためには、全てを話さなければならないからだ。そうなれば、……学校はきっとただでは済ませない。学校とか進路とか、きっと滅茶苦茶になる。

…だから、警察が僕らのところに来る前に、僕らが本当の犯人を見つけなければならないのだ……。

「……どうやってだよ…。俺たち普通の学生だぜ。犯人捜しなんてそんなの無理だよ…！」

「でも、俺も友宏の言うのには賛成だな…。このまま座ってても、どんどん首が絞まるだけだぜ、きっと。」

亨が言うのは正しい。博之も何も言い返せず頷く他なかった……。

翌日、僕らは覚悟を決める。

覚悟を決めた、というよりは、このまま何もせず日々を過ごす緊張に耐えられない、という方が正しいかもしれなかった…。

あの日以来、田無の事件の話は学年中で飛び交っていた。

だから僕らが田無のことに関心を持ち、それを尋ねたとしても誰も不審には思わないのが幸いだった。

まずわかったのは、田無を嫌っている女子が多かったということだ。

田無は頭が良くて早熟なところがあり、大人ぶるところがあったらしい。それゆえ、特に身近な女子たちに嫌われていたという。実際、最近の呪いには、そういった女子たちが少なからず絡んでいるらしい。

……ここまではすでに知っていた情報でもある。

そしてすぐに、田無と特に犬猿の仲である少女の存在も浮かび上がった。

同じクラスの、佐藤理恵という子だった。

「有名なんだ…？」

「うん。口喧嘩なんか毎日のことだったらしい。小学校の頃は普通の仲だったらしいんだけどね。中学に入ってから猛烈に仲が悪くなったんだってさ。」

「じゃあ、佐藤って女が犯人か……？」

ものすごい短絡的だが、誰もが思う結論だった。

しかもそれだけではない。佐藤には非常に不利な証言があった。

あの雨の日に限ったことではないのだが…。佐藤理恵には、昼休みに教室外へ遊びにいく習慣があったというのだ。

本人は他所のクラスの誰々と過ごしていたと証言するのだが、どうも釈然としないところがあり、より一層、彼女のアリバイを怪しくさせていた。

「……佐藤のグループが執拗に骨を仕込んでたって話は他でも聞いてるよ。疑わしいよな。」

「うん。僕が聞いた友人のラインでも、佐藤を疑う声が圧倒的に多いね。」
「なら決まりだろ！　仲の悪かった佐藤理恵が『お骨サマの呪い』に便乗して、田無を追い詰めてたんだ。」
佐藤理恵が実行犯、もしくは黒幕だという噂はすでに致命的なくらいに立っていた。
だが、…安直過ぎやしないだろうか。
僕は出来過ぎの状況証拠の数々に、むしろ納得し難い何かを感じていた。
その違和感を何と言い表せばいいのかわからず、僕は口に出すことが出来ずにいた。
……何に違和感を感じるのだろう？
多分それは、あまりに簡単に佐藤に答えが行き着いてしまうイージーさと、僕らが「お骨サマの呪い」を生み出したことや行動パターンまでも読み切り、計画に取り込む狡猾さが、どうしても重ならなかったからだ。
本当に佐藤が犯人だったとして、ここまで賢く頭のキレるヤツが、当日のアリバイをはっきりと用意できないなんてミスを犯すだろうか……？
僕らを利用する狡猾さがあるならば、もっともっと絶対的なアリバイを用意できるはずなのだ。……それが何の用意もなく、学年中に疑われているなんてそんな不用意な事が有り得るだろうか……。
「友宏のおばさんに、佐藤が怪しいって言ってみたらどうだ？　多分、警察が取り調べす

れば泣きながら白状するんじゃないかと思うぜ！」
「…………確かに、佐藤が田無を苛めていたことは間違いないと思う。…でも、佐藤が田無を殺そうとしたかどうかわからないよ。」
「どうしてだよ。」
「佐藤があの場所に田無を呼びつけたとして。田無がのこのことやってくると思うかい？」
「誰にも内緒の話があるとか言って、うまく呼びつけたんじゃないか…？」
「自分を執拗に苛めるグループのリーダーで、しかも犬猿の仲。そんなヤツにひと気のないところに呼び出されて、田無みたいな女が素直に行くわけがない。」
「…行く他ない弱みでも握ってたとか。」
「弱みを握ってるなら、それで充分のはずだよ。殺す理由がない。」
「じゃあ逆か？　呼び出したのが田無の方で、呼ばれたのが佐藤。田無はイジメの仕返しができるような弱みをきっと握ったんだよ。それで佐藤をゆすろうとして逆にやられた。」
「……それで取っ組み合いになって、それで田無が足を滑らせるかして、踊り場から転落した。それで運悪くシャベルがあって意識不明……。」
「………………うーーん……。」
僕の持つ違和感がもし気のせいならば。……この説はもっとも有力だった。

元々佐藤は狡猾でも何でもなく、単に田無を苛めたかっただけ。呪いの手紙も深く考えずに入れた。いや、あるいは呪いの手紙は無関係かも…。そして、田無がイジメをやめさせるに足る何らかの弱みを握って、あの日、あの場所に佐藤を呼び出して。……そして拗れて取っ組み合いになって…………。

もし、本当にそうならば、佐藤はいつ自分の罪がバレてもおかしくない瀬戸際にいるということになる。ちょっと揺さぶりをかければ、あっさりと罪を認めるのではないだろうか……。

「とにかく佐藤だよ佐藤！　証拠はないけど、それを調べるのが警察の役目だろ？」

「証拠なんかなくても、きっと観念して自供すると思うぜ！　違いない違いない！」

博之と亨は、もう佐藤が犯人で決着したと言わんばかりだった。

…釈然としないのは僕だけで、その理由は僕にもよくわかっていない。

でも時間は残されていない。……前に進むしかなかった。

「……明日、佐藤理恵を呼び出してみよう。」

仮に佐藤が犯人でなかったとしても、それはそれで貴重な情報なのだ。今の僕らは、第一容疑者である佐藤を疑わないことには、次へ進めないのだから。

しかし、……もし佐藤が犯人でないとちゃんと証明できたなら。僕らは次に誰を疑えばいいのだろう…？　出来過ぎた犯人像、佐藤理恵については学年の誰もが噂していたが、

次に疑わしい人物の噂などはまったくなかった。
もし佐藤でなかったなら、……僕たちにはもう手掛かりはない。
博之と亨にもそれはわかっているようだった。だから、佐藤に違いないと強がるのだ。
それは佐藤に違いないという意味ではなく、佐藤であってくれ、佐藤でなかったらどうすればいいのだという悲鳴なのだから。
「……仮に佐藤じゃなかったとしたら、…どうする?」
二人とも沈黙する。……答えられるはずもない。でも想定しなければならないことだった。
「僕は、……もし佐藤が犯人じゃなかったら、もうお手上げだと思う。」
「…………………。」
「…そんなわけねぇよ。きっと佐藤が犯人に違ぇねぇよ!」
博之は強がりへの同意を求めるが、僕も亨も頷かなかった。
「『お骨サマの呪い』ごっこは、もうこれで終わりにしようと思うんだ。」
「……………あぁ。そうだな。友宏に賛成だぜ。」
亨は即答してくれた。博之はすぐには返事をできなかったが、否定しないのが彼なりの返事だった。
「やっぱり『呪い』は、人が遊び感覚で生み出してはいけないものだったんだよ。僕らに

とっては悪戯でも、受け取る人たちは悪戯だとは思わない。……そうすれば変なイジメは起こらなかったし、田無だってこんな目には遭わなかった。」

田無の転落については僕らは確かに無関係だ。でも、田無のイジメについては僕らには明白な責任がある。だから、警察が捜査する事件については責任がなくとも、僕らには償わなければならない責任があるのだ。

「佐藤が犯人じゃなかったら、…………………いや。」

僕は思い直す。

やっぱり…僕らは間違っていたのだ。

自分たちが疑われる前に犯人を捜そうというのは、自分たちの罪を隠そうとする行為だ。

僕らは反省をしなくてはならないのだ。

「佐藤が犯人であってもなくても。…………僕らは事件について打ち明ける必要があると思うんだ。」

「…………………………。」

「………打ち明ける必要なんて、…あるのかよ…?」

「うん。……『お骨サマ』を生んだのは僕らなんだ。そして『お骨サマ』は大きく育ち、事件を起こす切っ掛けとして使われるまでに至ってしまった。仮に今回の事件が起きなかったとしても、田無は辛いイジメを長い間受けることになった。」

田無のイジメについては、言い逃れが出来ないくらいに明白な責任が僕らにあった。
だが、それだけじゃない。「お骨サマの呪い」を放置すれば、今後もどこかで誰かがこの呪いを使って、誰かを苛めて不幸にする。そんな犠牲者が生まれ続ける度に、僕らの罪は永遠に深まっていく一方なのだ。
だから、呪いを生み出した僕らが呪いを解かなくてはならない。それが責任であり、……生み出した僕らにしか出来ないことなのだ。
「あれが呪いでも何でもない、僕らの悪戯であることが学校中に知れ渡れば、呪いは笑い話になって消える。そうすれば、もう何も起こらない。絶対に、田無のような事件は二度と起きない。」
「多分みんな信じないぜ？　俺たちのネタ話だと思うだけさ……。」
「みんなに言うんじゃ駄目だ。先生にちゃんと打ち明けないと。」
クラスメートたちに言っても、誰も信じてはくれないだろう。だが、学校においては、先生の口から出る言葉は絶対の信用がある。
僕らが先生に打ち明け、先生が真実を伝えるなら、学校に蔓延(まんえん)する呪いは完全に一掃できるだろう。
だが、博之と亨の表情は重い。理屈ではわかっていても、頷けない。
「…………。」

「……………………俺は、……嫌だな。」

博之は反対する。……当然だった。

「亨は？」

「……俺も、……本音を言えば反対だよ。…責任は感じてるぜ？『お骨サマの呪い』がもう洒落(しゃれ)になんないのもわかってる。この遊びはもう終わりにしたい。田無には悪いことをしたと思ってる。でも、…学校に打ち明けるのだけは勘弁だぜ…。」

「それで、僕らに責任が取れると思うかい？」

「……責任の取り方なら他にもあるはずだぜ。田無に謝るとかさ。……学校に謝ったって処分を食らうだけだぜ。この時期に処分なんて食らったら、受験とかどうすんだよ。友宏はそこそこの偏差値があるからいいだろうけどよ。俺は内申がズタボロだったらヤバいんだよ。親は公立しか認めないって言ってる。公立高に進むためには、そこそこに普通な内申書が欲しいんだよ…!! 責任は感じてるし取りたいとも思ってる。でも、進路を棒に振ろうとまでは思わない！」

「田無の意識はいつ戻るかもわからないっていう。もし数ヶ月以上戻らなかったら、田無は進学どころか留年するだろうね。…いや、戻ればまだいい。一生、意識が戻らないことだってあるかもしれない。……それに対する責任がそれでいいのかい？」

「…………………理屈じゃわかってるよ！　こんなんじゃ責任が取れないってのはわかって

る！　でも俺は御免だ！　友宏が自分だけ打ち明けるなら勝手だが、俺を巻き込まないでくれ！　頼むよ……本当に…………。」
亨は拝み倒すような形相でそう言うと、少しすすり泣くような嗚咽を漏らしながら沈黙した。
僕はどんな言葉をかければいいか思いつかず、…亨と同じく沈黙する他なかった。
やがて、頭をボリボリと掻きながら博之が口を開いた。
「………俺も、これだけは約束する。もう金輪際、『お骨サマの呪い』には関わらない。あと、田無には謝る。…意識が戻らなくても、病院へ行って謝る。亨も一緒だぜ？　三人で謝りに行こう。」
「…………うん。……それがいいね。」
「学校に打ち明けるのは、…少し時間をくれよ。言うなら三人でだぜ。…三人の意志がまとまってから、みんなで一緒に打ち明けよう。」
僕と亨の立場に配慮したうまい言い方だと思った。
「…………そうだね。…もう少し時間が必要かもしれない。」
「取りあえず、……まずは佐藤だろ？　どういう風に仕掛けるんだ。」
「…手段なんてないだろうね。正面から当たって砕けろ、しかないな。」
「田無への責任の取り方はさ。謝るだけじゃねえんだよな。突き落とした犯人を突き止め

るのも、立派な責任の取り方だと思うんだよ。」
亨がそう言い、博之も頷くが、………それで本当にいいのか。
田無を突き落とした犯人という、僕らよりも悪い存在を槍玉に挙げることで、自分たちの罪悪感を誤魔化そうとしているのではないか…？
先陣を切って赤信号を渡った僕らが悪いのか。犯罪を犯した犯人が悪いのか。
…みんな悪い。誰が悪いから誰が悪くないという論法にはならない。
そうなのだ。僕はこの場に至ってようやく知る。
悪さ、……いや、罪に重さなどなかったのだ。
罪に重さを求めること自体が、より重い人間を探して自分の罪の軽さを主張する無責任の極みだったのだ。
罪に重さがないことに気がつけば。…今のこの状況はとてもシンプルだった。
「お骨サマの呪い」を生み出し、それを広めて、田無が苛められる切っ掛けを作った僕らは悪い。
そしてそれに便乗して匿名の悪戯を繰り返した全ての生徒が悪い。尻馬に乗り、田無へのイジメに加わった全ての生徒が悪い。
そしてもちろん、それらを利用し、田無を執拗に攻撃してさらに突き落とした犯人も同じく悪い。全ての人が等しく悪い…。

……………自分で苦笑する。罪に重さがないなんて考え方は、罪に重さがあると主張する人間から見れば、罪の徳政令と同じだ。
僕らが一番罪が重いから、重さなんかないんだと否定したがる……。
学校中が罪にまみれていた。もちろん僕らにもべったりと。
…それこそ、「お骨サマの呪い」。

佐藤理恵と踊ろう

佐藤へのアプローチとして、直接会うことは避けようということになった。
元々面識のない僕らがいきなり現れても、多分、取り合ってくれないと思ったからだ。
佐藤を呼び出すメモを作り、それを下駄箱に入れた。
内容はシンプルだが脅迫的なものだ。
…あなたがあの昼休みにプレハブ校舎にいたのを目撃した人がいます。
私はそれを信じたくありません。ですので、あなたの無実を知りたいのです。
どうか放課後、体育倉庫裏へおいで下さい。
いらっしゃらなければ、残念ながら目撃談を信じなければなりません…。
「………これで本当に来るか…?」

「無実なら来いってことだからね。佐藤が自分の嫌疑を晴らしたくて、充分なアリバイがあるならきっと来るよ。」
「差出人不明の怪しい手紙でもか？」
「そこは様子見だよ。これで反応がなければ、直接接触に切り替えよう。」
佐藤は「お骨サマの呪い」という、根も葉もないでっち上げ話が、イジメの切っ掛けに充分だということを目の当たりにしているはずだ。…だとしたなら、自分に不利な噂が今のこのタイミングで流れれば、田無と同じ目に遭うかもしれないと危惧するはずだ。
……褒められる方法ではないことは充分承知だった。
「それより、仮に来たとしてどう話を進めるんだ？」
「この時期にこれだけ疑われているのに、未だはっきりしたアリバイを出せないということは、佐藤は本当に犯人か、証明のし難い形のアリバイなのかのどちらかだよ。だからどちらにせよ、相当苦しいものになるはずだ。そこから嘘か本当かを見抜いていくしかないね。」
「そんなの見抜けるのかよ……？」
「…やってみなくちゃわからないよ。」
「お、…………雨が降り出したぜ。」
雨雲が垂れ込めていたので、多分降るだろうと傘を持っていたから驚かない。

でも、もっとも疑わしい佐藤を呼び出したその日が、あの日と同じような雨になるのは、何だか運命的なものを感じた。

佐藤理恵は犯人か、違うのか。

僕らが蒔いた種だ。僕らが刈り取り、決着をつけなければならない……。

……約束の時間ぴったりに佐藤は体育倉庫裏へ現れた。

博之たちは、現れただけでもう犯人決定のような面持ちだった。だが、現れたということは抗弁の余地がある証拠でもあり、まだ決着したわけではない……。

「君たちなの？　これを書いたのは。」

佐藤の表情は少し険悪だった。

あの日以来、犯人と陰口を叩かれていた。そんな中でのあのメモだったのだから、胸中が穏やかであろうわけがない。

これ以上、自分の立場を悪くするような噂を広められたくない一心でやって来たのだろう。

「来てくれてありがとう。一応、名乗ります。A組の宮島友宏です。よろしく。」

「あんたの名前なんてどうでもいいわよ。それより、どういうつもりなのこれは。」

……切り返しが少し不自然だった。もし胸を張って無実を証明できるなら、第一声は

こうではなく、目撃談の否定のはず。……いや、まだその判断をつけるのは早い。
「そこに書いた通りです。あの雨の昼休み。佐藤さんがプレハブ校舎から戻ってくるのを見たという人がいるんです。」
「そんな人いるわけないでしょ。私は表に出てなんかいないんだから。」
「……とにかく、その見たという人間も、本当に佐藤さんの姿だったのか自信がないようなのです。九割方間違いないとは言うのですが、僕は九割とは言え、一割の疑いを持って警察に通報するのはよくないと思いました。それで今日、本当のところを聞いてみようと思って呼んだんです。」
「あっそ。ならその人に伝えて。それは私じゃない。……これで用事は終わりでいい？」
「なら佐藤さん。…あなたはあの日の昼休み、どこにいたんですか？」
「みんなに言ってるわよ。私は給食後には図書室に行ったりして過ごすの。一人で過ごしてるからそれを証明できる人がいないだけ。それもあの日に限ったことじゃない。いつもの話よ。」
「あの昼休みの犯行時間中にも、図書室にいたことが証明できませんか。」
「私がいたというのだけが真実よ。きっと図書室にいた他の誰かが証明できるわ。」
「いえ、誰も証明できなかったんです。昼休みに図書室に出入りする全員に聞いたが、あの昼休みに佐藤さんを図書室で目撃した者はいませんでした。」

博之と亨がぎょっとする。…友宏はいつそんなことを調べたんだ⁉ …もちろん、これははったりだった。
「そ、そんなことないわよ。いたものはいたんだもの！ 図書室は静かに過ごすところよ。他に誰がいるかなんていちいち関心を持たないわ。」
「では質問を変えます。あなたが図書室にいたことを証明してください。」
「そんなのはしようがないわよ。本を借りたわけじゃないから貸出記録もない。あそこに行って、食後のひと時を読書で過ごしただけだもの。」
「何の本を読んだんですか？」
「……どうしてそんなことを君に言わなくちゃならないの！」
「読んでいるなら言えるはずです。教えてください。」
「プライベートの問題をあなたに話す必要はないわね。」
「……本当にそうなんですか？」
「本当に、って…どういう意味。」
「あなたは図書室なんかにいなかったから言えないのではないのですか？」
佐藤がすごい形相で睨む。……だが何も言い返せはしなかった。
彼女がアリバイだと主張する図書室で一人で過ごしたことは、誰も証明していないのだ。
もし誰かに証明できたなら、佐藤が怪しいという噂はここまで立たないのだから。

真実である可能性もあるが、嘘である可能性ももちろんある…。
とにかく…強気で行くしかない……。
「では、あなたがあの日、図書室で過ごしたことを信じましょう。あなたは給食を食べた後、図書室に行った。」
「そうよ。最初っからそうだと言ってるわよ。」
「それでどうなさったんですか？　証拠がなくても、どういう風に過ごされたかは話せるはずですよね。聞かせていただけますか。」
「……………………話してもいいけど条件があるわよ。」
「条件、ですか。伺います。」
「私は図書室で一人で過ごしたんだから、どう話してもあなた達が期待するような証拠にはならない。それでも信じてくれるなら話すわ。」
「そうですね。でも、それしかないなら仕方ないです。」
「私が話したら信じる。証拠がないなんて言うのはなし。」
「……わかりました。では話してください。あなたは給食後、図書室へ行った。それから？」
「図書室に入って。…一週間分の新聞が束(たば)ねてありますよね。それらを読みました。」
「新聞。何ていう新聞ですか。」

佐藤は大手新聞の名前を三つ挙げた。澱みはなかった。
「どうして三つも読まれるんですか？」
「新聞ごとに切り口が違うからよ。同じ出来事でも記事の仕方が全然違うの。だから異なる新聞を読み比べると、より真相に近付けて面白いの。」
「なるほど。それから…？」
「それだけです。そうしていたら急に騒がしくなり、プレハブ校舎の階段で誰かが大怪我をしたという話になって、私は図書室を出て野次馬に加わったわ。それで終わりよ。」
「……他には何もなかったんですか？」
「新聞を三つもゆっくり読めばそれで時間は結構かかるし。それ以外は雨の音しか聞こえない、いつも通りの静かな図書室だったわ。」
「……………………。」
黙って耳を傾けていた博之と亨の様子を窺う。佐藤の話に矛盾がないかを必死に読み取ろうとしているのが表情から窺えた。
そんな中、亨が挙手する。質問ということだ。
「読んだ新聞の記事を言ってくれるか…？」
「…………ごめんなさい。覚えてないの。」
「お、覚えてないってことはないだろ…！　ちゃんと読んでたなら少しは内容を覚えてる

はずだろ!?」
亨はここが切り崩し所だと思ったようだ。…だが対する佐藤は冷静な表情だった。
「あれから何日も経ってるし、私も毎日、新聞を読んでいるから、記憶が混同しているところもあるの。………無理に思い出そうとして間違いでもしたら、あなたたちにそれが嘘の証拠だって言われてしまうでしょ?」
「いや、それでも少しは覚えてるはずだろ!? それが言えないのは、」
「亨。むしろスラスラと記事の内容を言えた方が不自然なくらいだよ。……佐藤さんの言う方が自然だ。」
「…………ぅ。」
代わって今度は博之が挙手する。
「な…なら、図書室に居た生徒の人数を言えるはずだろ!?」
佐藤は取るに足らない質問だと思ったのか、ため息交じりに苦笑いした。
「………いつもと同じくらいの人数だった、としか言えないわよ。いちいち数えないし。……それに、仮に私が人数を正しく言えたとして、あなたはそれが本当に正しいか判断できるの?」
今度は逆に佐藤に噛み付かれる。
佐藤は、こちらが実は何の証拠も握ってなくて、適当に揺すればボロを出すだろうくら

いにしか思っていないことを見抜いているのだ。
田無も頭のいい子だったらしいが、それと喧嘩をするだけのことはあり、佐藤も決して頭は悪くないようだった。
…取りあえず呼び出せば何かボロを出すのではないかという、僕らの甘い見通しは通用しないかに見えた……。
「………他に質問は？　ないなら私はもう帰るわよ。雨脚が強くなる一方だしね。」
佐藤の言うとおりだった。雨は先ほどより強くなっている。遠くの空でゴロゴロと音がしているのも聞こえる。これ以上、長居をしたくないのは佐藤ならずとも当然だった。
佐藤の、質問は？　という再度の繰り返しにも、僕らは口を開くことが出来ない…。
「私がここへ来た理由は、あなたたちに変な噂を立てられたくないからよ。私がここに来なかったら、来なかったことを理由に性質の悪い噂をバラ撒くつもりだったんでしょう？
そういうのは困るの。本当に迷惑なの！」
「…この雨の中を呼び出したことについては申し訳なく思います。」
「…幸いこの雨だからさらに言うとね。……あの日もずっと雨だった。だから私が犯人だったなら、きっとずぶ濡れだったはず。田無さんを突き落として、昇降口に戻ってから、どこで髪を拭いて、どこで濡れた服を着替えるの？　絶対無理よ！　雨の日の昼休みは、校舎内を男子が駆け回って遊んでいるじゃない。そんな彼らに誰にも見付からずにどこで

そんなことができるって言うの⁉　私が犯行後に、予めどこかに用意してあったタオルで拭いて着替えたなんていい加減なことを言う人がいるけど、実際、どうやってそんなことができるのか説明してよ‼　場所は？　部屋は？　どうやって誰にも見付からずに⁉　ね？　できないでしょ⁉　無理なのよ‼　それに君たち男子にはわからないだろうけど、私みたいに髪が長いと、一度濡れたら簡単には乾かせないの。バスタオル一枚で拭けば誰にも怪しまれないなんてことはないのよ。それこそドライヤーも使って、時間を掛けてお手入れしないと、気付かれないような状態には戻せないの！」

「いや、例えば……雨がっぱを着ていたとか、濡れないで外に出る方法もあるだろ！」

「学校に雨がっぱで登校してくる人っているの？　それすらも計画的に準備したって言う気？　いい加減にして‼　もしもそうだと言うなら、その証拠の雨がっぱを見せてよ‼　私ばかりに証拠を求めないで、君たちも証拠を見せなさいよ‼　それに君たち、私がプレハブ校舎にいたのを見てるんでしょう？　それなら私が傘だったか雨がっぱだったか見てるんじゃない？　それなのにその質問はおかしくない？　それこそ、君たちが不審な人物を目撃していない証拠じゃないのッ‼」

　雨がっぱの話で一矢報いたつもりでいた博之は、痛恨の失敗に固く目を瞑った…。

　佐藤は本当に頭がいい。…その場だけの勢いで僕らみたいな落ちこぼれが追及しても、何の揺さぶりにもならないのだ……。

「君たちの目撃の話がでっち上げなら、…もう私がここにいる必要もないわね。この酷い脅迫染みた悪戯については先生に報告するわね。」
「…………………嘘をついたことは謝ります。申し訳ありませんでした。」
「……君は素直に謝るのね。…ならいいわ、君は許してあげる。」
遠雷の鈍い音が響き渡った。……それはゲームセットを告げるように聞こえた。
佐藤の見ていないところで、博之は拝むような顔で頭を垂れる。自分のミスで、全て台無しにしてしまった責任を感じているようだった。
「じゃあ、私はこれで帰るね。……さよなら、えっと、宮下君だっけ…?」
「……宮島です。」
「さよなら、宮島くん。今日のことは先生には言わないけど、君たちも二度と私に話し掛けないでね。またこんな変な話をするようなことがあったら、私、すぐ先生に言うからね。君たちが書いた脅迫状、私の手元にあるってこと、忘れないでちょうだい。」
そうなのだ。彼女の手元には脅迫めいたメモが残されている。だからこそこれは博打だったのだ…。
「………わかりました。約束は守ります。二度と話し掛けません。」
「男が口にした約束よ。絶対守ってね。…………………じゃ。」
佐藤は踵を返す。…自分でも言う長い髪が翻り、言葉はなくとも二度と会いたくない拒

絶の意思を感じさせた。
…僕は、本当に最後の言葉を掛ける。
「……でも、すみません！　最後にもう一度だけ！　もう一度だけ同じ事を聞かせてください。あなたは昼休みは図書室で過ごした。そして大手新聞三紙を読み、雨音が聞こえるような静かな図書室で、田無さんの事故の騒ぎまでを過ごした。そうですね⁉」
「そうと何度も言ったわよ！　そしてそれに証拠を求めず信じるという条件だったはずよ‼何度もくどい‼」
「はい！　証拠を求めず信じるという約束です。だから信じます‼　だからッ‼」

〝あなたが図書室にいなかったという証拠になるんですよ、佐藤さん。〟

雨が急に強くなったわけはないのに。雨音が大きくなった錯覚がした。
…佐藤の足が止まる。
振り返りもしない。まるでそこでネジが切れたゼンマイの玩具(おもちゃ)のようだった。
「………あの日の図書室が、雨音が聞こえるくらいに静寂だったということはありえないんですよ、佐藤理恵さん。」
「…………………………なんですって…………？」

「あの日、あなたが本当に図書室にいたならば。……図書室で卓球の真似事を始めて騒ぎ出した男子と、静かに過ごしたい女子の間で大喧嘩があったのを知っているはずです。彼らは、田無さんの事故の騒ぎがあったのを知って、それどころではなくなるまで、ずっと口喧嘩をしていた。だから、静　か　な　図　書　室であったわけがないんです…‼」

「……………………。」

歩みを止めた佐藤が振り返るには、相当の長い時間が必要だった。

そして、……佐藤のそれが何を意味するのか、…この場にいる全員が理解していた。

「……佐藤さん。本当のことを話してくれませんか？」

「……………………。」

佐藤は苦しそうな表情を浮かべていた。それを見て、佐藤がついにボロを出したと確信し博之が噛み付く。

「お、大人しく観念しやがれ‼　お前が田無を突き落としたってことは証拠が挙がってんだ‼」

「…………証拠？　何の？」

「う、……とと、……とにかく警察が証拠をその内、見つけるんだ‼　絶対に逃げられないぞ‼」

「……ふふふふ、……あっはっはっはっはっはっは‼」

佐藤の笑いは奇怪だった。……先ほどの冷静な余裕ある佐藤の笑い声では断じてない。
…でも、観念して自暴自棄になって笑う声とはどうも違った。
「なら警察に任せればいいんじゃない？　警察が証拠を見つけたというなら、私をいくらでも逮捕してくれればいい。でもね、証拠なんてないのよ。」
「………証拠は、ないだと……？　どうして!!」
「だって私、田無さんを突き落としてなんかいないんだものッ!!!」
「この期に及んでまだシラを切るかよッ!!　お前の図書室にいたという話の嘘はとっくに暴かれてるんだぞッ!!」
「そうね。私が図書室で昼休みを過ごしたという嘘は見抜かれたわね。……でも、それで？」
「それでって……。」
「その件は嘘として。そうすると私が犯人だという証拠になるというの？」
「…………………………。」
博之も亨も、この期に及んでなお佐藤が居丈高になるとは思わなかった。…てっきり、もう観念して全てを自供すると思っていた。
「じゃ、…じゃあ犯人でないならどうして嘘をつくんだよッ!!」
……佐藤は薄っすらと笑い、目を閉じた。

まるで、手品の種明かしを子どもにせがまれ、教えようかどうか焦らすような、そんな表情に見えた。
「わかったわ。………全部話そうじゃない。」
「田無殺しを認めるということだなッ!!」
「………違うわ。…私が田無さんを殺そうとしたなどということは有り得ないという、証拠よ。」
「しょ、………証拠だと…………?」
佐藤は、自分が犯行に関わっていないという明白な理由、即ちアリバイを示せなくてここまで疑われるに至ったわけだ。
その彼女に、実は本当にアリバイがあり、あえてそれを公表せず下手な嘘をついてそれを隠すなどということがあるのだろうか…？
犯人がアリバイを立証するために嘘をつくのはわかる。でも、無実なのにアリバイを隠すために嘘をつくというのはどういうことなのか……。
まったく想定しなかった展開に、僕らは煙に巻かれるしかなかった。
「……私が正直に話すのだから、そちらも正直に話してほしいわ。ねぇ、宮島くん。………さっきの図書室の喧嘩の話。…あれは本当？………私を引っ掛けるためのはったりじゃないの………………？」

「…………………………………………。」

「……………………………………。」

佐藤の表情はまだ少しだけ笑っていた。…でもどこか諦観があり、真実を語ろうとする決意のようなものは感じられた。

すでに佐藤は自分がボロを出してしまったことを認めている。その上で全てを話そうとしている。

だからこれは、真実を語る相手に値するかの確認の意味があるのかもしれない…。僕はこの紳士協定を呑むことにする…。

「………………そうです。はったりでした。嘘をついてすみません。」

佐藤は、まさか僕が認めるとは思わなかったらしい。一瞬、きょとんとした表情を浮かべた後、薄く笑い返した。

「君には負けたわ。………………男子にも頭のいい人がいるのね。」

「…………偏差値は並ですが。」

「度胸って言うのかしら？　肝っ玉も太いみたいじゃない。ますます気に入ったわ。」

佐藤は降参だというような仕草（しぐさ）をしてもう一度笑った。

そのやり取りが、とても犯人が嘘を暴かれて覚悟を決めた…という風には見えず、博之も亨も少し怪訝（けげん）そうに見ていたのだった。

「本当のことを話す前に、約束してほしいことがあるの。」
「おいおい、この期に及んでまだ条件があるってのかよ！」
僕は亨を制し、佐藤に先を続けさせる。
「本当のことを話す。私が田無さんを殺せるわけがないこともきっとわかってくれると思う。そして君たちがそれに納得したなら、…………私が犯人のはずがないとみんなに話して欲しいの。……でも、〝どうして犯人でないのか〟については、触れないでほしい。その事について、どうして？　と聞くのも無しで。」
「あなたが犯人でないと示せるなら、それについては忘れます。」
「…………ありがとう。ではついてきて。ここで話すより、実際にその場所で説明した方が早いと思うから。」
そう言うと、佐藤は校舎の方へ向い出した。僕らにもついて来るよう言う。
きっとプレハブ校舎へ行くのだろうと思っていたが、佐藤は昇降口に入ると上履きに履き替えた。その時点で、佐藤が僕らをどこへ案内するのかわからず、僕らは顔を見合わせるだけだった…。
放課後の校内は無人のように静かだった。…聞こえるのは激しい雨の音と、時たま混じる遠雷の音だけ。……蛍光灯で照らされているはずの廊下が、いつもよりずっと薄暗く感じられた。

佐藤は階段をどんどん上り出す。そして、最上階である三階を越えてさらに上がった。
……屋上まで行こうというのか。
三階から屋上へ上がる階段は立入禁止となっている。そう書かれた紙がスズランテープで張られた柵にぶら下げられていた。
佐藤は躊躇なくそれを潜り、僕らについて来るように言う。
三階までの階段は、毎日生徒が清掃をしているのだから綺麗だったが、三階から屋上に至る階段には清掃の割り振りがなく、同じ階段の延長とは思えないくらいに汚れていた。
「……まさか佐藤のやつ、……余計な秘密を知った俺たちを屋上から突き落として殺そうというつもりじゃ…。」
「じょ、上等だぜ、舐(な)めやがって…!!」
「こっちは三人だよ。そんなつもりじゃないはずだ。」
「じゃあひょっとして……全て打ち明けた後、飛び降りて自殺するつもりだとか…。」
「……そんなことを考えてるとは思えないな。」
佐藤にそういうつもりがあるようには見えなかった。
自分が犯人ではないと証明するために僕らを誘っているのだ。それに、…もし佐藤にそういうつもりがあったら、そういう緊張感や殺気のようなものが滲(にじ)み出ているはずだ。
今の佐藤にはある種の覚悟は感じられたが、窮鼠(きゅうそ)猫を嚙むような殺気は感じられない。

…だから僕にはついていっても大丈夫だと感じられたのだ。
「屋上への階段は立入禁止ですよね…？　いいんですか、勝手に入っちゃっても。」
「大丈夫よ。ここの階段は特別教室の並びだから、三階にはほとんど人がいない。だから誰にも見られずに屋上に上がれるの。」
「……あぁ、そう言えば、煙草を吸う不良が一時期、屋上階の踊り場を溜まり場にしていたらしいぜ。」
「あれ、でもそれってバレたんだよな。それでそれ以降、屋上だけでなく、屋上への階段も含めて立入禁止になったんじゃなかったっけ…？」
僕らのそういう話が佐藤にも聞こえたらしい。
「……そうよ。煙草を吸う生徒が隠れ家にしていたことが昔にあったんで、ここには今でも定期的に先生が見回りに来てるの。だからもう、ここにやってくる生徒は本当にいないわ。」
そんな、誰も近付く者のない階段を、躊躇なく上っていく佐藤と、あとに続いて上る僕ら。…やがてすぐ屋上階の踊り場と、屋上へ出るためのガラス戸が見えてきた。
ガラスの引き戸には張り紙がされていた。
〝生徒の屋上への出入りを禁ず！　第二鹿骨中学校生徒会〟
だが佐藤は何の躊躇(ためら)いもなく、鍵を開けると屋上へのガラス戸を開ける。外気が一気に

流れ込んできた。
緑色にコーティングされた屋上は、水が染みこまない分、校庭よりも一層雨が強く叩きつけられているように感じられた。
そう言えば僕らは、傘を昇降口の傘入れに置いてきた。こんな雨では、傘がなければとても屋上には出られないはずだ。
だが佐藤は特に気にする様子もなく、ガラス戸を抜け屋上へ出た。
…いや、屋上へ出たという表現はあまり適切ではない。
屋上へは出たが、この階段室の外壁に沿うように壁伝いで歩き始めたのだ。
「……なるほどな。結構、屋根が張り出してるんだな。…傘がなくても出られるわけだ。」
「こっちよ。」
佐藤が誘う。どうやら階段室の裏側へ行こうとするようだった。
「行ってみよう。」
僕が先に出て、壁伝いに階段室を回りこむ。
想像していたより雨粒の跳ね返りが強く、頭こそ濡れないが、長居すれば足がずぶ濡れになるだろう。
だが、階段室をぐるっと回りこむと、そんなことはまったくなくなった。
どうやら風向きの関係らしい。目の前の屋上は雨が激しく叩きつけているのに、こうし

て階段室の壁にぴったりと背をつけていれば、まったく濡れたりしなかった。
「……へーー……。こりゃ乙なところもあったもんだな…。」
「しかも裏側だから死角だし。……なるほどな、不良が隠れて煙草を吸うにはちょうどいい場所だぜ。」
ちょっとした隠れ家感覚に、博之も亨も面白がっていた。
「いい場所ですね。………つまりここが、佐藤さんの隠れ家ということですね？　立ち入りが禁止されている場所だから、昼休みにここにいたと言えなかったわけですか。」
「……………女の子には一人になれる時間が欲しいこともあるのよ。」
「それはプライベートの問題ですからね。問いません。」
「ありがと。………宮島くんはやさしいね。」
しばらくの間、僕ら四人は沈黙し、この死角的な隠れ家の空気を満喫しながら、屋上に叩きつける雨を眺めて過ごしていた…。
やがて、焦れたのか博之が口を開く。
「でもよ佐藤。お前はさっき、証拠があるって言わなかったかよ。」
「……言ったわよ。まぁ証拠と言っても、あの日あの時刻の日付の入った証拠写真があるわけじゃない。もう少し状況証拠っぽい曖昧なものなんだけどね。でも、それでも充分に説明できると思う。」

「…状況証拠って何だ？」
「直接的な証拠じゃなく、間接的な証拠という意味だよ。…効力は直接証拠に劣るけど、内容によっては同じくらいの力を持つこともある。」
「おおぉ、さすが刑事の甥…。」
「そうなんだ？」
「……ええ、…まぁ。」
「なるほどね。宮島くんの一家はこういうのが得意な家系なのね。納得するわ。……じゃ、私の状況証拠もより理解してくれるかもしれない。」
佐藤は少し歩いて立ち位置を変えた。
「ここがあの当日、私が居た場所よ。」
「はい。」
「ここで、私からクイズがあるから、みんなに答えてほしいのよ。」
「…………？」
この期に及んでまだ煙に巻く気か…？　博之と亨が再び顔を見合わせる。
「今回の田無さんの事故、本当に気の毒よね。……ただ落ちるだけならまだしも、…不幸なことに、埋まっていたシャベルのせいで意識不明にまでなってしまうなんて。」
……あのシャベルに関してだけは、恐らく犯人が仕掛けたものではないはずなのだ。

あの外階段の踊り場から、正確にあの場所に突き落とすなんて真似ができるわけがない。明確な殺意があったら、そんな成功率の低い方法には訴えない。もっと確実性の高い方法で突き落としたはずだ。例えば、二階と言わず、屋上から突き落とすとか。

「意識不明っていうのはどういうことだと思う?」

「……ずっと眠ったままで、起きない状態…?」

「そう。ということは、どういうこと?」

何を聞かれているのかわからず、博之と亨は腕を組む…。

その時、僕の頭に何かが閃く………。それは……ものすごい初歩の初歩だった。そんなの、どんな事件だろうと事故だろうと、一番最初に考えなければならない問題だったじゃないか……!!

「…………わかりました。…つまり、……転落して意識を失った田無さんは、自力では助けを呼べなかったということです。」

「…ははは、そりゃそうだろ。だって意識不明なんだから。」

「じゃあ、誰が意識不明になって横たわる田無を発見したんだよ!」

「………え?」

そうなんだ。僕らはあの日、野次馬に交じって廊下の窓に群がり、みんなでプレハブ校舎を見た。そして外階段の方に向っていく先生たちを見て、そこで何かがあったことを知

った。でも、何があったのかは誰にもわからなかったじゃないか。木立が邪魔で、プレハブ校舎の外階段は誰にも見えなかったんだ！
プレハブ校舎の外階段は木立に囲まれ、一階から三階まで、校舎のどの窓からも窺うことができない。ということは、校舎にいた人間には、転落して意識を失った田無を発見できたはずがないのだ。
「今日ほどではないにしても。あんな雨の中、わざわざ立入禁止のプレハブ校舎に近付く者はいない…。だから第一発見者は誰なんだってことになるんだよ…。」
「………な、…なるほど……。じゃあ……第一発見者って…一体…？」
「それが私なのよ。」
「ええッ⁉　ど、………どういうことなんだよ⁉　つまりそれって、お前があの昼休みに、プレハブ校舎にいたってことなのかよ⁉」
「違うわ。校舎にいながら、田無さんが転落するのを見たということよ。」
「そんなはずはないだろッ⁉　だって、外階段は木立で囲まれてるから、校舎のどの窓からも見えないはず…！」
もう、それ以上を佐藤が言わなくても充分わかっていた。
そうさ。三階までの窓からは見えない。……でも、屋上からは見えたのだ…。
佐藤は僕だけが気付いたことを察すると、当日彼女が立っていたという立ち位置を僕に

譲った。
「…………………確かに、…………見える。」
木立の枝越しにだが、校舎のどの窓から見るよりもはっきりとプレハブ校舎外階段とその周りを見ることができた。あの日の雨は今日よりも弱かったはずだから、よりはっきりと見えたはずだ。
「……認めざるを得ない。確かにこの場所からなら、雨の中に出ることなく、校舎内で唯一、田無さんが倒れていたのを見つけることができる…。」
「これが私の状況証拠よ。…………それが嘘だというなら、あの雨の中にプレハブ校舎へ行って、偶然、倒れている田無さんを見つけたという人間を探してちょうだい。でもそれって、その人が怪しいという意味だと思うけどね。」
「……………では佐藤さんは、ここで田無さんが倒れているのを知って、先生に知らせた…?」
「そうよ。……この距離では誰かはわからなかったけどね。事故だということはわかったから、大慌てで戻って最初に会った先生に、外階段のところに誰かが倒れているって伝えたわ。伝えたのは理科の尾澤先生。…疑うなら尾澤先生に聞いてみて。私から聞いて事故を知ったときっと証言してくれると思うわ。」
先生が証言できるというのに勝るアリバイは校内に有り得ない。……図書室で過ごした

などという曖昧なアリバイに比べたら、これは磐石だった。
「それで、佐藤さんはその後、あそこで田無さんが倒れていたのを発見するには、現場に居たか、立入禁止であるはずの屋上に居たかのどちらかしか有り得ないことに気付き、第一発見者であることも、屋上に居たという事実も伏せなければならなかった……。」
「…………………校則違反をわざわざ自分から打ち明ける必要もないと思って。……立入禁止の場所にいた時点で身から出た錆というわけだけどね……。」
「………………………。」
佐藤の言い分に不自然な点はなかった。
…もしこの佐藤という子が、真顔で人を騙せる生まれつきのペテン師でない限り、到底嘘をついているとも思えない……。
僕らは佐藤の、図書室にいたという嘘は看破できたが、……田無を突き落とした本当の犯人を見つけることはできなかったのだ……。
「………すみません、佐藤さん。疑うわけではないのですが、一応質問させてください。」
「どうぞ…。」
本当に佐藤が第一発見者なら、真犯人に通じる何かのヒントを持っているかもしれないのだ。唯一の容疑者だった佐藤を失った僕らはへこたれず、次への情報を探さなければならない…。

「失礼ですが、……佐藤さんは視力はおいくつですか？」
「一・二と一・〇。そんなに悪い方だとは思わないけど。」
「………ここから田無さんが倒れていた場所は近くありません。あの場所に田無さんが倒れていたのを発見できたことに不自然さを覚えないこともありません。」
この距離で木立の枝越し。それも降雨の中だ。そんな中、身動きせずに地面に横たわる田無を発見できたというのは、少し無理な話にも聞こえたからだ。
「実は私。…………田無さんが落ちるところを見ているの。」
「え……ッ!!」
それは意外な発言だった。田無が転落する瞬間を見ていたというなら……、言うなら……！
「もちろん、この距離よ。外階段の踊り場に田無さんがいる時は気付かなかったと思う。でも、転落する時に存在に気付いたの。……ほら、止まっているものには気付きにくいけど、動くものって気付きやすいものよね？　踊り場に立っていた時は気付けなかったけど、転落する瞬間に気が付けた。」
「た、確かに……！　でも、そうだということは…、佐藤さんは田無さんが転落する一部始終を見ているということになりますよ…！　なら…見てないんですかッ!?　誰が田無さんを突き落としたのかを!!」

この距離なのだから、転落を見たとしたら、何事かと驚き凝視するはずだ。人が落ちたなんて話を、確信もなく先生には伝えられないのだから。
だったなら、誰が突き落としたのか。いやいや、その瞬間を見ていなくてもいい。誰かが現場から逃げ去るのを目撃しているはずなのだ…‼
僕ら全員が佐藤の次の言葉を待つ。
だが、佐藤は遠雷に耳を傾けるような、遠い目をするばかりで、僕らが期待するようなことを口にしてはくれなかった。
「………見ていない、もしくはよく覚えていないということですか…？」
「………………………ねぇ、宮島くん。……私、自分で見たものが、……信用できないの。」
「…見たものが信用できないとは、………どういう意味ですか？」
「君たちはもちろん知ってるよね？　…『お骨サマの呪い』の話は。」
「………今や校内で知らない人はいないと思います。」
「田無さんは『お骨サマ』に呪われて、その呪いを受けていた…。」
「そうですね。…そういうことにされて、みんなからイジメを受けていました。」
「そうね。私もそうだと信じてるわ。たくさんの悪戯が田無さんにされた。それらの全ての犯人が誰だかまでは知り得ないけど、どれも誰かの仕業(しわざ)だったと信じている。」

「…そうでしょうね。誰もが田無さんをスケープゴートにして苛めた。………それが『お骨サマの呪い』の実態ですから。」
「ねぇ、知ってる？　田無さんが受けていた悪戯の中には、誰かの仕業ではない、本当に本当の『お骨サマの呪い』が混じっていた……、という話。」
「………………………。」
その噂は確かに当時、聞いていた。
僕が聞いた話は、誰も触れていないはずのカバンの中から骨がたくさん…という話だったろうか。
「えぇ、その手の話がいくつかあるのは知っています。僕はカバンの話くらいしかよく知りませんが。」
「カバンの話？　誰も触れていないはずのカバンを二時間目の終わりに引っくり返してみたら骨がザラザラと出てきたという話？」
「はい、まさにその話です。本当にカバンに誰も細工ができなかったのかという点で疑問は残りますし。それをずっと見ていた人物についても疑問が残る話です。」
「その、ずっとカバンを見ていた人物が私なの。」
「………え!?」
佐藤からこれ以上、驚かされる話があると思ってなかった僕らは、本当に虚を突かれて

驚く。
「私の席は、田無さんの席の右後ろに桂馬飛びしたところにあるの。…あ、B組は今の席順はくじ引きで決まってるから、男女の列が偶数列奇数列と決まってるわけじゃないのよ。」
「佐藤さんの席が、田無さんの席を一望できる場所にあることはわかりました。……それで?」
「……………だから本当なのよ。」
「何がですか。」
「……………私は自分が見たままの話をしている。」
「見たままとは、…何ですか。」
「本当に、……田無さんのカバンに誰も触れていないのを私はずっと見てた!!」
その頃は、もうとっくに田無はスケープゴートだった。
最初の内こそ、佐藤のグループが主導となって悪戯をしていたようだったが、やがてクラス中がやるようになったので、さすがに佐藤はやり過ぎかと思い、自分は手を引き、他の人が仕掛ける悪戯を眺めて笑っていたのだという。
カバンや席などに悪戯をされることは本当に多かったため、その頃の田無は一日中、自分の席を離れることはなかった。
佐藤も、守りが堅くなったなと他人事のように見てて思っていた。

そんな田無の守りを破り、悪戯を成し遂げようとする悪戯者たちが多かったから、佐藤はそれを眺めているだけで充分面白かったのだ。
そして、今日は誰も田無の席にまだ仕掛けていないな、と思っていた中で、その事件は起こったのだ。
「だッ!!　誰なのッ!?　!?　誰がこんなことをしたのッ!!!」
田無が突然、ヒステリックに叫び席を立ち上がった。皆が何事かと注目すると、田無がわなわなと震えながら、カバンを逆さにしその中身を机の上にぶちまけて見せたのだ…。
カバンの中からは十本以上もの骨がざらざらとこぼれ出る。それは異様な光景だった。
クラス中の誰しもが、あぁ、またどこかの悪戯者がやったなと、同情のふりをしながら笑った。
それは田無も同じだった。あれだけ注意深く席を守っていたのに、またやられたと怒り心頭だった。どこの悪戯者がやったのかと身近な人間に次々と噛み付いていった…。
でも、………佐藤だけは全部見ていた。
カバンには、本当に朝から誰も触れてはいなかったのだ。誰もカバンの中に骨を放りこめたはずがない！
「…………不謹慎だけど、とても滑稽だったわ。………田無さん自身は、クラスの誰かの仕業に違いないと信じてたんだから。ちょっとでも笑うような素振りを見せる子がいる

と、胸倉を掴みあげて、あんたがやったのか、あんたじゃないのかと詰め寄っていたもの。…………でも、私だけは知っていたの。クラスの誰の仕業でもないことを、私だけが知っていたのッ!!」
「そんな馬鹿な…。じゃあ、…本当に『お骨サマの呪い』が存在するってことなのかよ!?」
「…………いや、もしそれが本当なら、………………いやそんな馬鹿な。……そうだ、田無さんの自作自演ということは考えられませんか?」
誰にも骨を放り込む機会がなかったなら、最初からカバンに骨が入っていたと考えるのが妥当だ。つまり、田無はカバンに教科書と一緒に、骨を詰めて登校してきた…! これは田無が自宅に侵入されたという事件を聞いた時、一度は考えた推理だった。
「もちろん、私もそれを疑いはしたわ。でも、どうしてそんなことをするのかが理解できない。田無さんがそんなことをしてどんなメリットがあるのか理解できないの!」
まったく佐藤の言うとおり。…理解不能だった。
田無も、自分が受けているイジメは自分を特定したイジメでなく、「お骨サマの呪い」のたまたまスケープゴートに選ばれてしまったからだとわかっていたはずだ。
だから、じっと堪えて、悪戯が下火になるのを待てば、自然と「呪い」の対象からは逃れられたはずなのだ。
それなのに、わざわざ自作自演をして自分が未だ苛められているように振る舞い、その

結果、それが呼び水となってますますに悪戯とイジメを呼び込んでしまっている。自分からイジメが長期化するように仕組んでいたなんてありえるだろうか？　それは到底、理解できないことだった。

「手品の仕掛けとしては、田無さんの自作自演はもっとも説明できる答えではあるけれど。……どう考えても何度考えても、田無さんが自分からイジメが長期化するように振る舞う理由がない…………。」

「………そうなの。だからこれは、田無さんの自作自演とは到底考えられない。誰の仕業にしても、イジメが長続きすることを目的とした悪意があるのよ!!」

「そして、その悪意のある何者かは、…………カバンに触れることなく、骨を詰め込むことができる力があるってことなんですか…………?」

……自分で言っていて、何を言っているかわからない。……でも、それは、一度は否定した妄想を再び認めなくてはならないということ…。

「だから私、……本当に『お骨サマの呪い』だったんじゃないかって信じてるのよッ!!」

「……ば、……ばかな…………。」

世迷言（よまいごと）と笑い捨てたい博之と亨だったが、言葉に強さはまったくなかった。

「それで私、…田無さんが転落したところを見たと言ったわね。……もちろん見たわよ。**田無さんが不思議な落ち方をするのを見たのよ。**」

「……不思議な、……落ち方……？」

「雨で滑って、そのまま落ちたとか、そういう落ち方じゃなかった。……本当に、不思議な落ち方だった。まるで、…飛ぶようだった。」

「……飛ぶ？」

「そうよ。……まるで、いないはずの誰かに突き落とされるような。」

「いないはずの誰か？　待ってください、じゃあ田無さんを突き落としたのは……、」

「見えない何かだったッ!!　だって私、じっと見た。一瞬、何が起こったのかわからなくて、食い入るように何度も見直したわ。でも、あそこに田無さん以外の姿はなかった。だから誰かが立ち去ったりはしなかったし逃げ出したりもしなかった。田無さんは、誰もいないはずなのに突き落とされたのよ…!!」

「……………………!!」

…僕らの誰もが、そんな馬鹿なと思った。

でも、佐藤が自分の見たままの真実を言っていることだけは誰も疑わない。本当のことを口にするとき以外、決して宿らぬ気迫が込められていたからだ。

佐藤理恵は見たままを言っているのだ。

田無美代子はたった一人で外階段の踊り場にいて、見　え　な　い　誰　か　に突き落とされたのだ…！

「…………し、………信じられない。」
「あるいは、……これも自作自演なの？」
それは皮肉めいた言い方ではなく、……佐藤自身が、自分の話したことに対し、意見を求めているのだ。
「……雨の日にわざわざ立入禁止のプレハブ校舎までやって来て、二階の踊り場から飛び降りる。…………その目的も意味もわかりません。もし自作自演なら、この行為で得る田無さんなりのメリットがあったはず。」
確かに二階という高さは微妙だ。三階以上ならどうなるかわからないが、二階からなら、よっぽどのことがない限り命に別状はないはずだ。田無が自分の意志で飛び降りたと言えなくもない。
でも、やっぱりわからない。何が目的なのかわからない。
「飛び降りれば泥まみれ。運が悪ければ捻挫するくらいはあるかもしれない。それを承知の上で、雨の昼休みに飛び降りることでどんなメリットがあると言うんだろう……？」
「……ねえよ。そんな馬鹿なことをする意味なんかあるわけがねえ。」
博之が応える。その表情はどことなく生気がない。理解できない何かを受け入れなければならない奇妙な感覚が背筋を上っているに違いなかった。

「俺も有り得ねえと思うぜ。あの雨の中、あんな場所に一人でのこのこと出掛ける理由が全然わからねぇよ…。」
「私もわからないわ。………誰かに手紙で呼び出されたとか、そういうことでもない限り、あんな場所をわざわざ訪れない。……警察の捜査で、田無さんをあそこへ呼び出したらしいメモとかは発見されてるの？　刑事の甥の宮島くん？」
「………聞いてない。優花おばさんは手掛かりはゼロだと言ってた。」
田無からの角度では一切手掛かりがないと断言していた。…だから、事件から遠く離れている黒板落書き事件に遡ろうなんて話になっているのだ…。
「そう。……警察ならもっと真犯人の手掛かりを得ているんじゃないかと思ってたけど。……やっぱり何の手掛かりもなしか。……仕方ないわよね。…だって、見えない誰かが犯人かもしれないんだから。」
佐藤は少し肩を落とす。……せめて何か犯人の手掛かりがあったなら、自身が認めかかっている不気味な存在を否定できたのだから。
「…………………佐藤は今でも、……田無のこと、本当に『お骨サマの呪い』だって信じてるのか…？」
「えぇ。」
きっぱりと言い切った。

…田無ともっとも仲が悪く、一時期は直接苛めるグループのリーダー格だった佐藤が、はっきりとそうだと認めた……。
「私ね、不謹慎な話なんだけど。………田無さんの意識が戻るのが怖いの。」
「……どうして？」
「私には、田無さんが一人で落ちたように見えても、」
遠雷の低い音が響き渡る……。
「田無サンダケニハ自分ヲ突キ落トシタ相手ガ何者カ、見エテイタヨウナ気ガシテ。」
もし、田無の意識が戻ったとして。
その田無がこんなことを言い出したら………。

〝私ハ、髑髏ノ仮面ヲ付ケタてるてる坊主ニ突キ落トサレマシタ。〟

警察や病院は、頭を打った時に記憶が混乱したに違いないと笑うのだろうか。
でも、佐藤と、佐藤に真相を聞いた僕らにはもはや笑うことはできないのだ………。
「……じゃあ私、もう行くね。親が心配するから。」
「うん。…………本当のことを教えてくれてありがとう。」
「私がここにいたのは内緒よ。約束だからね。」

「約束するよ。」
「……じゃあね。お互い、二度と会いたくないわ。」
「気をつけて帰ってください。校内、滑りますよ。」
「…………そうよね。私が昇降口に戻る途中、……階段から滑って転げ落ちて、首の骨でも折ったなら、…………大変なことになるだろうから。」
…小枝を何本も束ねてへし折ったような音がしてから、大きな轟音。…遠くから徐々に雷が近付いているようだった。
最後に何か一言言ったようにも見えたが、雷鳴に消されてそれは聞き取れなかった…。
そして、まるで最初からいなかったかのように佐藤の姿だけが消え、僕らは雨の屋上に残される。
………もうこの事件は、何が何やらわからなかった。
僕らは佐藤に騙されてはいない。佐藤は観念して本当のことを全て喋った。
そして、本当のことを知っているはずの田無は、未だ意識が戻らず真実を語ることが出来ずにいる。
田無は、誰に何のためにあの場所に呼び出されたのか。
そして、転落する瞬間に、何を見たのか。
それが明らかになろうと、ならなかろうと。

僕らにはこの事件を、「お骨サマの呪い」と形容する以上の何も出来ないのだ……。
雨はもう土砂降りと言ってもよかった。視界がさらに悪くなり、田無の転落現場はよく見えなくなっていた。
もしあの日もこんな降りだったなら、佐藤は田無の転落を知ることはなく、意識を失った田無は、きっと簡単には発見されなかっただろう。
そう考えると、………まるで佐藤という証人に一人だけ、「お骨サマの呪い」が証明出来るよう、雨を弱めたようにすら思える。
…博之も亨も言葉を失ったままだ。
僕らは「お骨サマの呪い」を生み出した。そしてとうとうその呪いは、本当の呪いに昇華されようとしている。
もはや二度と低俗なイジメの切っ掛けには使われないだろう。
だって、本当の呪いになってしまったんだから。
僕らがヤツに姿を与えなかったとしても。……ヤツはクラスの誰かの描いた落書きから、髑髏の面にテルテル坊主という姿を得てしまった。
そいつはこの学校に永遠に住み続け、生贄を求め続けるのだろう…。
博之が、もう帰ろうぜと言い出すまで、僕らはただただ雨が叩きつける屋上を見ていることしか出来なかった……。

そして降りる緞帳(どんちょう)

今夜の夕食には優花おばさんの姿もあった。
おばさんは相変わらず元気の塊(かたまり)だが、薄っすらと目の下にクマが出来ているように見えた。……きっと捜査が思わしくないのだろう。
下着の替えを取りに来て、ついでに夕食も一緒にということらしかった。ということは食事が終わったらすぐ署に戻るということだ…。
両親はおばさんを気遣ってなのか、事件の話には触れないようにしている。
でも僕は逆で、……事件の捜査が今どういう風になっているか聞きたくてしょうがなかった。
食事が終わった後、おばさんは二階の自室に戻った。僕はそれを追い、話しかける。
「あの、……優花おばさん。」
「んーー？　どうしたの友宏くん。…ひょっとして何か事件について有力な情報でもあるの!?」
「……ということは、……例の事件は何も進展はないということですか…？」
「あはははは…。んーーーーーー、警察はがんばってるよー。」

頑張ってるけど進展なしということだろう…。

「学校では、…警察がこれだけ調べてるのに未だ事件が解決しないということは、……本当に『お骨サマの呪い』なんじゃないかって噂されてます。」

「私もそういう話を聞いてるねぇ。あれでしょ？　田無さんへのイジメの中には、明らかに人間のものとは思えないものが含まれていた、というやつでしょ？」

「……はい。」

「大丈夫だよ、安心しなって！　呪いなんてそんなものあるわけがない。おばさんがきっちり『お骨サマ』の化けの皮を剝いでみせるから、待ってなって！」

そう言って、勇気付けるように僕の肩を強く叩くのだった。

おばさんの元気な様子を見ていると、佐藤に聞かされたあの気味の悪い話も、実は真顔の佐藤にいいようにからかわれたのではないかという気にすらなる。

でも、……おばさんは安心しろの一点張りで、何も具体的な捜査の進展については触れていない。……無責任に言っているだけで、何も真実を暴けてなどいないのだ…。

「優花おばさん。」

「なーにー？」

おばさんは時間がないらしく、荷造りをしながら返事をした。

「呪いって、…………本当にあると思いますか？」

おばさんは以前、呪いは受け手の問題だと言った。

同じ雨が降っても、信じる人はそれを呪いだと思う。信じない人はいいお湿りだと思う。コーラの空き瓶のようなものだと例えた。

「……そういう受け手の問題じゃなくて。本当に純粋に、………呪いとかって、あると思いますか……？」

おばさんは荷造りの手を止めず、少しの間、沈黙してから返事をした。

「うん。……あると思うよー。」

「………………。」

「おまじないって、どうして効果があると思う？　まったく同じ努力をした人が二人いても、おまじないをしている人の方が明らかに違いが出る。これはスポーツの実験で証明されていることなの。」

「それはつまり、……精神的な問題ですか？」

「そうだね。スポーツというのは、肉体も大事だけど、精神もとても重要なの。充分な肉体があっても、精神が弱かったら記録には結びつかない。むしろ、肉体が不十分であっても精神が充実していれば、好記録に結びつく可能性が高い。これはフルマラソンなんかでよく言われる話ね。友宏くんはフルマラソンは知ってるでしょ？」

「はい。……四十二・一九五km走るやつですよね。」

「もし友宏くんがスポーツ選手で、このフルマラソンに挑むとしたら、どういう練習をする？」
「………それはもちろん、本番に備えて、…ぅぅん、……本番と同じ条件で何度も練習します。」
「うん。じゃあもう一人、友宏くんと同じ体格の子がいて、友宏くんとまったく同じ練習量だったとしよう。友宏くんが走ったのと同じ距離をその子も練習していると仮定して。さて、大会当日、まったく同じ練習をしたはずなのに、友宏くんはわずかの苦戦を強いられる。どうしてだと思う？」
「……いえ、わかりません。同じ練習量なんですよね…？」
「実は、その子は普段は四十二・一九五kmを練習しているんだけど、大会の直前に百kmを走っていたの。」
「倍以上の距離、ですか……？　オーバーワークでしたっけ。過剰な練習はかえって体を壊すと聞いたことがあるような……。」
「友宏くん、こう考えるの。百kmを完走したその子は、当日走る四十二・一九五kmをどう思う？　自分が走り遂げたあの距離の半分にも満たないって思わない？」
「…………………。」
自分には百kmを走り遂げた実績がある。それから見れば当日の距離など大したことはな

い。だから自分は四十二・一九五㎞など、物の数ではないという心の強さになる…。
「まぁ、フルマラソンの正しい練習方法という話じゃなくて、陸上一般に言う精神論の話ね。普段、オーバーワーク気味の特訓に耐えた選手には精神的な自信が宿るの。他の誰にも成し遂げられないハードトレーニングに自分は打ち克った。だから誰にも負けるわけがないという強い自信。そしてそれは、如実に記録に出るものなのよ。だからスポーツの世界では、精神面を無視しない。あはははは、面白いでしょ。肉体ばかり追求してそうなスポーツが、むしろ精神を疎かにしないなんて。」
「……それとおまじないにどんな関係が…？」
「おまじないはつまり願掛けのことなんだけど。それが困難であれば困難であるほど、自分はこれほどまでの困難に打ち克つ努力をしたという精神的な強さが、願掛けに対し宿らない？　本気の人間とやる気のない人間って、一目でわかるでしょう。そういうものが宿るの。だからおまじないには、人間の精神面を増幅させて、目標を達成する力を増す確かな効果がある。」
「………つまり、それが受け手の問題、ということですか…？」
「そういうこと。神社で買えるお守りだって同じだね。例えば合格祈願のお守り。僕は新年にお参りして合格祈願のお守りを自腹で買って来た。だから今後の受験には絶対勝てる！って思う人は、精神的なところできっとわずかの有利を得るはずだよ。その過程を自分が

苦労していればいるほど効果的だね。ハードトレーニングと同じように。…例えば、何本も電車を乗り継いで、遠くはるばる湯島天神まで行ってきたとか。」
僕は、合格を祈願するため、湯島天神まではるばる行ってきたという、自信。
もちろん、それだけで合格などできるわけもないのだが、以後の受験勉強にさらにがんばろうという励みにはなるはずだ。きっと、行かずにごろごろしていた人間よりは、精神的な強さが宿るに違いない…。
「さて、ここまでの例はポジティブなケース。これが正反対になると、呪いや祟りなんてものが出て来る。例えば、八百万の神々というのは本来、基本的には祟るものなの。それに祟られたくないからお参りしてるわけなんだよね。もし、しなくてはならないお参りをサボったらどうなるだろう?」
「………さっきの、ハードトレーニングで自信がつくのと逆のこと…。」
「そういうこと。精神に負の力が宿ることもある。何をやってもうまく行かない。何が起こっても自分だけツイてない気がする。こういう状態を呪われていると言ったのかもしれないね。そう考えれば、『呪い』という現象は科学的に存在が立証できていると言えないこともない。…ちょっと暴論だけどねぇ。あははははは。」
「では例えば………、誰かを呪いたいと、本当に強い意志をハードトレーニングと同じくらいに本気で宿らせたなら…。」

〝田無美代子を呪ってください〟

「うん。……呪いは現実のものとなると思うよ。その子は、ある人を呪うために、相応の努力を払う。そして、自分は相手を呪うためにこれだけの努力をしたんだっていう、精神的強さを得る。」

「…………………………。」

「丑(うし)の刻(こく)参りなんてあるでしょ？ あれだって七日間も深夜に儀式を行なうという努力をしなくてはならない。その七日間の苦労が、さっきのフルマラソンで言うところの百㎞と同じ力を発揮(はっき)するってわけ。」

狸神社の賽銭箱に入れられていた、田無を呪う手紙。そしてそれに同封されていた現金五万円。……これはどういう意味があるのか。

「うん。お賽銭の額だって近い効果を出すと思うよ？ 額の問題というよりは、どれだけ無理をして捻出(ねんしゅつ)したかがポイントだね。要するに払った努力や苦労が厳しければ厳しいほど力を得られるわけだからさ。よっぽど洒落にならない額のお賽銭を入れ、本気で祈る人には、きっと同じような力が宿ると思うねぇ。」

よっぽど洒落にならない額。…………バイトができない中学生にとって、五万円なんて

お金は大金だ。書き入れ時のお年玉だって、そうそう五万円なんて達しない。
だから、あの五万円という額は、お賽銭という形でしか接触ができない「お骨サマ」への、これ以上ないくらいに本気の願掛けを意味するのだ……。
「何？　どうしたの？　ひょっとして女の子に呪われるようなことでもしたの ー？」
「え!?　あ、そんなことないですよ…！」
「あっはっはっは、気をつけなねー。女は呪う生き物だからね。人間の半分は女でできてる。ということはつまり、……こ の 世 の 半 分 は 呪 い が ま か り 通 っ て る って こと、忘れない方がいいよー。あはははははははははは……。」
優花おばさんは、そういう話をする間、ついに一度も僕を振り返らなかった…。
それはそれで何だかとても薄気味悪いことで、……もしおばさんが振り返ったなら、それが僕のよく知るやさしい優花おばさんの顔であってくれるのか、わからなくて……。
僕はおばさんの背中を見ながら、金縛りにあったように立ち尽くすしかなかった…。
その時、玄関前にある電話がすごい音を立てて鳴り出した。心臓が飛び上がる。
時計を見れば、もう深夜の十時だ。普通の電話じゃないことは明白だった。
おばさんは荷造りを止めて立ち上がる。……自分への電話だと確信しているようだった。
階下では、お母さんが受話器を取り応対をしているのが聞こえた。

「はい、お待ち下さい。すぐ代わりますね。……優花さぁ〜ん!! 同僚の方から電話ですよ〜!!」

「はーーい!! あ、ごめんね友宏くん! また今度お話ししよう!」

おばさんはそれだけ言うと、ドタドタと階段を駆け下りていった。僕もそれ以上、おばさんの部屋に留まることはできず、廊下へ出る。階段の下の電話で、お母さんから受話器を受け取っているのが見えた。

「ハイもしもし、宮島でございます。どうもお疲れ様です。…………………えッ!! 本当ですか!! わかりました、すぐ田無の病院へ、…あ、署ですね? 了解しました!」

え…!? 田無の病院!? どういうことだろう、田無の身に何かあったのだろうか。

「田無はホシの名前を言いましたかッ!! ……佐藤理恵、……それから、うん。……うんうん! 了解しました!! 今から向います!!」

おばさんは受話器を置くと、文字通り階段を駆け上がってきた。すごい形相だった。僕は慌てて道を空ける。そしてさっき荷造りしていたボストンバッグを肩に背負った。

「おばさん、今の電話は!?」

「うん。急展開だよ! 田無さんの意識が戻ったって! 田無さんは自分を突き落としたホシの名を言ってる!! これで一気に弾(はず)みがつくよー!!」

おばさんは、いよいよだ! と叫びながら、荒々しく階段を駆け下りていく。

……でも、ちょっと待ってほしい。……さっきおばさんは電話で佐藤理恵って言わなかったか…？

「……ごめん、友宏くん。もしそう聞こえたならそれは気のせいってことにしてね？　まだSさんが犯人って決まったわけじゃないんだから。…じゃあ行ってきます！　あ、姉さん、すみませんね……。」

お母さんが何か菓子箱のようなものを手渡していた。おばさんはそれをボストンバッグに突っ込み、まるで借り物競走のような勢いで表へ駆け出して行った…。

…………佐藤理恵が、…犯人だって…？

そんな馬鹿な…。同姓同名の別の子の話なのか…？

いやそんなはずはない。佐藤理恵といったらB組のあの子だ。僕らに屋上での全てを打ち明けたあの佐藤理恵しかいない…！

彼女と直接話し、本当にキナ臭い話を腹を割って話し合ったから僕にはわかる。

佐藤理恵が犯人であるわけがないッ!!

佐藤理恵は本当にあの日あの時間、屋上にいたのだ。そして田無が転落する瞬間を見た唯一の目撃者だった。

確かに具体的な証拠があるわけじゃない。佐藤が言ったのを鵜呑み(うの)にしただけだ。……でも!!　あの佐藤が嘘を言っているなんて有り得ない!!　佐藤は真実を語った。それだけ

は間違いないのだ‼　だから田無が、佐藤に突き落とされたなんて証言をするわけがないッ‼

いや……今だからこそ一層冷静になろう。

もう一度、田無の自作自演説に戻ろう。田無は佐藤と仲が悪い。そして佐藤は実際にイジメのリーダー格だった。だから、佐藤に一矢報いてやりたいという気持ちがあるはずだ。………だから、突き落とされたと嘘をついて、警察に佐藤に突き落とされたと言い、濡れ衣を着せようとしている…⁉

いやいや、そんなのは馬鹿馬鹿しい…！

だって、そんなのを鵜呑みにして警察が佐藤を逮捕などするものか。確かに被害者が佐藤に襲われたと証言するのだから、警察は佐藤が犯人かどうか徹底的に調べるだろう。ここに至っては佐藤も警察に、立入禁止とはいえ屋上にいたことを打ち明ける他ない。……あとで学校には、立ち入ってはいけない場所にいたことを咎められるだろうけど、自分が潔白であることはすぐに証明できるに違いない。

警察が徹底的に科学捜査をすればすぐに佐藤への嫌疑は晴れるのだ。佐藤の靴の裏からの泥の採取とか、佐藤と田無の衣服の痕跡とか付着物とか。色々、色々！

だから、……田無が佐藤が憎くて仕返しがしたくて嘘をついたとしても、まったく何の意味もない。嫌がらせにさえ、なりはしないのだ……‼

同じ世代の同じ年、そして同じ学校に通う人間同士だからわかる。あの瞬間、佐藤は一切虚偽をしゃべらなかった！　そう、あの瞳には嘘の一片たりとも含まれてはいなかったのだ!!　だから僕は信じられる。佐藤は本当に田無には関わっていないと！

そして、嘘をついたとしても、それが警察にすぐに見破られてしまうことは、田無自身にもわかっているはずなのだ。むしろ、警察の心証を悪くすることを考えると、田無にとってはデメリットしかない。

佐藤に本当に罪を着せたかったら、佐藤を実際にあの場所に呼び出すなど、もう一工夫を加えたはずだ。実際に二階から飛び降り、怪我をする覚悟があったことを考えるとそれを怠ったことは、あまりに浅はかに過ぎる。

…………では、……田無はどういうつもりで、佐藤に突き落とされたなんて言ったんだ!?

脳裏に、あの屋上での会話が蘇る。…佐藤が帰り際に言ったことだ。

『私ね、不謹慎な話なんだけど。………田無さんの意識が戻るのが怖いの。』

『……どうして？』

『私には、田無さんが一人で落ちたように見えても、』

そこで佐藤は一度区切る。

『田　無　サ　ン　ダ　ケ　ニ　ハ自分ヲ突キ落トシタ相手ガ何者カ、見　エ　テ　イタヨウナ気ガシテ。』

全てを見ていた佐藤は知っている。田無が一人で転落したことを知っている。

…なのにどうして田無は、そ　こ　に　い　る　は　ず　が　な　い　佐　藤　に、突　き　落　と　さ　れ　る　というのかッ……!!

有り得ない有り得ない、その瞬間に屋上とプレハブ校舎に二人の佐藤理恵がいたことになる。

有り得ない有り得ない有り得ない…!!!

……もう僕には、この事件がまったく理解することができない。

本当に「お骨サマの呪い」は実在するのか。

あぁ…実在するんだろうな…。

呪いは実在する、「お骨サマ」も実在する。

髑髏の面を被りテルテル坊主のような身なりで僕らの中学校を闊歩し、生徒の悪戯を装いながら、人には絶対に起こせない呪いを振り撒いている。

もう今なら、僕ははっきりとこの異常な事態を受け入れることができた。

…だって、

この世の半分は、呪　い　で　出　来　て　い　る　の　だ　か　ら。

アンコール

その後のことは、僕ら生徒には何もわからなかった。

何も詳しいことを知らない生徒たちの方が、むしろ好き勝手に想像力を働かせ、噂話を楽しめているようだった。

佐藤から本当の話を聞かされた僕ら三人だけが、クラスメートたちの無責任な噂話に加わることなく、重苦しい気持ちであの事件の本当の意味を考えるのみだ…。

優花おばさんはその後、何も話さなくなった。

犯人が未成年者なのだからデリケートな事件になるのだろう。それを思うと、あの晩の電話で不用意に佐藤の名を出したのは本当に不用意としか言いようがないのだが。

だから、警察がどういう風に解決したのか。事件の真相は何だったのかは、僕がいくら聞いても教えてはくれなかった…。

だから僕ですら、何もわからない。

ただひとつ。誰にでもわかる形で残った唯一の事実は、月曜日から佐藤理恵の姿が消えたことだった。

Ｂ組の佐藤の席がぽっかりと空き、斜め前の田無の席と併せてとても異様な雰囲気だったという。
先生にいくら聞いても、佐藤理恵がどうしていないのか教えてはくれなかった。
全校集会で校長が事件を説明するかと期待したが、校長はまるで事件など初めからなかったかのように、いつもと変わらぬ眠い話をするのみだった。
ほとんどの生徒たちは、やはり噂どおり、佐藤が犯人だったのだと沸きかえっている。先生にそれを聞いてもよそよそしく、否定もしなかったため、佐藤逮捕の噂はやがて学校中に広まって行くのだった。
佐藤のその後は誰も知らない。
友人たちもかえって気の毒になって、佐藤の家に連絡を取ろうとはしなかった。だから、佐藤の身柄が自宅にあるのか、警察にあるのか、はたまた留置場のようなところにあるのかは誰にもわからなかった……。
………あれから時間も経ち、ようやく僕らにも事件について振り返る余裕が生まれた。だが、いくら振り返ろうとも、決して真相はわからなかった。
…僕らはあの日、佐藤にやはり騙されたのだろうか…？
佐藤は本当はプレハブ校舎の外階段にいた。その時、そこから屋上が見えることに気付き、そこにいたことにすればアリバイが作れると思い立った………。

いや、そんなことはない。

僕は今でも佐藤に騙されたとは思っていない。博之たちはやはり騙されていたのではと最近は憤慨するようになったが、…それでもそうなるまでにかなりの時間を要した。

つまりそれくらいに僕らは、……佐藤が真実を語ったと固く信じている。

佐藤が逮捕されたとなれば、それは間違いなく濡れ衣なのだ。……でも僕は、そんなのは警察の科学捜査で暴けると信じていた。その捜査が、本当に佐藤を犯人に違いないと断定したなら。…………もう僕には何が何やらわからない…。

プレハブ校舎へ行ってみた。

あの事件のあと、興味本位で近付く生徒が多いらしい。外階段は針金のようなものでがっちりと、上れないように封印されていた。

噂では、工事業者のような人と先生がここで話をしていたのを見た生徒がいるという。

あんな事件があった後だ。夏休みと同時にすぐ撤去工事に入るに違いない。

あの日、ここで本当は何があったのかを唯一知る、プレハブ校舎外階段。これがなくなれば、もう誰もこの事件の真相には近付けなくなるだろう。

そして、あの屋上の佐藤の隠れ家も変化があった。

今度は机を積み重ねてバリケードのように階段を塞いであり、以前のようにヒョイと柵を跨いでいけるような生易しいものではなくなっていたのだ。

博之が、乗り越えて屋上に行ってみようかと提案したので、特殊部隊ごっこのノリで周囲に誰もいないことを確認の上、行ってみた。
だが敵もさるもの。そう甘くはなかった。
屋上へ出る引き戸には、新しく鍵が設けられていたのだ。内側から外せる簡単なものではない。職員室から鍵を持ってこないと開けられない、ちゃんとした施錠だ。
おそらく佐藤は立入禁止の屋上にいたことを警察に証言したのだろう。その結果、学校側がそれを聞いて対処したに違いない。
だが、この対処は矛盾していた。だって、本当に立入禁止の屋上にいたならば、佐藤は犯人ではないじゃないか。
まるで、佐藤が屋上にいたという「事実」を隠すようで、何だか薄気味悪さを感じるバリケードだった…。
そして、僕らが一番忌まわしいと思っていた「お骨サマの呪い」。
一時は沈静化していたが、ある切っ掛けで再び学校で流行るようになっていた。以前ほど過剰なものではないが、すっかり定番の悪戯として定着した観がある。
その切っ掛けとは、…田無の復学だった。
かつてはヒステリックで、ちょっと笑い声が聞こえるだけで、自分を笑ったのだろうと摑み掛かったという田無は、復学後はまるで憑き物でも落ちたかのように、物静かな子に

変わっていた。
シャベルが妙なところに当たったため、脳に損傷があって人格が変わってしまったのでは……などという妙な噂が流れるくらい、復学してきた田無は人が変わっていたのである。
いや、大人しくという言い方はあまり的を射てはいない。……一種の凄(すご)みをまとって帰ってきたと言う方がいいかもしれない。
田無は「お骨サマの呪い」を受けて、そして帰ってきたのだ。
そして以前の田無とは違う雰囲気に、誰からともなく、本当の田無はあの日に死に、今の田無は実は「お骨サマ」の生まれ変わりなのでは……。などという妙な噂を立てられるに至っていた。
その噂によって田無は恐れられ、以前のようにイジメの対象となることは二度となかった。いや、それどころか田無だと知れば、人ごみが割(さ)けて道ができるくらいに畏怖(いふ)されているようだった…。
田無は自分がそういう扱いを受けていることをまんざらでもないと思っているのだろうか。そういう雰囲気にヒステリックになることはなく、友人もなく、一人静かに過ごしたという…。
そして「お骨サマの呪い」は二度と田無を標的にすることはなく、むしろ田無の悪口を言った人間を標的にするという新ルールさえ生まれているようだった。

最近では、田無を注意して「呪われた」先生が、学校中から総攻撃を受けているという。……先生すらスケープゴートにするのだから、もう学校の誰もこの呪いを馬鹿にできないだろう。

田無が卒業する時、この呪いも学校から卒業してくれるのだろうか。……早く呪いなどなくなって欲しいと思う僕にとって、呪いが田無と共生しているという事実はあまり面白いことではなかった……。

そうそう。「お骨サマの呪い」に関してはもう一つ話がある。それは狸神社のボヤ騒ぎだった。

どうも不心得者が、賽銭箱に煙草の吸殻を放り込んだらしい。それが元で賽銭箱が煙を吹くという騒ぎがあったという。その騒ぎで賽銭箱は撤去された。

……思えば、あの賽銭箱から「お骨サマ」は生まれてきたようなものなのだ。

それが煙を吹いて狸神社から姿を消すというのはどういう意味なのか。

「お骨サマの呪い」がついに燃え尽きて、この世から呪いが消え去ったということだろうか？

いや、僕はそうは思わない。

もはや「お骨サマ」は、狸神社などに住まう必要がなくなったのだ。賽銭箱という古い体を捨て、新しい宿へ飛び去ったのだろう。

その宿が何なのか、噂話も僕もすでに言及しているが、ここであえてもう一度取り上げたいとは思わない。

話では、焦げた賽銭箱の中から大量の硬貨が発見されたという。

どのくらいの額になったのか想像はつかないが、このような猫の額程度の敷地の忘れられた神社の賽銭箱としては有り得ないくらいの金額が入っていたという。

しかもその額はおそらく、硬貨によるものだけの金額だ。紙幣があったとしても、それは燃えてしまったに違いない。

……それを考えると、ふと思う。

野ざらしの賽銭箱が、薪じゃあるまいしそんなに威勢よく燃えるものだろうか。

不心得者が煙草の吸殻を放り込んだ時、賽銭箱の中にあった「たくさんの紙」に引火したのではないだろうか。

ボヤ騒ぎになるほど燃えるだけの紙幣が詰まっていたとは思えない。……となると、お賽銭ではない「たくさんの紙」とは何なのか。

多分、博之か亨が誰かに喋ったんだと思う。いつの頃からか、狸神社の賽銭箱に呪いの言葉と高額のお賽銭を入れると、「お骨サマ」が呪いを下してくれるという噂が立っていたからだ。

……それを思うと、燃えた「たくさんの紙」が何だったのか、嫌になる。

優花おばさんは言った。願うためにかけた努力が精神的な力を生むと。つまり、たとえ賽銭箱が燃えてしまったとしても、賽銭箱に入れた時点で、呪いを願った彼らには何らかの力が与えられているのだ。

だから、賽銭箱の中に入れられていた「たくさんの紙」は、呪いを望む手紙ではない。呪いを〝望み終わった〟手紙なのだ…。

この世の半分は、呪いで出来ている。

この世の半分は、呪いを望んでいる。

狸神社に新しい賽銭箱が置かれない限り、この呪いの儀式は潰えるだろう…。

今後もずっと、新しい賽銭箱が置かれないことを祈る他ない。

突然、後ろから肩を叩かれたので飛び上がった。

「よ！　友宏くん！　お久し振りー！」

「優花おばさん…！　どうしたんですか！」

「うん、今日は君の一家にお世話になったお礼のご挨拶に伺うことになってたんだよ。そしたら途中でたそがれる友宏くんの姿を見つけたってわけ。」

「お元気そうで何よりです。」

「うん。おばさんは元気だよ〜！　友宏くんも元気そうだね。それより、こんなところで

どうしたの？」
「………あ、いえ、………ただちょっと寄ってみただけです。」
「ここが、『お骨サマ』に縁のある場所だから、かなぁ？」
「…あはははははは…。もう『お骨サマの呪い』はごめんです。」
「君たちの学校はどう？　その後は呪いごっこは収まった？」
「前とは装いを変えてまだ続いていますよ。田無は今では『お骨サマ』の生まれ変わりってことになってて、田無の陰口を言うと骨を放り込まれるようです。」
「あっはっはっはっは！　やれやれ、子どもはたくましいなぁ。」
あの後は、おばさんは事件のことは何であろうと頑なに沈黙を貫いた。「お骨サマの呪い」という単語であってもだ。
そのおばさんの方から「お骨サマ」の名を口にしてきたのだから、それはほとぼりが冷めたということを意味するのかもしれない…。
今聞けば、……おばさんは全ての真相を話してくれるのだろうか。
「おばさん。…………誰にも口外しないから教えてください。」
「事件のこと？」
「……はい。……僕は佐藤と直接話をしたことがあるんです。その時、佐藤は僕にはっきり言ったんです。自分は犯人ではないと。…僕はその時の佐藤の目を見て、彼女は絶対に

嘘なんかついてなかったと、今でも信じています。」
「偉い偉い。女の子の言うことは信じるもんだよ。」
「でも、佐藤が犯人なんですよね？　どうして……いや、…どういうことなんですか⁉」
「友宏くん、一点誤解があるねぇ。……まぁ、君たちの学校じゃそういう噂になるんだろうか。少年法の悪い面が出たねぇ。」
「誤解って何ですか。」
「佐藤理恵を逮捕なんかしてないのよ。」
「え⁉　………そ、そんな馬鹿な……！　だって佐藤は現に…………！」
「佐藤さんは犯行時刻に本人の供述通り、屋上にいたことが確認されたんだよ。当時そこに間違いなく彼女がいたことを証言できる証人もいる。だから佐藤さんが犯人なんてことはないの。だから友宏くんは正しいよー。」
　学校全体が犯人扱いしても君だけは信じたんだね、偉い偉い。……おばさんはそう言い、僕の頭を撫でるような仕草をした。…でも僕には何のことやらますますわからない…！
「じゃあ、だって、…えっとえっと…‼　あの、おばさんはあの晩、電話口で言いましたよね⁉　ほら、田無さんの意識が戻ったって電話を受けた晩です。あの時、田無が犯人を見たって言って、佐藤さんの名前を…って…‼」
「それは転落時のショックで本人の記憶が混乱したからなんだって。意識不明になって短

くない期間が経っていたから、記憶に混濁があるのは当たり前なんだとか。」
「………え？　………え？　………え⁉」
「田無美代子さんはあの日、あの雨の中、自発的にプレハブ校舎外階段の二階踊り場へ上がった。そして転落した。」
「誰に突き落とされて⁉」
「犯人なんかいないんだよ。だって事件じゃなかったんだもの。単独事故だったんだもの。」
「そ、………そんなことって……ッ‼」
「調書によるならば、田無美代子はあの雨の日、〝ちょっとした気まぐれで〟プレハブ校舎に向かい、〝ちょっとした気まぐれで〟外階段を上った。そして転落したの。」
「ちょちょ、ちょっと待ってください！　そんないい加減なのでいいんですか⁉」
「だって単独事故だったって本人が認めちゃったんだもの。それでおしまいなんだよねぇ…。」
事件じゃなくて、……事故だっただって……⁉　開いた口が塞がらないとはこのことだった。
「じゃあ、どうして佐藤さんは逮捕された⁉」
「だから逮捕なんかしてないってば。」
「じゃあ、どうして佐藤さんは学校からいなくなったんですか⁉」

「…………ふーーーー……。」

優花おばさんはそこで区切り、大きくため息をついた。

聞かれれば話せるボーダーラインがここまで、という意味なのだろうか。

でも僕は釈然としなかった。本当に聞きたいのはここからなのに…！

「他の誰にも話さないって約束できるなら、話してもいいかなぁ…。」

「や、約束します…。」

「絶対、嘘をつかない？」

「は、はい…。」

「あはははははは、なら駄目だねーー！」

「ど、どうして！　ずるいですよ…！」

「サッカー部に友達がいるなんて嘘をつく子には教えられないなぁー。」

「…………ぅ…。」

優花おばさんはにやにやと笑うと、口ごもる僕の額を指で弾いた。…ちょっと痛かった。

「すみませんでした……。」

「『お骨サマの呪い』ってのを考え出したのは、友宏くんだったんだね？」

「僕と、友達二人で考えました…。」

「呪いを解くにはお賽銭ってのが変なんだよねぇ。聞けば、賽銭箱の鍵はダイヤル式のシ

リンダー錠。しかも君たちはかつてこの神社を溜まり場にしていた。毎日こつこつナンバーを試す内に、偶然開けられるようになってしまった。そういうことかなぁ？」
「…………は、……はい。」
「ボヤの後、焦げた賽銭箱から相当多額のお金が出てきてるらしいね。…短期間でそこまで貯まったとは思えないし。…ということは友宏くんたちは、賽銭箱の鍵は外せたけど、中身には手をつけなかった…ということかな？」
………そういうことにしようという気が一瞬芽生えたが、優花おばさんを騙せるわけがない。それに僕はもう、「お骨サマの呪い」など御免だった。
「……いえ、最初の頃に一、二度…。三人で分けました。」
「あー！ーーもーーーー!!　私ゃ聞いてなかったことにしよう！　そのお金、ちゃんと神社に返すこと！　賽銭箱はなくなっちゃったけど、ご神体のところにでも置いておけば、町会の人が見つけてお賽銭だと思ってくれるでしょ。」
「す、すみませんでした…。きっと返します…。」
「学校では二度と呪いごっこなんかしちゃ駄目だよ。それも警察に連絡がいくような悪戯なんて論外！」
僕はおばさんにみっちりお説教をもらい、……今日までの罪を、初めて口に出して謝った。

そう言えば、…僕はまだ田無に謝っていない。謝らなければ……。
「ガミガミガミ……。……ふぅ。まぁこれで今回は許してあげよう！」
「あ、ありがとうございます…。」
「じゃあ約束だから話そう。友達にも絶対内緒だよ!?」
「はい。教えてください。一体、……どういうことなんですか。」
「……うん。まず言えることは、さっきも言ったとおり。田無転落は事故だったということ。これ自体には誰も関わっていない。現場検証の結果からも、田無以外の痕跡は認められなかったし、田無自身、単独であったことを認めた。だからこれは純然たる単独事故なの。」
「………………単独、…事故。」
「でもねぇ。……もっともっと大きい目で見ると、これは田無さんの単独事故を鍵にして巧妙に仕組まれた〝計画〟だったの。……罠と言ってもいいんだろうねぇ。これは私の憶測も含むし、警察の見解ではないことをよく念頭に置いてね。」
「罠って、誰かを嵌めるワナですか？　誰が、誰を！」
「その話をする前に、田無美代子と佐藤理恵の話をしなくちゃならないの。この二人の関係は知ってる？」
　確か僕が聞いてる範囲では……、小学校時代は仲が良かったけど、中学に入ってから仲

違いして犬猿の仲になったっていう話らしい。
「仲違いの理由にも鍵があったの。友宏くんは多分、全然知らないと思う。こういう話は女子のコミュニティの内側にしか流れないからねぇ。」
「仲違いの、理由…？」
「田無美代子は彼氏がいたの。ただしこれは過去形。田無と彼氏は別れ、その後、田無に代わって佐藤が彼氏とくっ付いた。女子の世界では寝取ったとまで言われてるみたいねぇ。知ってた？」
もちろん僕は女の子と付き合ったことなどない。…色恋沙汰（ざた）の話など無縁だ。
「ぜ、全然……。」
「つまり田無にとって、佐藤は恋人を寝取った泥棒猫というわけだね。もちろん佐藤も、彼氏の元彼女なんて目障（めざわ）りなわけ。それが二人の仲が悪い真相なんだよ。」
「えっと、じゃあつまり……、罠というのは…、田無が、佐藤を？　え⁉」
罠というのはAがBを仕留めるために仕掛ける。AとBに当てはまる人名は、田無と佐藤しかない。つまり、田無が佐藤を仕留めるか、佐藤が田無を仕留めるか、そのどちらかの組み合わせしか有り得ないのだ。
今の学校では、佐藤の姿が消え、田無が復学している。……ということは……。
「そう、つまり今回の事故は、田無が佐藤を罠に嵌めるための芝居だった可能性があると

いうことなの。……女は怒らせると怖いからねぇ。」
「ちょ、ちょっと待ってください。…どうして田無が事故を起こすと、それが佐藤を罠に嵌めることになるんですか⁉」
　さっぱり意味がわからない。風が吹けば桶屋が儲かると言われているようなものだった。
「佐藤理恵の昼休みのアリバイが曖昧だという話は、学校では有名にならなかった？」
「なってました。佐藤が昼休みにどこにいるかわからないって話になって、それで佐藤が犯人に違いないという話になってました。」
「佐藤が昼休みのアリバイをはっきりできない理由はひとつ。それは昼休みが彼氏との逢引の時間だったからなの。」
「あ、……逢引……。」
「逢引の場所が、屋上だった。階段室から屋上に出て、」
「し、知ってます。階段室のぐるっと裏側の、死角ですよね…。」
「あれ、それは知ってるんだねぇ？　そう。その場所が佐藤と彼氏の逢引現場だったの。屋上は過去の煙草事件の絡みから立入禁止。先生が定期的に巡回していたから、生徒は誰も近寄らなかった。だから死角。」
「そうです。で、立入禁止の場所にいたからこそ、佐藤は自分がそこにいたと明かせなかったわけですよね……？」

「残念でした。それは逢引を明かせなかったからなの。」
確かに……不純異性交遊は校則違反のはずだ。確かに校内で逢引ってのは……ちょっとまずいのかもしれない。
「ほら友宏くん！　そこで考えるのをやめない！　もっともらしい理由がひとつ提示されたからと言って納得しちゃいい刑事にはなれないよ～ぅ？」
「ということは……え…？」
「友宏くん、君だってわかってたじゃない。屋上は過去の煙草事件で立入禁止。先生が常時巡回していたから生徒は近付けなかったはずだよ？」
「えっと、…でもそれは、佐藤が階段室の裏側の死角にいたから、たまたま見付からなかっただけで……。」
「屋上へ出る引き戸は常時施錠。構造上、屋上へ出たら施錠はできない。ということは、見回りの教師は引き戸の鍵を見れば、生徒が屋上に出ているか出ていないか一目でわかるんじゃないかなぁ？」
「…あ、………そうか。たとえ佐藤が死角に隠れていたとしても、屋上に出ていることを隠せるわけではないんだ……！」
「そういうこと。なのに昼休みに屋上で逢引している佐藤は一度も巡回の教師にバレることはなかった。ということは…？」

「…………………え、…………………と…、」
「答えを言おう。正解はその教師。つまり巡回の教師が佐藤の逢引相手、彼氏だった。教師と生徒の禁断の恋だったってわけだねぇ。…話が見えてきたかなぁ?」
「じゃあ……田無とその先生が最初付き合っていて、それで佐藤がその先生を奪って……。」
「そういうこと。田無は彼氏を寝取った佐藤と、自分を捨てた教師に復讐するため、二人の逢引を暴いてやろうと思ったの。禁断の恋だもの、発覚すれば生徒は謹慎。教師は異動は免れないもんねぇ。」
「ということは……佐藤が学校にいないのは警察じゃなくて………学校による処分!?」
「そう。謹慎処分を数日間食らったって聞いてるわねぇ。でもその後も不登校を続けてるみたいよ。微妙な世代だから、やり直しが利く内に早く立ち直ってほしいんだけどねぇ。」
……………そう言えば、年度途中なのに先生が一人、異動していたことを思い出す。僕らは先生の人事の都合なんてわからないから、深く気にも留めなかったけれど……。
「理科の尾澤先生、異動されたでしょ。教え子とのラブロマンスがバレちゃったからなの。もう数ヶ月待てば佐藤さんも卒業して、もうちょっと付き合いやすくなったのにねぇ。それが若さというべきか。」
あの日、あの雨の昼休み。いつものように、佐藤と尾澤は屋上の死角で逢引をしていた。その時、二人は偶然気が付いたのだ。プレハブ校舎の外階段で生徒が転落したことに。

尾澤はすぐに教師としての責務を思い出し、生徒が怪我をしたぞと叫びながら階下へ降りていった。それで職員室から何人かでプレハブ校舎に向かい田無転落が発覚。
みんな気が動転していた。第一発見者が誰で、木立に囲まれて死角であるはずの外階段の田無をどうやって見つけたのか深く考えなかった。
「これらは全て、田無が仕組んだ罠だった。ただ、田無自身、予期せぬ失敗が二つあったの。一つ目はそれほど問題ではない。自分の転落に、罠に嵌めたかった佐藤と尾澤たちが一番最初に気付いたということ。彼女の目論見(もくろみ)では、彼らには昼休みが終わるまでたっぷり、いつものように屋上で逢引してくれた方がよかった。でも、それが不幸中の幸いだったんだよねぇ。それが二つ目の誤算に関連する。それは、転落時に意識不明になるなんて思わなかったこと。……だから屋上の二人に気付いてもらえたのは本当にラッキーだったんだよ。気付かれなかったら、彼女はどれだけ放置されていたかわからない。生命にも支障があった可能性があるもんねぇ。」
「誤算がなかったら……、田無の計画はどういうことになっていたんですか。」
「うん。それは田無の意識が戻ってからの部分を繋げればよくわかるよ。彼女は転落して適当に怪我をする。そして多分、職員室まで這(は)って行こうと思ったんじゃないだろうかねぇ？　そして最大の目的がこれだった。自分は佐藤理恵に突き落とされたと偽証すること。」
確かに、田無は意識が戻って一番最初に言った。佐藤に突き落とされたと。その言葉は、

彼女の計画通りに進んでいたならば、転落したあの日に言うべきことだったのだ。
「僕も田無が何かの目的で自作自演をしているんじゃないかとは考えてました。でも、佐藤に突き落とされたなんて嘘、警察が調べればすぐに看破されちゃうじゃないですか。だからそんなの全然意味がない。……それでさっぱりわからなくなっちゃって。」
「うーーーーん、惜しいなぁ友宏くんは。考える方向は合ってるのに、いつもそこで考えるのをやめちゃうねぇ。いい？　田無の目的は自分を突き落とした犯人が佐藤だって偽証して濡れ衣を着せることじゃない。そんなのはあっさりバレるもんね。君の言うとおり全然意味がない。田無の真の目的は、その疑惑を晴らすために佐藤にアリバイを話させることだった。」
「アリバイを話させる……。つまり、……本当は屋上にいたということを……？」
「そう。つまり、佐藤は田無転落の濡れ衣を晴らすためには、自分が屋上にいたことを公に認めなければならなかったということなの。警察はそれで充分。佐藤には屋上のアリバイがあり捜査上からは外れる。でも、学校はそれでは済まないの。佐藤は生徒が入れないはずの屋上にいた。そして、昼休みに生徒が屋上に出ていないか、まめに巡回している若き男性教師。……んーー、若さゆえなのか愛ゆえなのか。結局、尾澤って先生がね、当日の昼休みの間、佐藤が屋上にいて自分はそれを証言できるって、そう言っちゃったわけよ。それで学校側は尾澤に事情の説明を求め、……破綻しちゃったわけなんだねぇ。」

「それがつまり、…………田無の、罠…。」
「うん。私はそう見てる。田無は本当のことを言わなかったけれど、……同性の勘かねぇ？　あははは、私には何となくわかったんだよね。まぁもっとも。田無が何かの法律に違反したわけじゃない。勝手に飛び降りて勝手に大怪我をしてお騒がせしただけ。だからその後のことは警察の知ったことじゃない。私が田無に関わることも、田無が何を考えていたのか探ることも、もうないんだけれども。」
「……………………………。」
「友宏くんさ、私に言ったよね。田無へのイジメのいくつかには本物の呪いも含まれているんじゃないかって話。例えば誰も触れていないカバンに骨が入っていたとかという話。」
「はい。……じゃあ、……それも田無の計画の一部……？」
「多分ね。……田無がこの罠を実行に移すには、自分の転落事故が事件の可能性もあるという緊迫した設定が必要だった。じゃないと警察が動かないからね。田無の計画には警察の出動が不可欠だった。」
「警察沙汰にならないと、佐藤の昼休みのアリバイという問題に進展しない…。」
「そう。だから田無は、学校中に自分が苛められていてどんどんそれがエスカレートしている、いつかは事件にまで発展するかもしれないという危機感を演出する必要があったんじゃないかと思うんだよね。」

「つまり、………誰も触れないカバンから骨が出てきたとか、そういう話は全て…、」
「うん。多分、田無の自作自演だねぇ。ところが、誰もカバンに触れてないことをはっきり見ていた人物がいるとは思わず、それで本当の呪いでは…なんていう変な話になっちゃったんだよ。これについては仕組んだ田無自身も誤算だったと思う。多分、そういう噂を聞いて笑ってたはずだよ。君たちだって、呪いが広まり始めた初期、そういう噂が立つと面白く感じなかった？」
「…………そうですね。自分の仕掛けた悪戯が神格化されると、何だか嬉しい気持ちになったもんです。」
「これで全ての説明になったかな？」
「あ、……あと、実は以前、賽銭箱に田無を呪ってくれと書いた手紙とたくさんのお金が入ってたことがあったんです。これも、田無の自作自演…？」
「多分、そうだと思うけど……。でも、だとすると、………田無さんはなかなか頭がいいねぇ。『お骨サマの呪い』と、呪いを解くにはお賽銭というキーワードから、君たちが背後にいることを看破してたことになるよ。……なるほど……、それでお金を入れれば、君たちが有頂天になって悪戯をしてくれるに違いないと…。そりゃそうよね。自分の自作自演の呪いだけではインパクトが足りないものね。………なるほどなるほど…。」
「つまり、……田無美代子は僕らの存在を完全に見破った上で、…自分の計画に取り込ん

だ、ということですね…？」
「多分そうなんだろうねぇ。………しかし、中学生にしちゃ賢すぎるね。将来は刑事になるか、さもなきゃ刑事に追われるかのどちらかになりそうだよ。二課の世話にならないことを祈るねぇ。」
「二課って？」
「知能犯専門。」
……なるほど。納得する…。
「じゃ、これで今度こそ全部話したかな？　どう？　これで事件にも納得がいった…？」
「…………はい。やっぱりこの事件は、……呪いだったってことがわかりました。」
恋人を寝取られ嫉妬(しっと)に燃えた少女の恨(うら)みが、「お骨サマの呪い」を通じて佐藤と尾澤を呪い殺した…。……学校という世界から放逐(ほうちく)されたなら、それは殺されたと称してもいいに違いない。
「友宏くんも女の子に呪われないように気をつけなねー。」
「はい。本当に怖いですね。よくわかりました…。」
田無は、佐藤と元彼を破滅させるため、色々と思案したのだろう。
そして、二人が昼休みに逢引していることを掴み、そこから罠に掛ける事を考え付いた。
でも、この罠を仕掛けるには、絶対確実でなければならないことがある。

そう。決行の瞬間に「絶対、二人が屋上で逢引中である」という確証が必要だったはずだ……。

「あ、……そうか！　……それで、プレハブ校舎の外階段なのか……！」

「うん？　田無がなぜあの外階段から飛び降りたか、ってこと？」

「そうです。誰も見てない場所ならどこでもよかったわけじゃないんだ。佐藤たちが逢引中であることを確認する必要があったんだ…！　そうですね⁉」

それであの外階段の二階踊り場なのだ。あの場所を屋上からしか見ることができないように、屋上のあの場所だって、外階段の二階踊り場からしか見ることができない！

「多分そうだろうねー。屋上で逢引しているという噂を掴んだ田無は、実際に現場へ行き、その場所から見える唯一の場所がプレハブ校舎の外階段であることを予め確認してたんだと思うよ。」

……完全に煙に巻かれ、優花おばさんに丹念に種明かしをしてもらいながらでも、ちっとも正解を出せなかった僕だが、最後の最後でひとつくらい正解は出せたようだった。

だがおばさんは、まだまだ甘いなという風に笑う。

「え、…まだ詰めが甘かったですか…？」

「ん～～～～、まだちょいと甘いねぇ。この辺は人生経験の差だよ。友宏くんもいっぱい勉強しなねぇ。」

「え、……じゃあ、他に外階段の踊り場を飛び降りの場所にした理由があるんですか⁉」
「……んーー、別に田無がそうだと言ったわけじゃない。あくまでもおばさんの想像なんだけどね。……ねぇ友宏くん。田無さんが転落した詳細な時間ってわかる？」
「えっと、……よくはわかりませんけど、佐藤が転落の瞬間を見てたはずだからわかるはずです。」
「佐藤と尾澤の証言によると、昼休みの終わる五分くらい前だったたって言ってるね。」
確かそれくらいの時間だったろうと思う。僕ら一般の生徒に事故発生の波紋が広がったのは、まさに昼休みが終わろうという頃だった。
「その佐藤は、給食が終わるとすぐに屋上に向かってる。尾澤もそれは同じだから、多分、いつもそうするのと同じくらいの時間、ゆっくり二人きりでそこで過ごせたと思う。」
二人で一緒に戻れば怪しまれるかもしれないから、多分、一人ずつ階下に戻るだろう。それを考えると、昼休みの終わる五分前とはまさに、二人が別れる間際に違いあるまい。
二人がいつも過ごすのとほぼ同じ時間を、その日も過ごせたに違いない。
「さて、一方の田無もほぼ同じ。給食が終わるのと同時に姿を消してる。でも、転落が起こるのは昼休みの終わり間際。…………ほらほら考えて？」
「えっと、……うんと、………、その間、田無はどこにいたか…ですか？」
その日は雨が降り、プレハブ校舎の周りにはひと気がなくなる絶好のタイミング。だか

ら田無はいよいよ計画を実行に移そうとプレハブ校舎へ向かうはず…。
…………でも、教室からプレハブ校舎までせいぜい掛かっても五分だ。だいぶ時間が余る。
「………何かの準備をしてたのでしょうか。……でも、……飛び降りるのに何の準備もいらないし………。……まさか、シャベルを準備して埋めていたとか…?」
優花おばさんは、残念〜と笑いながら僕の頭をポンポンと叩く。
「田無は給食が終わったらすぐにあのプレハブ校舎に向かったんだと思う、すぐにね。そして外階段を上がり二階の踊り場から屋上を見上げていた。」
教室からプレハブ校舎に行くのと屋上に行くのに掛かる時間はそう差はないだろう。
ということは、…佐藤と尾澤が待ち合わせする一番最初の時から田無はそこにいたことになる。
「さぁヒントは出揃ったねぇ? 給食が終わって田無も佐藤もそれぞれの場所へすぐに向かった。だから田無も、佐藤たちの逢引の確認は給食後のすぐの時間に終わっている。にもかかわらず、転落発生が昼休みの終わる直前。な〜ぜだ?」
「えっと、………田無の計画は、昼休みに屋上にいる佐藤たちに突き落とされたと偽証するのが目的…。ということは佐藤たちが屋上にいるのを確認できた時点ですぐに実行すればいいはず……。なのに…、……どうして長い時間、躊躇したんだろう……。」

二階とはいえ、決して低くない高さだ。僕も、塀程度の高さならあっさり飛び降りてみせるが、二階はいくらなんでもちょっと怖い…。
…田無は自分の計画とはいえ……、飛び降りるのにやっぱり度胸が必要だった…？
いや、そんな情けない理由ではないだろう…。では……一体……？
「………もう一個ヒントがあるけど、友宏くんには出したくないなぁ。でもまー、もう中学三年だもんねぇ。そう子どもでもないか。ラストヒント。尾澤のジャージから開封したゴムの袋が出てきた。」
「ゴムの袋って何です？」
「…あーごめん、わかんなきゃいいや。じゃ答えを言うね。」
田無は雨の中、一人プレハブ校舎の外階段を上り、屋上を見上げた。
佐藤と尾澤が秘密の待ち合わせ場所で会い、逢引をしているのをずっと見ていた。
かつては尾澤が自分に愛を囁いてくれた口を、佐藤が塞ぐのをずっと見ていた。そのことも、その後の行為も、ずっと、ずっと、全部。
それをどんな気持ちで見ていたのだろう。
かつての彼氏を奪った憎い相手。そしてかつて自分を愛してくれたのに、あっさり乗り換えた憎い相手。
そんな二人の汚らわしき逢瀬を眺めて、ただハンカチを噛みながら悔しがっていたとで

も？

「……呪ってたんだよ。」

「呪ってた……。」

「うん。憎くて憎くて仕方がない二人が、今日決行するこの計画で破綻しますようにと、呪って呪って呪って。憎んで憎んで憎んで。……もし田無に祈る対象があったならば、きっと祈っただろうね、一心不乱に祈っただろうね。呪え呪え呪えと頭の中がそれだけでいっぱいになってしまうくらいに。かつて愛した人が他の女と体を寄せ合うのをじっとじっと見上げながら。眼球が飛び出すくらいに睨みつけながら、きっとね。……そういう時間が、給食が終わってから、昼休みが終わる間際までの時間の正体だと、私は思ってる。」

願掛けは、祈る強さの熱量で効果が宿る…。

「どれほど呪ったんだろうね、田無は。……私はその時間のことを思うと、何だか恐ろしくって仕方がないよ…。」

あくまでも私の想像だよ、とおばさんは念を押すが、…多分、間違ってはいないに違いない……。

「……何だか明日から学校に行くのが怖いです。」

「あっはっはっは！　男子は腹が立ったら仕返しをする生き物だけど、女子は憎かったら呪う生き物だもの。ということは、クラスの半分は呪いがもうもうと立ち込めてるっ

てことになる。それに誘われて悪霊なんかもいっぱいやってくるって話だよ。だから学校には特に怪談が多いってわけ。まー、鈍感な男子にはどうでもいいことでしょ。男子って霊感が鈍いらしいし。」
「……じゃ、じゃあ女子は、毎日、そんな立ち込める呪いの中で生活してるんですか？」
「そうよ？　知らなかった？」
おばさんはちょっと怖い冗談くらいのつもりで言っているのだろう。でも、今の僕にはとても冗談には聞こえなかった。
僕はもう、身に染みて理解していた。

この世の半分は、呪いで出来ているのだ…。

〈了〉

田無美代子と踊ろう

通信簿の中身に一喜一憂したら、取りあえず学業の悩みは忘れて夏休みだった。…もっとも中学三年の夏休みなど、バケーションにはなりえないのだが。
生徒たちが次々と下校する中、僕だけはその流れに逆らって校舎裏へ行った。
プレハブ校舎はまだ取り壊されてはいない。
校舎内は使わなくなった文化祭の看板などの倉庫にされていたが、それらは全て処分され、全ての部屋はガランとしていた。おそらく、夏休みに入ったらすぐにでも撤去するつもりだろう。
……僕はあれだけ深く「お骨サマの呪い」に関わり、田無の事件に関心を寄せながら、ここを訪れることはほとんどなかった。
本当はもう二度と近寄ろうとは思わなかった。…でも、事件の全てがわかり、夏休みが明けたらもうなくなっているだろうという感傷が、なぜか僕の足をここへ運ばせたのだった。
外階段は相変わらず上れないように針金で封鎖されていた。………その時、ぎょっとする。その外階段の二階踊り場に生徒が背を向けて立っていたからだ。

僕はぐるっと回り、園芸部の畑に踏み入ってその生徒を見上げた。
………わかっていた、想像がついていた、誰だかわかっていた。
「…………田無さん…………。」
「…………こんにちは。」
「こ、………こんにちは。」
僕は田無とはまったく面識がない。だから言葉を交わすのはこれが初めてだった。
「ごめんなさい。私、あなたの名前を覚えてないの。他のクラスかしら？」
「…うん。A組の宮島です。多分、これが初めての挨拶になります。」
「そうなんだ。ごめんね。三年間も同じ学校に通っていたのに一度も挨拶しなくって。」
そう言うと、田無は、佐藤に負けずに長くて美しい髪を翻す仕草を見せるのだった。……木立からの木漏れ日を背負い、それは不思議な神々しさを感じさせた。
不思議な美しさ、やさしい笑顔なのに、………どこか、冷たい。そんな眼差しが、じっと僕を見下ろしていた。
それは彼女と僕が立つ高さが違うだけではない。………たとえ同じ高さの床の上に二人が立っていたとしても、きっと感じたに違いない高さの違和感だった。
「…………初めて挨拶をするのに、私の名前を知っているのね。宮島くん……？　私が有名人だから、………かしら？　くすくすくすくす。」

「そうかもしれないですね。今や『お骨サマ』の生まれ変わりであるあなたを知らない人間は学年にいないでしょうね。」
「……………そう私をみんなが呼ぶのは知っているけど、私に直接言った人は初めてよ。……宮島くんは面白い人なのね。くすくすくす。」
そう、この笑い声が、彼女の冷たさと距離感を引き立てるのだ。
まるで僕を虫籠越しにでも見ているような。そんな気持ちにさせるのだ。
「私が恐ろしくないの？　……私に話し掛けただけで『呪い』にかかった人もいるのよ？　あなたも私と縁を持って、そんな目に遭ったら不愉快でしょう…？」
「……………………………………田無さん。」
「何かしら？」
「……………………あなたは、呪いを操れるようになったことを、楽しんではいませんか？」
「くすくすくす、……そうね。否定はしないわ。とても楽しいわよ。あなたたち一般生徒がこの学校にいたことがどんな記録に残るというの？　卒業アルバムに小さく名前を残し、資料室の奥に積まれて埃にまみれるだけ。……でも私は違う。私は呪いとなる、祟りとなる。私の名を誰もが忘れても、私という存在が呪われて死線を彷徨い、呪いと共に蘇った物語はこの学校にずっと残るでしょう。それは私が永遠に記録されるということ。あなたたちのように、埃にまみれた名簿の一つの名前ではない。今後この学校に入学して

くる生徒たちに延々と受け継がれ、いつまでも脈々と残り続ける呪い、祟り、怪談。………私はこの学校という空間で、永遠に生き続けるのよ。」

二階の踊り場が、まるでオペラの舞台のよう。

彼女は美しい木漏れ日が作る神々しい風景を背負いながら、くるくると舞うようにしながら笑った。

「……僕は、ついさっきまであなたに謝ろうと思っていました。でも、今の話を聞いてその必要がないことを知りました。」

「…………謝る？　どうして…？　…………………………。」

やはり……優花おばさんの言うとおり、彼女は頭が良過ぎるのだ。……僕のいくつかの言葉を聞いただけで、僕が何者で、なぜここに現れてなぜ彼女の名を知っていたのかを全て理解してしまっている…。

「そう。…………あなたが私を生んだのね。」

「…………お前なんか生み出した覚えはない。」

「くすくすくす。親はなくとも子は育つとも言うわよ。……初めまして、お父様？　あなたに生んでもらったから、美代はこんなにも立派に育ちました。」

「……そうだね、君は立派に育ち過ぎた。君はこれ以上、ここにいていい存在じゃない。」

「あら、お父様…、生み出しておきながらそんなお言葉はあんまりですわね。せめて娘の立派な成長を讃えてほしいというのに。くすくす。私はあなたに生んでくれたことを感謝しているのに。」
「感謝なんかいらない。だから君はいるべき世界へ帰れ。」
「くすくすくす…！　あなたが望むなら、あなたの嫌う全ての相手に呪いを下そう。あなたの敵は私の敵。あなたの望まない全てを、あなたの世界から放逐しよう。それが娘にとっての、お父様への務めですもの。さぁ私を讃えなさい。そして認めなさい、受け容れなさい。我こそは現世に降り立った常世の理。あなたが生んだ永遠を生きる法則にして存在にして祟りの具現そしてあなたの娘なんだもの！　くすくすくす、あっはっはっは、あーっはっはっはっはっはっはっは‼」
「…………………………。」
「残念ですお父様。親に祝福されぬもまた呪いの呪いたる所以なのか。くすくすくす！　さすればこれにて閉幕と致しましょう。またいずれ何処かでお会いいたしましょう。くすくすくす‼」
田無が、……いや、田無だけど田無じゃない何者かが、踊り場の柵にまるで鉄棒か何かのようにもたれかかりながら体重を預け、上半身を大きく乗り出した。何をしようとしているのか嫌な予感が電気のように過った。

「…………や、……やめろ…!!!」
「それではご機嫌よう、お父様。くすくすくす。」
冗談だとは思わなかった。……だから、僕は踊り場の下へ駆け寄る。
まるで鉄棒を前転でもするかのように。…ふわっと田無の体が舞い、宙を踊るようにしながら落ちる。…それはきっと、あの日あの時あの昼休みと同じ墜落。
人間が一人落ちてきたら、きっとものすごい重さが掛かるだろう。腕が折れるかもしれない、……とは、あまりに咄嗟過ぎて思わなかった。
ひとつ言えたのは、……天より舞い落ちる羽を腕の中に受けたような、この世のものとは思えない軽さ。
……僕は彼女の体を受け止め、…しばし呆然とするしかなかった。
田無の顔が近い。田無は僕の顔をまじまじと見ると、さっきまで浮かべていたうっすらとした微笑を改めて浮かべるのだった。それが感謝するものなのか嘲笑するものなのかは区別がつかない。
僕は田無を腕から解放する。田無には、僕が受け止めなかったら大変なことになっていたという自覚はまるでないようだった…。
「ありがとうね、お父様。私を助けてくれて。」
「……………………お前を助けるわけじゃない。」

「あら、…………くすくすくすくす、それは悲しいお言葉ですこと。」
足に何かがぶつかる。それが何かと見下ろした時、背筋が凍った。
それは……地中に埋まり先端を尖らすシャベルだったからだ。
僕が受け止めなければ、あの日とまったく同じ再現になったかもしれないのだ。………いや、……意識不明という結末まで同じなのかはわからない…。本当にこいつが望んだ結末に今度こそなったのかも……！
「残念。…………………美代は永遠になり損ねましたわね。くすくすくす、あはははははは！」
「君は永遠なんかじゃない。ただの怪談だ。………怪談は夏の幻想に過ぎない！」
学校は今日から夏休みになって誰もいなくなる。怪談も呪いも祟りも、それを言い伝えてくれる人間たちに寄生しなくては、生きられない。
だから「お骨サマの呪い」などというその場限りの怪談は、今日でその命が潰えるはずなのだ……！
「そうですわね。これから数十日にもわたってここには人がいなくなる。……それで私が消えてしまうようでしたら、私は所詮その程度の存在だったということ。でもお父様？ひと夏を越えてもし私が永らえたなら。……もう私の存在はお父様でもどうにもなりませんわよ……？」

「……今の時点でも、どうにかなるとは思えないけどね。」
「あらあら、正直ですこと。くすくす。……ならばお父様、ひと夏を越えてまだ私が永らえていたならば、その時は私を娘と認めてくださいます…？」
僕たちは何という奇妙な存在同士なのか。
僕は目の前にいる存在が田無美代子という同じ学年の生徒の容姿をしていながら、………現世に存在してはならぬ存在であることを認識しているのだ。
ここは人間の住む世界だ。全ての現象は人間が起こし、人間によって説明できて、人間が解決できる。そういう世界なのだ。他の世界の法則など紛れ込んではならないのだ…！
そして日の角度がわずかに変わり、美しい木漏れ日が薄れた頃、そいつは踵を返す。
「ではまた、お父様。夏休みが終わったらまたお会いしましょう？」
「ではまた、田無美代子さん。夏休みが終わったら初めて君に会えるのを楽しみにしています。そうしたらその時に改めて謝らせてください。」
「くすくす、あはははは、はーっはっはっはっはっは…！」
名前しかなかった呪いが姿を持ち、歩いて笑って、木漏れ日の中を去っていく。
そうさ、これは初夏の真昼の白昼夢。
暇つぶしに落ちこぼれの三人組が生み出した、お手製のチープな怪談のほんの余談。

この世の半分は呪いで出来ている。
この世の半分は呪いを欲している。
この世の半分は呪いが支配している。
ならこの奇怪な出会いも、この世の右半分と左半分が出会っただけのこと。
夜に見るなら漆黒(しっこく)の悪夢。昼に見るなら甘い白昼夢。

そうさ、これは初夏の真昼の白昼夢。

暇つぶしに落ちこぼれの三人組と私が生み出した、お手製のチープな怪談のほんの余談。

退屈の水槽では窒息してしまう私たちには、これくらいの遊び心が必要なんだもの。

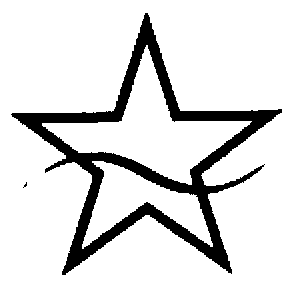
怪談と踊ろう。私と踊ろう。だけどあなたは階段で踊ってね…。

〈完〉

本書は『ファウスト』２００５年Vol.6（冬号）SIDE-A・SIDE-Bに掲載されたものを、改稿のうえ星海社ＦＩＣＴＩＯＮＳ化したものです。

Illustration　ともひ
Book Design　Veia
Font Direction　紺野慎一

使用書体
本文 ——— A-OTF 秀英明朝 Pr5 L＋游ゴシック体 Std M〈ルビ〉
見出し ——— A-OTF 秀英初号明朝 Std H
柱 ——— A-OTF 秀英明朝 Pr5 L
ノンブル ——— ITC New Baskerville Std Roman

星海社
FICTIONS
リ1-01

怪談(かいだん)と踊(おど)ろう、そしてあなたは階段(かいだん)で踊(おど)る

2012年3月15日 第1刷発行 定価はカバーに表示してあります

著者 ―――― 竜騎士07(りゅうきしぜろなな)

発行者 ―――― 杉原幹之助(すぎはらみきのすけ)・太田克史(おおたかつし)
編集担当 ―――― 太田克史
編集副担当 ―――― 平林緑萌(ひらばやしもえぎ)
発行所 ―――― 株式会社星海社
〒112-0013 東京都文京区音羽1-17-14 音羽YKビル4F
TEL 03(6902)1730 FAX 03(6902)1731
http://www.seikaisha.co.jp/

発売元 ―――― 株式会社講談社
〒112-8001 東京都文京区音羽2-12-21
販売部 03(5395)5817 業務部 03(5395)3615

印刷所 ―――― 凸版印刷株式会社
製本所 ―――― 加藤製本株式会社

ISBN978-4-06-138825-3 N.D.C913 258P. 19cm Printed in Japan